寺がある。其後の山は卽ち琴彈山で、此山から麓の海濱有明濱までの大地域は、明治三十年に開拓されて、琴彈公園と呼ばれてゐる。觀音寺驛から、豐濱、箕浦の二驛を過ぎて、川之江に着くと、其處はもう伊豫の領分で、それから尙西進すると、右方瀨戸內海の海面には、三島海賊衆の根據地であつた三島群島の點在して居るのが遠く見渡される。其慓悍明人を震駭せしめたといふ八幡船隊は、此の三島海賊衆の組織したものであつた。此附近の海面は、有名な燧灘で、高松から來た讃岐支線は伊豫土ノ驛限りで盡きてゐるが、ズツと海岸に沿うて國道を前進すると、中山川の流域あたりから、道は漸次河谷に沿うて西南の方向を取始める。其邊から櫻樹、川上の諸村を過ぎて橫河原まで行くと、其處からは、又伊豫鐵道の橫河原線が通じてゐる。

此邊から東南を見ると、遠く土佐の國境に當つて一座の高山の峙立してゐるのが見える。眞鑑造の石鎚神社があるのを以て有名な伊豫の石鎚山といふのがそれで、此山へ伊豫街道から上るのには、中山川の流域に近い小松町から行くのが順路に成つてゐる。綱附山だとか、鄕の坂だとか云ふ可なり嶮峻な山坂を上つたり下りたりして四里半程行くと、役小角の像のある女人堂に達する。此處から頂上までは、嶮峻な道ばかりが、まだ三里程も續いて居る。眞鑑造の神祠があるのは頂上で、標高實に六四〇〇尺、東南阿波の方面が支峰瓶ケ森山に視界を遮られて見えないだけで、土佐海も、讃岐街道も、中國の山々も、悉く一眸の中に集めることが出來る。祭神は石土比古神で、曾ては藏王權現と稱した。灼然上人の開基で、毎年六月二十五日から七月一日までの間に、諸方から登る參詣人が、數萬人に及ぶと云はれて居る。

橫河原線といふのは、橫河原から松山へ行く伊豫鐵道の一線で、其處でお隱れに成つた長慶天皇の御陵墓だといふ王塚や、重信川が氾濫した時に堀出したといふ隻手藥師を安置した名刹香德寺がある田窪驛は、此沿線にある。そこから更に平井・久米の二驛を過ぎると、古の熟田津の地だと云はれる立花村がある。『熟田津に舟乘せんと月待てば潮も適ひぬ今は漕出でな』と萬葉歌人の詠んだのは此地で、齊明紀に『御船泊伊豫熟田津石湯行宮』とある其石湯行宮址は、附近神拜村大字古川の御所殿といふ地がそれだと云はれてゐる。昔は此邊まで海灣が入込んで居たといふのだ。

此の立花驛から高知街道は南西に進んで、石井驛を過ぎ、森松驛に達してゐる。石井には伊弉諾命が降臨の地だといふ天山や、土居、得能の古戰場だと云はれる星の岡などの名所がある。又

森松驛のある浮穴村には、鍾乳洞が多くあつて、羅漢洞などと呼ばれてゐる。その外大森彦七が千早姫だと思つて、鬼女を背負つたといふ落蹟も此の近くに殘つてゐるが恐らく後人の附會だらう。

立花へ歸つて、更に北進すると、次は松山で、停車場を出ると、白堊から成つた三層樓の天守閣が眉を壓するやうに、近く空を凌いで立つてゐる。城は加藤嘉明の作つたもので、今は陸軍省の所轄に成つてゐるが、以前公園だつた時分に、天守へ上つて見ると、三津濱前方の海面が、一眸の下に見えて、何とも云へない雄大な景色の眺望が出來たさうだ。市内宮古町には、大山積命外三神を祭つた縣社阿沼美神社がある。

松山市の東北は即ち道後温泉のある道後山で、市内の一番町から伊豫鐵道の電車が、通じてゐる。道後は温泉として、暗い陰慘な感じを與へる所であるが、然し海から來る濕潤した水蒸汽を含んだ風が、温さを人の肌に與へて、春先などは、もう三月の末頃から、盛春の候に見るやうなホカホカした感じをさせる。櫻も其時分からもう一齊に開き始める。

此處から又電車に乘つて古町まで行くと、線路は其處で分岐して、新に三津、高濱方面に行く

所謂高濱線が開かれてゐる。

三津濱も高濱も、明るい感じのする好い海岸である。高濱には千餘年前の古建築物で、貫も楔も用ゐてないといふ十間四面の珍しい本堂を持つてゐる太山寺がある外、前面の海中には、伊豫の小富士で名高い興居島がある。此島内には河野氏十八將の一人村上弘正の據つた城址がある。興居島東南の對岸は即ち三津が濱で、昔の熟田津は、新居郡橘村でなくて、此處だといふ說がある。非常に風景のよい所で、松山市の埠頭を爲してゐる。烈女松江の墓だの、嚴島神社などの名所があると云ふが、行つて見る氣にも成らなかつた。

松山から別に又南方に走つて居る一線に、同じ伊豫鐵道の郡中線がある。余戸、岡田、松前、地藏町を經て郡中に行くので、余戸驛には、北方七町許の地點に、道眞が太宰府へ流された途中立寄つて履を脱いだ蹟だといふ履脱天滿宮がある。

松前は古書に眞崎又は正木の字を當てゝある所で、松山からは二里半程の西南に位してゐる。加藤嘉明が松山に筑城する前の居城地で、附近に金蓮寺、玉生八幡などの名所がある。宇和島街道の往還に沿ふた一漁村で、捕れた魚類は、俗にオタゝといふ魚賣り女が、桶に入れたのを頭へ

載せて賣歩いてゐるのが、一寸面白い現象だ。

郡中まで行くと、上吾川といふ所に源範頼の墓だといふ古びた五輪形の墳墓があつたり、小港といふ海濱には五色の石があるので、有名な五色ノ濱などの名所があつたりする。前面の海は卽ち伊豫灘で、遙に目を放つと、九州中國あたりの山々が薄すりと雲のやうに見える。

宇和島へ行くのは、此處から佐禮谷、立川、內子、喜多、大洲などの丘陵地帶を通つて行くのだ。大洲は加藤氏の舊城下で、四面をスッカリ山で圍まれた盆地のやうな所である。此の郡中での一番繁華な所で、此處から肱川流域に沿うて四里許行くと、長濱港に達する。

長濱は、肱川の右岸にある要港で、大洲との間には愛媛鐵道が通じてゐる。別にこれと云つて見る所もないが、中間驛の加屋には、遊園地として名高い白瀧といふ所がある。上老松の金山出石寺なども名所として聞こえてゐる。

大洲の西には又八幡濱の要港がある。大阪宿毛間の汽船が寄港する所で、海岸の小丘上に八幡神社がある。又西園寺十五將の一人たる宇都宮房綱の居城萩森城址もある。有名な伊豫絣の產地で、舟で行くと此處から宇和島までは二十三浬しかない。然し陸路を行くのは大洲から直接に、

宇ノ町、玉津を通過して、それから、法華津峠を越えて、吉田へかつゝて行くのが順路に成つてゐる。吉田まで來れば、もう宇和島までは後三里しかない。

宇和島は一寸好い所だ。伊達氏の舊城下で、灣內の海岸線が心持のよいカーブを描いて居るのも、私の氣に入つた一つだ。宇和津彥命を祀つた有名な宇和津彥神社は郊外の榊森にあつて、其處から西を見ると、コンモリと生繁つた老樹の間から、宇和島城の天守閣が白く見える。幾つも並んだ船の帆柱の中から、海上の島々が靑く見える景色も、非常にいゝ。又、東へ二里程行くと、雪輪ノ瀧、霧が瀧、布ケ瀧等の名所がある。

此の宇和島から東北近永までは、宇和島鐵道の線路が山間を縫ふて走つてゐるが、格別見る所もない。

土佐に行くには、宇和島から國道を迎つて、全山花崗岩から成つてゐるといふ標高二六一〇尺の鬼ケ城山を東に見つゝ、岩松、內海の諸村を通過し、其處から更に南海岸に沿うて御庄、城邊一本松を過ぎ、國境を越えて宿毛に達して居る道もあるが、伊豫、土佐兩國間の主要交通路は、別に松山から高知に向つて、開かれてゐるのがそれだ。

松山から森松まで、例の伊豫鐵道の便を借りて、其處から、徒歩宮内まで行くと、道は段々爪先上りに成つて、土佐街道有名の峻阪三阪峠が高く前方を遮つてゐる。此の三阪峠から觀望すると松山平野が美しくまるで、畵のやうに見えて、其遠い〳〵果に瀨戸内の海が白く光つて見えるのが、何とも云へない好い景色だ。久万町あたりへ來ると、氣候がズッと寒く成つて、四方から町を押包むやうに犇々と山が迫つて居る。高知市へは、此處から仁淀川に沿うて、野尻、仕七川などの諸村を通つて行くのであるが、仕七川の近くには、僧空海の開基だといふ四國巡禮四十五番の札所岩屋寺がある。斷崖絶壁の中に立つた寺で、岩と岩との間に僅に通じてゐる嶮路を鎖に縋つて白山權現社のある所まで上ると、東には阿波讃岐の海、西には宇和島九州方面の山々が見えて、何とも云へない絶景である、岩屋寺の外に又大寶寺と云ふ名刹もある。

此の仕七川から西南に方向を取つて、土佐の國境近く進むと、浮穴村の高原地帶源氏ケ馬塲に達する。約一方里の間全く一木も生へてない草原で、地磐は石灰質より成り、水流は表土の罅隙から地下に浸入して、仁淀川の水源を形つてゐる。天正二年長曾我部元親が久万山大除の城主大野直昌と戰つた古戰場として有名な所で、一に又大野ケ原と呼ばれてゐる。

此處から再び仕七川まで引返して、細徑を東進すると、三里許で土佐の用居に達する。用居から少し又南へ行くと池川がある。安居山の銅鑛の近くで、安居山の上から、遙に土豫國境の瓶ケ森山や石鎚山が見える。

池川から、越知町を通り過ぎて行くと、各種の動植物の化石があるので名高い佐川盆地に達する。佐川町は此盆地の中心にある小都會で、中世中村氏の居城であつたといふ松尾城址がある。

佐川から少し行くと、伊野大黑の名で知られて居る杉本神社の鎭座地伊野町がある。此處からもう高知市までは三里强で、市内へ入つて行くと、中央河内山に舊高知城の本丸歳隔閣が、巍然として聳立して居るのが仰がれる。町は一體に地盤が低い爲、四方を堤防で圍つて、水害に備へてあるので、何となく暗い感じがする。名所としては、十景の勝を以て知られた吸江灣がある。吸江に近く五臺山の靈地がある。山上の竹林寺は四國第三十一番の札所で、山の西南麓には又、有名な吸江寺がある。

此の吸江寺の後の山にある獨鈷水は所謂吸江十景の一で、其處から山頂に登ると、これも十景の一たる見國嶺がある。此處から眺下すると、高知全市は、直ぐ目の下で、北には青柳橋、西に

は歳寒閣が見え、畫の如き好風景の展望を縱にすることが出來る。

市から南へ鏡川を渡ると潮江村で、其處には縣社菅原神社や、法華宗の要法寺がある、又、北東へ國道を進んで、一宮村まで行くと、一言主命を祭つた國幣中社土佐神社がある。所謂都佐國造の祖神で、今の社殿は元龜年間長曾我部氏の重修したものである。

一宮は阿波街道と讃豫街道との分岐點で、此處から讃豫街道を北東に進んで、瓶岩村まで行くと、有名な毘沙門瀧がある。瀧山と西瀧山と二箇所に分れてゐるのが、二つとも幅の狹い瀧であるが、それでゐて高さは十八丈もある。

高知から東へ坂折山の坂路を越えて、阿波街道を三里程行くと後免町がある。昔の土佐國府があつた國府村は直ぐ其近くで、其處に紀貫之の舊館址も遺つてゐる。又大字國分には聖武天皇勅建寺の一たる國分寺があつて四國第二十九番の札所に成つてゐる。

後免町の東方には赤岡町がある。此處は香美郡中の首邑で、其西には、有名な物部川が流れてゐる。此の物部川の峽谷は、餘り多く人が知らないが、實に天下の奇勝と云つてもいゝ所で、河身は海口から遡るに從つて漸く狹窄し、佐岡あたりまで行くと、破碎された岩片から成つた洪積

期の礫石層が見事に發達してゐて、其中を凄じい勢で急流が突破してゐる。此傾向は上流に至る程益々顯著で、實に何とも云へない雄大壯快の趣がある。私は土佐に入つて是非見るべきものは、此の物部川の溪流だと云ひたい。

赤岡から夜須・穴内を通つて行くと、安藝郡の首邑安藝町がある。蘇我赤兄の後裔安藝氏の居城たる安喜城址のある所で、此處から奈半利驛までは三里半しかない、奈半利から更に海岸沿の街道を南下すると、室津、浮津の二港があつて、其處からはもう四國遍路の寺として名高い室戸の東寺が直ぐである。室戸崎前面の海は、波濤の荒いのと、岩礁の亂立してゐる爲とで、船員達の昔から恐怖した所で、古くは其恐怖を象徴した最御崎の名が此岬角の突端に附けられてゐた。東寺は此の室戸崎から濱街道を阿波に行く道にある寺で、正しくは最御崎寺と呼ぶのである。四國第二十四番の札所で、之を東寺と云ふのは西方室津の金剛頂寺を西寺と稱するのに對するものである。弘法大師の開基で、此附近小坂の地には、俗に弘法大師の不食芋といふ含鐵性の小石を産するので有名である。

此の室戸の最御崎寺と、蹉跎の金剛福寺とは、四國遍路の寺々の中でも最も重要視されてゐる

寺で、其兩寺を有する室戸・蹉跎の兩岬角が、土佐灣を擁して、東西に相對してゐるといふのも、考へて見れば面白い現象である。

高知から蹉跎岬に行くには、仁淀川を渡つて、其處から高岡郡の海岸を西へ、四國第三十五番の札所清瀧寺のある高岡や、須崎や、横波三里の俗稱がある浦ノ内灣や、四國第三十六番の札所青龍寺のある宇佐村や、有名な八幡宮のある久禮、三十七番の札所岩本寺のある窪川、尊良親王が元弘の昔お遷されに成つて、『我庵は土佐の山風さゆる夜に軒漏る月の影こぼるなり』と御述懷に成つた土地として、又有名な式内古社賀茂神社(今、八幡宮)のある地として知られてゐる小袖貝の産地入野ノ松原を通り、古土佐の首都だつた中村町を右に見て、南へ下田、下ノ加江、清水窪津、津呂などといふ村々を過ぎると、達することが出來る。

蹉跎崎も、怒濤の澎湃と、巖礁の亂立とを以て知られた所で、快絶な奇景には富んで居るが、其代り船を泊すべき所がない點に於て、東方室戸崎と其概念を一にしてゐる。金剛福寺は此の蹉跎岬の岬角にある寺で、四國三十八番の札所である。

此の寺へ行くのには、海岸に沿うて幾多の屈折した岩路を曲り〳〵行くのであるが、到る所奇

石怪岩目を驚かすばかりで、それ等の岩石には、一々不可思議な名前が附いて居る。寺を出て、蹉跎岬から西進すると、此種の岩礁は、益々其奇怪な形を示して、千態萬樣形容すべからざるものがある。

有名な龍串七十八景の奇勝も、矢張り此の地帶にあつて、戸崎岬から西方約半里程の間は、第三紀層に屬する赤褐色沙岩の、海水の浸蝕に會して成つたものが、實際算へ立てられない位列立し、其處から更に西方叶崎、朴崎、西泊、古滿目に至る迄の沿海一帶、危巖險崖互に相錯綜して只見る奇石怪岩の展覽會を現出して居る。波が荒くて舟が出せないので、他郷の人は餘り多く此處の奇勝を知らないが、實際、耶馬溪も、瀞八丁も、日本三景で名高い松島も、此の邊一帶の奇勝を見た者の目には、一顧の値も無い位である。

龍串まで行つたら、少し西へ行つて、西灣岡湊の海濱櫻濱へも行くがよい。古い名所案内記などには『白沙一帶、皎潔雪の如く、而して紅黄五色の櫻貝、紛然其上に散布し、或は桃色珊瑚の碎片を雜ゆ。美觀云はん方なし』と云ふやうな事を誇張した文句で書いてある。此處からズツと海岸沿に西北へ進んで行くと、奥内、小筑紫、柏島などいふ所があつて、其處から宿毛はもう

直である。石器時代の貝塚がある古い土地で、土佐の家老野中兼山の配所地である。土佐西端の可なり繁華な港で、大阪商船會社の汽船は、瀬戸内を航行する宿毛大阪間の航路と、宿毛高知間を通ずる外海航路とを開いて交通の便を圖つて居る。

高知からは又別に高知●甲浦間を通じてゐる航路がある。甲浦は阿波の國境近くにある高知縣東端の要港で、昔は土佐から大阪へ渡る唯一の要津であつた。鹿兒島から土佐へ逃込んだ江藤新平が、大阪行の船を待つてゐる間に逃損つて捕つたのも此甲浦で、今でも商船會社汽船の寄港地として、可なり繁昌して居る。

此處から國境を越えると、直ぐ五六丁の近くに阿波の宍喰がある。此の宍喰には、本木元信の居城の址や、八坂神社などがあつて。一寸した漁村である。此處から海部灘を右に見つゝ、淺川を通つて北方牟岐浦へ行くまで二里半許の道には、所謂八阪八濱の難所がある。一つ阪を越えれば、又一つ砂濱があり、又阪があると云つたやうな足の疲れる道で、其代り景色は、頗るよいといはれてゐる。

此處いら一帶は、海部郡の地で、海部川の上流川上村には有名な轟瀧がある。落下十九丈五

尺、幅八間、阿波國第一の大瀧で、附近には蛭が多いので有名だ。

牟岐浦から更に海部濱街道を北東に進んで行くと、那賀川街道との會合地點に那賀郡の富岡町がある。曾て阿波九城の一と云はれた牛岐城址のある所で、其北方羽ノ浦には、和耶和耶といふ追儺の神事を行ふので名高い延喜式の小社和耶神社があり、又、更に北方勝浦郡に近く行くと、四國巡禮寺の一つで名高い地藏寺のある立江町がある。此邊は近頃小松島輕便線の中田驛から古庄に至る阿南鐵道の通じた所で、立江から汽車に乘ると、小松島輕便線の起點小松島は、其處からもう直ぐである。附近には横須の松原(東南二十五丁)千代の松原、(西方二十五丁)があり、又北方一里の地點には、日峰神社がある。義經が屋島攻略に先つて此地に來て旗を立てたといふ傳說のある旗山の舊蹟も此小松島の附近大字芝生といふ所にあつて、其處からは曾て古代先住民族の居たらしい塚穴の蹟が發見された。中田驛の次の地藏橋驛附近には曹洞宗の名刹丈六寺がある外、勝占神社、大谷梅林などの名所もあり、又、有名な忌部神社は次の二軒屋驛の西北六丁許の地點にある。蜂須賀氏の舊城市德島は、其處から、あと一哩許の間隔しか無い所で、吉野川の流沙から成つた第四紀新層の上に發達した四國有數の大都會である。其繁華は高松市に劣るが、

一寸特色のある町で、大瀧山、勢見山の連峰が市の西を遶り、東は近く紀伊海に臨んで、景色も惡くない。市街の中央城山には舊城址もある。

此處から、北方撫養までは五里程もあるが、今は古川から阿波軌道が通じてゐる。中間驛の勝瑞は、昔三好之康が勝瑞城に據つて、全阿波を指令した所で、城址は今、住吉村に編入されてゐる。

撫養は齋田鹽の輸出地として有名な商業市で、市内の岡崎城址には、大永三年此地で死んだ足利義植の墓がある。東北は即ち小鳴門の稱がある撫養瀬戸の狹水道で、其南方は大鳴門に通じて居る。これが所謂阿波の鳴門の難所で、旋渦激浪屢々船を呑んで、沈沒せしめる事がある。

撫養から德島へ引返す迄の道には、土御門天皇の御陵墓がある。德島から阿波池田までは德島線の鐵路が眞直に西に通じて、吉野川と、其流域の都邑を縫うて德島から西走する土佐街道と、撫養から直接に西行してゐる伊豫街道と、四條相並行して進んでゐる。國分寺の所在地たる府中有名な雨乞瀧がある高根山の東北五里二丁の地點にある石井などの驛々を通過して、二十四哩程も行くと、山瀨驛がある。

忌部族の本據だつた所で、其祖神天日鷲命を祭つた忌部神社は、此驛から約十六丁の東南大宇山崎の忌部山にあつて、附近には其遺跡と認められる古墳が散在してゐる。

貞光町は吉野川南岸の小都會で、平氏の遠裔だといふ深山生活者の大團體が住んでゐる山間の奇邑祖谷村へは、此處から劍山を越えて行くのが順路である。其途中に當る一宇川の溪谷には激流が奇岩の間を奔躍して、所謂鳴瀧、土釜の名勝を形つてゐる。

祖谷山は劍山の山麓菅生から祖谷川に沿うて土佐の國境有瀬に至るまでの大谿谷の總稱で、東西の二村に分れ、山中の別天地と稱せられる祖谷は、其西祖谷に屬してゐる。風俗言語共に山麓の住民と異つて、建武正平頃の綸旨を藏し、又平氏の赤旗を傳家の寶としてゐる舊家も其中にある。此地にある蔓橋は、祖谷の異民俗と共に有名なもので。何れも松尾川の兩岸絶壁の間に架つてゐる。藤蔓を編んで兩岸の樹木に繫ぎ釣橋としたもので、其數十三、中でも善德橋といふのが一等大規模で、長さ三十三間、高さ三十餘尋に及んでゐる。

祖谷から山を下りて、吉野川の流域に沿うて行くと、阿波北部平野の咽喉を扼してゐる池田町がある。三好氏、長曾我部氏が相次いで居城を築いて、阿波全國を支配した所で、吉野川の通路

を制し、兼ねて、讃豫土三國交通の衝に當つて、全四國に號令するに足る要害の地である。長曾我部氏の舊城址は町の西方吉野川左岸の地區にある。有名な白地の城址といふのはこれで、川を隔てゝ、三好氏の池田城址と相對してゐる。

白地城址の北に聳立する雲邊寺山は、標高三千六百尺、弘法大師の開基に成る四國の有名なる靈場雲邊寺のある所で、頂上に登ると、全四國の形勢が一望の下に見える。長曾我部元親が曾て此處に登つて雄心抑ふる能はず、遂に四國征服の覇業を思ひ立つた事は有名な逸話として今に傳はつてゐる。阿波池田から此處までは西北三里で、白地の北岸までは自働車が通じてゐる。

吉野川の北岸、箸藏村の大字洲津といふ所には、これも四國での大伽藍として名高い箸藏寺がある。俗に讃岐ノ金毘羅の奥の院といふ所で、山中には神が箸を藏した所だといふ石窟がある。此の山下の道は所謂土佐上街道で、汽車で此處へ行くには、池田より一つ手前の辻驛で下りて、西北へ行くのが順路だとされてゐる。驛からは一里十町許ある。

池田の西南、山城谷村川口から三名村上名に至る道は曾て土佐舊街道第一の難所として聞こえた所で、大歩危・小歩危の稱がある。吉野川の溪谷は、此邊に至つて狹さと深さとを加へ、削

立てたやうな絶壁の遥下には、激し立つた急流が凄じい音を立てゝ跳つてゐる。今は新道が下に開けたので、普通の旅人は多く此所を通らないが、勝景を愛でんと思ふ者は、是非一遊する必要がある。池田からは南西約五里、附近まで自働車が通じてゐる。

私が書かうとした四國遍路の旅はこれでしまひである。

神戸から岡山まで

私の中國の旅は二度とも神戸から初まつてゐる。

二度目の時は隨分自由な氣分の旅をした。足の向いた所へ行くと云ふのが最初からの方針で、昔からの名所だと云はれる所でも、氣の進まない所は一切失敬したが、其代り面白さうな所は、小さな舊蹟まで、殆ど穿鑿的に探して廻つた。然し不幸にも其時の日記は、殘つてないからこゝには第一回の時の日記を補綴して載せる事にする。其時は岡山まで行つたのだつた。

三月三日——

今日は朝から小半日神戸の市中を引廻された。神戸は概括的に云つて厭な所だ。ちやうど、關東に於ける横濱で、開港地に特有な鋭い眼を持つた現代張の商人が、脇目もふらずに歩いてる所だ。布引の瀧だとか生田神社だとか云ふ附近の名所も行つて見たが、厚みも深みもない所だ。湊川神社に至つては沙汰の外だ。私の好きな元弘唯一の忠臣、楠正成の靈廟を、あんな俗氣紛々たる所に置くといふ事があるものか。神社としての感じは京都の北野神社に似てゐると思ふが、北野だけの莊嚴な感じがないのは、周圍が悪いからだ。忠臣の墓が長く田畝の間に埋もれてゐたのは確に深慨すべき事に相違ないが、折角それを堀起しても更に粉黛醜汚の中に埋むるに至つては一層忠魂を侮辱するものだ。私が神戸を非難する原因の大部分は、實にこゝに在ると云つても可いのだ。

神戸を出て須磨まで來て、初めてホッと息を吐いた。直ぐ近くまで行き乍ら、いつも行かないで了つてゐる一の谷へ、今度も又矢張り行かないで了つた。鵯越のある一ノ谷へは須磨驛から西へ七八丁しかないさうで、其直ぐ後に聳えてゐる鐵拐ケ峰は汽車の窓からでもよく見える。敦盛塚といふのが、一ノ谷に在つて、其傍に敦盛蕎麥といふのを賣つてゐると云ふが、其肝腎の敦盛塚が、後世に北條貞時が平家一門の爲に建てたもので、敦盛とは沒交渉なものだと云ふから滑稽だ。松風村雨堂とか云ふものがあると云ふ事も聞いたが、どうせ敦盛塚の親類だらうと思つて謹んで遙拜に止めた。

でも垂水では下りた。官幣中社海神社が直く傍にある。祭神は例の底津少童神・中津少童神・

表津少童神の三神で、神功皇后時代の創建だといふ社殿がある。此邊の海濱は神功皇后に關係した古蹟の多い所で、有名な古墳があつこつちにある。

然し舞子は案外豫期に反した俗地だ。四五十年前迄はこれでお誂へ通りの青松白砂、互に相映發する風光明媚の詩境だつたさうだが、今では大阪神戸の大小成金輩が、豪奢を衒ふ享樂の理想鄉に成つて了つてゐる。海岸は青松白砂といふのに相應しくない程汚いが、然し松には色々格好の面白いのがある。こゝから淡路島の青螺を近く望んだ感じも確にいゝ。こゝでは松露が名物ださうだ。前には細い波が、青い青い色を湛へて、靜に岸に寄せてゐる。其の晩は明石まで行つて泊つた。

三月四日——

馬鹿に朝早く眼が覺めた。『仄々と明石の浦の朝霧に島隱れ行く舟をしぞ思ふ』といふ人丸の歌が、直ぐ胸に浮かんで來た。前は急潮激湍、昔の舟子に恐れられた明石海峽で、此邊では明石鯛が多く獲れる。ふと氣がついて、持つて來た源氏物語を披げて見た。

一例のセンチメンタリズムが、美しい才筆で書出されてある中で、此の明石の一巻は、紫式部

が最心血を注いだものだと云はれてゐるが、其中に取扱つてある須磨や明石が、如何にも文化の中心を遠かつた僻陬のやうに書かれてゐるのが面白い。

交通の不便だつた時代の宮廷婦人の距離に關する知識は、實際そんなものだつたに違ひない。

然し今では須磨も明石もスツカリ別莊地化して了つて、一寸關東の湘南地方といふ感じのする所に成つた。漁村の趣なんか殆んど何處にも見られない。直ぐ其處に見える丘陵の上には人丸神社がある筈だが、今の明石と人丸神社とは、餘り交渉が無さ過ぎる。

元和三年に小笠原忠實の築いた城址が、窓から北に見える。式内古社彌賀多多神社が岩屋神社と云ふ名に成つて、此の明石の町の戎町にあると聞いたが、こゝでも下りる氣に成らなかつた。

明石を出ると、汽車は段々海岸から離れて單調な播磨平野の中へ入つて行く。大久保・土山なんて云ふ驛を過ぎると、加古川驛が間もなくレールの向ふに見えて來た。播州鐵道がそこから北へ岐れて、北條町だの、西脇・三木などへ行つてゐる。

三木は三木川の南岸に在る美囊郡の首邑で、刃物の名產地だ。こゝの釜山城では、別所長治が羽柴軍の攻圍を受けて自殺した時の事を、私は何かの軍記で見た事がある。

三木から小野町を越して少し行つた社と云ふ村には奈良朝時代に創建された佐保神社がある筈である。

此の播州鐵道は山陽線の線路を横つて南へ海岸の高砂浦まで行つて居る。此の邊の海岸地帶にも、矢張例の第四期に屬する赤松林が列つてゐて、其中に高砂の松だの相生の松だのと云ふのがある。尾上と云ふ所が其對岸にあつて、そこの松原の中に尾上神社が立つてゐるのも、少し巫山戯過ぎてる。

播磨名所として有名な石の寶殿のある寶殿、曾根の松のあるので知られてゐる曾根の各驛を通ると、御着と云ふ小さな驛があつて、そこの西南には、播磨富士の一名を持つた麻生山がある。國分寺も直ぐ傍にあるのだが、汽車の窓からは、一寸見當がつかなかつた。姫路一泊。

三月五日——

姫路では朝起きると直ぐ城を見に行つた。私はこゝで初めて完全に保存された城を見た。白鷺城といふ名にふさはしい綺麗な感じのする城だ。

書寫●明神●名草の連山が北方の障壁を爲して居る前に城があつて、そこから南に小平野が開けて居る。姫路の町は、ちやうど其平野の中にある。

姫路の町は、歩いて見て、好い感じのする所だ。舊家らしい白壁造りの家が、此の町には隨分在る。醬油を釀造してる大きな家が幾軒もある。

町の名所では船場の本德寺も、龜山の本德寺も、正明寺や景福寺も見たが、私は射楯兵主神社と云ふのが、特殊な名前から來た刺戟か知らないが、妙にいつまでも頭に殘つてゐる。風土記にまで出て居る程の古い社で、大己貴命と五十猛命を祀つてあるのださうだ。

宿へ歸つて其話をすると、主人が又、そんな事の極めて好きな男で、

『昔は伊和樣の修羅踊と云ひましてなア。二十年目三十年目に、そら隨分思ひ切つた亂暴なお祭があつたんですがなア、今では、そんな事も見られなくなりました。姫路もこれで餘程昔とは違ひました』

と云ふやうな事を云つて、暇があるなら、そこの神谷の停車場から播但線で、野里まで行つて其處で下りて廣峰へ行つて見ろ、それは何とも云へない好い景色で、姫路の町からズッと播磨灘の島々、遠くは淡路島から阿波讃岐の山までが一目に見えると云つて、頻に勸誘した。

播但線でさう云ふ名所を見乍ら、生野から和田山まで行つて見るのも面白いだらうと思つたが今度の旅行の目的は、主として山陽線に在るんだから、さう云ふ所まで深入する事は止めて、豆腐町から飾磨の方へ飾磨線で行つた。

こゝから家島群島を見た感じは一寸いゝと思つた。陸前の松島を小規模にしたやうな所で、其主島家島の天神ケ鼻には、式内古社家島神社があると聞いた。春先なんかは、此の家島から坊勢島・西島・陸家・男鹿島などを船で見て廻る人が隨分あるさうだ。

歸り路には、次の天神驛まで歩いて行つて、其處の濱の天神へ參拜した。何れは菅公が左遷の道筋で、立寄つた舊蹟であらう。私は暫くそこに立つて、大阪から太宰府へ行く海路を心に思ひ浮べて見たりした。

三月八日——

ゆふべ此處へ遲く着いて、泊つてから妙に寒い。風邪を引込んだやうな氣もする。一昨日無理をして書寫へ上つたのが惡かつたんだらうと思ふ。今日は一日宿屋で籠城、方々へ繪葉書や手紙を書いた。其一節。

『書寫山へ一昨日日歸りで行つて、其佛罰で今日は旅に病み居り候。一々案内僧の口眞似は仕らず、只書寫は靜寂愛すべき所なりと云ふ事だけを貴兄に御報告申上げ候

老杉の深き木立の奥に、清泉を掬し、喈々たる鳥聲を聞けば、恰も極樂へ來たやうな感じが致し候。

書寫を下りて、それから播但線へも行かず、網干から龍野電鐵線へも參らず、習日那波まで來て此の赤穗へ泊り候。

赤穗は御承知の如く鹽を以て有名なる所に候。淺野氏の赤穗藩が僅に五萬五千石の小藩を以て大藩の間に伍して、勢力競爭上比較的優勝の地位に立得たるは、其背後に鹽業より生ずる無盡藏の財産を有したるが故に候。赤穗のみならず、東は曾根あたりより西播の海岸一帶は、製鹽事業の頗る盛なるを見受け候。明日は病氣さへ大した事無くば、赤穗城の殘壘・大石氏の宅址・淺野家累代の菩提所華岳寺を見に參る豫定に候。』

三月十日——

でも仕合と、午後からは餘程熱が降れたので安心した。

到頭岡山まで來て了つた。花筵の主要産地だけあつて、到る所にそれを織つてる家がある。例によつて第一に城址を見て來た。黒板張の一風變つた城だ。烏城と云ふ別號が附いてゐる。白壁造の姫路城が白鷺城で、黒塀造の岡山城が烏城は、少し作爲の痕がくど過ぎるやうだ。

此城に對すると、今更乍ら浮田秀家の悲慘な末路が想出される。八丈島の配所で死んだ秀家、岡山中興の恩人たる其父宇喜多直家、斯う二人の名を書並べたゞけでも、私は無量の感慨に打たれざるを得ない。浮田氏滅亡後は、岡山城は更に二度異姓の城主を迎へた。小早川氏と池田氏とがそれで、池田氏の城下に成つてからは、更に數多の設備が出來た。今の岡山市が唯一の誇としてゐる後樂園なども矢張此池田氏の時に出來たもので、箱庭的の技巧を凝らしてあるのがイヤと云へばイヤだが、閑雅な日本式庭園藝術の模型として、恐らくこれ程整備した公園は外にあるまいと思ふ。金澤の兼六公園や、偕樂園程悪どい作爲の痕が見えないのも、私には氣に入つた。

其時の日記はこゝで盡きて居る。今考へて見ると色々大切な事を書漏らしてあるやうな氣もする。實際にはもつと、方々の名蹟を見て廻つてるのだが鉛筆で書いてあるのが所々磨滅して分らなく成つてる所を省略したので、こんな結果に成つた。

明石から東北へ、明石川の谿谷を二里餘り上つて行つて、鎌足の子の定惠といふ法師が開創した播州著名の古刹大山寺を見た時の感じだの、まだ外に色々の事があつた筈だ、然し今一々それを拾上げてるのも億刧だから、これから先は、二度目の旅行の時の追憶を基本として、書いて行かうと思ふ。

美作へ

岡山からは北へ作州の津山まで行つてる中國鐵道線と、西へ備中の稻荷から湛井へかけて行つてる線と、東南、西大寺町まで行つてる西大寺軌道と西南兒島半島の宇野まで行つてる線とが岐れて居る。

是等各線の中で最も史的名蹟に富んだ線は津山線である。此線は略旭川に沿うて進んで行つてゐる縣道と、絶えず聯接を保ちつゝ行つて居る。

旭川谿谷の景色は、未だに忘れられない位深い印象を私の胸に與へた。山陰山陽兩道の中樞たる脊梁山脈の分水嶺から南流してゐる諸川の中で、最美しい畫圖的の景致を持てる川として私は此の旭川を記憶してゐる。曲折してゐる山の鼻から、不意に白帆が顏を出して來る光景なども一寸外では見られないものだと思つた。旅客を乘せた川舟が、其碧流の上を靜に下つて行くのもいゝ景色だ。

昔は作州岡山間を通ふ旅客は、皆此の川舟を利用したもので、沿岸の諸村はこれが爲に賑つたものださうだ。悠々と春の大江を下つて、日が暮れると、朧月照る桃花の村の下に舟を繫いで碇泊した往時の旅は、どんなにか樂しいものだつたらう。私は色々とさうした古い時代の事を想像して見た。

金川などと云ふ驛も、今では警察署があつたり、郵便局が出來たりして、小都市の觀を具へてゐるが、維新前までは池田氏の支封地で、微々たる村に過ぎなかつた。こゝには或意味に於て有名な日蓮宗不受不施派の本山妙覺寺だの、西へ二里程離れて、同じく日蓮宗の古刹日應寺だのがある筈だ。

八幡温泉を直ぐ近くに持つた福渡といふ驛を出離れた所で、汽車は旭川と『さよなら』をして、弓削●誕生寺●龜の甲と段々丘陵の中へ入つて行く。

津山は北方因幡境に聳立する黑岩●佛香●雲母諸山の裾野に開かれた小盆地の東南部にある都會で、東美作の諸川は皆低所を求めて、此附近に集中して居る。津山が、岡山縣北方の商業都市として、南方岡山市に次ぐ繁盛を來したのは一に此の諸川の水利があるからだ。

津山城址は、遠くからでも其白壁が、きらきらと夕日に輝いてゐるのが見える。西南を松林に取巻かれて、東は直に絶崖を負ひ、前方宮川に臨んで立つてゐる山城で、城壘としては最も要害の地を得てゐる。慶長頃には森忠政が十八萬六千石でこゝにゐたが、森氏除封後は、越後少將家の松平氏が代つて治めた。今では公園に成つてゐる。

名刹としては興國元年足利尊氏の創建だといふ本源寺だの、泰安寺●妙法寺だのが市内にある。津山の名物に初雪といふ輕燒質の菓子があつて、其地方から來てゐる早稻田の文科大學生が、歸省すると定つてそれを土産に持つて來て呉れたのを覺えて居る。何でも早稻田を出てからは、倫理の教師に成つて、國の中學に出て居ると聞いて居たが、學校を出て以來は、弗然と葉書一枚よこさなく成つて了つた。

『Kは如何したらう』

と、一同が寄ると、其噂が出た。

其後暫くKの事は忘れてゐたが、斯うして津山へ來て見ると、急に潜在意識が蘇つて來て、麻覺的にフィとKの事が又頭に浮んだ。

『Kといふ家が此町に今でもあるかい』

と御膳を持つて來た宿の女中に聞くと、『さア』と頭を傾げて

『一寸お帳場で聞いて參じます』

と云つて、お櫃を取りに下つて行つたが、今度出て來ると、

『アノ其お方は中學校の先生でございませう。それなら私もよく存じて居ります。長い間の御病氣で、一年程も煩つていらつしやいましたが、去年お亡くなりに成りました。確お母樣とお妹樣がまだ元のお家にいらつしやる筈です』

と思ひ懸ない報告をした。

『さうか到頭死んだか』

と、私は無意識にさう云つたが、アノ殺しても死にさうもない頑丈な男がと、死といふ事實が疑はしい位、驚かされた。まさか彼Kが、死んで居ようとは夢にも思つて居なかつたのだ。

城下の士族町だといふ、寂しい古錆びたにほひのある町へ行つて、Kが住んで居たと云ふ家の前へ行つて見ると、崩れかけた土塀の下には、黄色い花を着けた菊科の雜草が二三本其根方に寂

しく吠いてゐて、其前の日當りに瘠せた犬が寢て居たのが、ムックリと起きて、段々後退りしながら、目馴れない異邦人を咎めるやうに吠立てた。

『あゝ、到頭Kが死んだか』

私は又、口の中で、其の言を繰返した。

それ以來、津山は寂しい悲しい人生のパックとして私の胸に殘るやうに成つた。

廢滅した國府の址や、總社神社なども其時に見て廻つた。

町の東方には、中國街道の鯖町から北へ分岐して、關西有數の醬油産地として名高い龍野、牙天神社所在地の新宮、千草川の上游佐用郡の中心佐用町を通り、其處から美作へ入つて、眞言宗の一刹蓮華寺のある土居、南北朝時代に江見氏の本據と成つてゐた江見から江見・梶並兩川の會流點に在る英田郡の主邑倉敷、勝間田、河邊などを經由して、こちらへ續いて來て居る美作街道がある。後醍醐天皇が隱岐へ御遷幸の途次、此の津山へお立寄りに成つた時は、千葉介貞胤・佐々木佐渡判官入道道譽等五百餘騎に警固されて、中國街道の今宿から北へ、佐用郡へ入つて、今の江川村から作州英田郡の讃甘へ杉坂の險路を越えて、因幡街道の別路をお越しに成つた事が

太平記に出てゐる。

帝駕が此道を通御に成つたといふ事は、當時の反北條軍の豫期しなかつた所で、兒島高徳が『櫻を播磨・備前の國境船坂山に要して奪ひ奉らうとした計畫は、之が爲に全然齟齬して了つた。それで、『さらば美作の杉坂こそ究竟の深山なれ、こゝにて待ち奉らんとて、三石の山より直進へに、道もなき山の雪を凌ぎて杉坂へ着きたりければ』其時主上は最早『院の庄へ入らせ給ひぬ』と聞いたので、ガッカリして、從兵等を其處で解散して、せめてそれとなく自分の計畫を上聞に達して置かうといふッモリで、獨潛に院の庄の行在所へ行つて、庭前の櫻の幹に『天莫空勾踐』と書いたと云ふ。其舊蹟が今作樂神社に成つて津山の西方院庄村に殘つて居る。

帝は、こゝの行在所をお出に成ると、西へ山陰街道の久世・勝山を越えて、伯耆界の四十曲峠を越えて、出雲の三穗ケ關へお出に成つて居る。

久世も勝山も山間の都會ではあるが、どちらも眞庭郡では有數の町で、郡の北部及び久世附近の山村から出來る煙草は、古來美作の山中煙草として知られてゐる。今でも久世町には、煙草製造所がある。

勝山は三浦氏二萬三千石の舊城下で、こゝでも煙草が名産に成つてゐる、どちらも高田川の流域に當る小盆地の中にあつて、四面には近く山が迫つてゐる。蛭山だの、三平山・岩穴山・本欽山等の諸山が、伯耆境にはある筈だが、こゝからは一つ一つの姿がよく見えない。

行衛も知らぬ道が其山の中に續いて行つて居る。

三備の諸勝

三備の諸勝を說くには、說明の都合上、再び播磨境の三石あたり迄歸つて、其邊を起點に西へ進んで行く必要がある。

三備の東偏、播磨との境には、例の兒島氏が險に據つて帝駕を待ち奉つた舟坂山があつて、汽車は其下に長い隧道を穿つて、國境を越えてゐる。此の山は中國邊の反北條軍が常に其戰爭圈の中心として敵を惱ました所で、こゝから國境を越えて少し東へ行くと、有年驛の北方に、赤松國心が義兵を擧げて據守した白旗城址がある、其西へ山を一つ越えて荒縄の城がある。

赤松氏が此の荒縄城を出て、山ノ里梨が原間に陣地を敷き、北は杉坂・南は舟坂の道から敵の前進路を遮止した爲め、中國方面から來る北條方の新募軍は『三石ノ宿ニ打集ツテ山の里ノ勢ヲ追拂つてとをらんトシケルヲ赤松筑前守舟坂山に支へて宗トノ敵廿ヨ人を生ドツてケリ。然共、赤松是ヲ誅セズメ情深ク相交リケル間伊東大和次郎其恩ヲ感ジテ忽ニ武家與力ノ志ヲ變ジ寄

軍合體ノ思ヲナシケレバマヅ己ガ館ノ上三ツ石ノ山ニ城廓ヲかまへやがて熊山へ取アガリテ義兵ヲアゲタルニ備前守護加治源太左衛門一戰ニ利ヲ失フテ兒島ヲサイテ落テ行是ヨリ西國ノ路塗ツテ中國ノ動亂斜ナラズ西國ヨリ上洛スル勢ヲハ伊東ニ支へさせて後は思もなかりけり』と神田本の太平記に出てゐる。

實際此の舟坂は、山陽道の咽喉を扼する唯一の險要で、昔からこゝでは、兵家が激烈な爭奪戰を演じてゐる。兒島高徳も一度はこゝに據つた事があるし、古くは源義仲の屬將倉光三郎が妹尾兼康と戰つて、こゝで殺されてゐる。

神功皇后が御凱旋に際して、忍熊皇子等叛軍の前進を防守する爲差遣された弟彦王が、勅を奉じて和氣關を置いたのも此邊で、其地點は、三石村の西方、今關川といふ小川のある所だらうと云ふ事だ。又三石の次驛吉永の附近には、池田新太郎少將の命を受けて、藩儒熊澤蕃山が建てた閑谷黌が、中學組織に成つて、二十五丁程南に殘つてゐる。和氣清麿の誕生地だといふ理由で、驛の西北二十丁許の所には、清麿の碑がある。和氣と云ふ停車場が次にあるが、其碑のある所とは大分離れてゐる。

三石驛から此の和氣驛までは、山陽線が絶えず日笠川に沿つて進んで來たが、和氣を出ると、今度は新に東大寺川の沿岸を西南進して、其上に架つた鐵橋を渡つて、萬富・瀬戸・西大寺と進んでゐる。

中國街道は、三石で線路と別れてから、其南方を西進して、望潮魚の名産地片上灣の北邊を通つて、西大寺まで來て又線路と近接してゐる。此の片上・西大寺間の沿道は、備前燒の根源を成した伊部燒の産地である伊部、名鍛冶長船の名を全國に布いた長船などの山緒ある工業地が並んで居る所で、近代に成つては又其上に新陶錬明燒の一名産を加へた。

西大寺は、會陽で有名な眞言宗の古刹西大寺のある町で、驛からは南へ一里程もあるが、今は直ぐ傍まで西大寺鐵道が、岡山の後樂園前から通じてゐる。

『會陽も是非一度は御覽に成つて置くものですよ』

と云はれて、ちやうど行つた日が舊の正月十四日だつたので、小さい車室の中へ無理に鮨詰にされて運ばれて行つたが、下りると云ふよりは寧ろ押落されて寺の門まで行つて見ると、只もうワアーッと云ふ騒ぎで、餘りの物凄さに逃げて歸つた。何でも牛王を授からうと云ふ人が、裸

で散ばら髪に成つて、我勝に競爭して揉合ふのが面白いので、國々から其驚ぎを見物する爲に斯んなに大勢の彌次馬が押寄せて來るのださうだ。何の事はない戰場の光景だ。

『會陽だなんて、一生見に行くもんぢやないぜ、既の事に踏殺される所だつた』

と宿へ歸つて言ふと、女中達は腹を抱へて笑つてゐた。

此の西大寺といふ寺は、天平勝寶年中の創建で、古くは金岡莊の中島に在つたのを、寶龜八年に安隆といふ僧が現在地に移したのださうだ。金岡莊といふのは矢張上道郡の中で、有名な蒔工巨勢金岡の本貫だと云はれてゐる。

古刹西大寺に對して、岡山には又古社吉備津神社がある。有名な仁德天皇勅建の官幣中社で、古來三備第一の名社と云はれてゐる。所在地は岡山から西方二里廿三丁の吉備郡眞金村で、中國鐵道の湛井線に乘ると、三門●大安寺●備前一ノ宮を通つて、次の吉備津驛から東へ五六丁で行ける。老樹に蔽はれた莊嚴な感じのする社だ。祭神は孝靈の皇子五十狹彦命だと云はれてゐる。

『眞金ふく吉備の中山帶にせる細谷川の音のさやけさ』と古歌に詠まれた谷川が、社の直ぐ南を流れて、後には其谷川の水源を成してゐる吉備中山が、備前●備中の國境を劃つて立つてゐる。

それに吉備津彦命の陵だといふ瓢形古墳がある。

鳴動の音響によつて、祈願の吉凶が分るといふ古い釜が社傍に在る。何でも上古から在る釜ださうだ。古い時代の一種の卜占法として、辻占●橋占●石占などの外に、さう云ふ占法があつたのかも知れない。

吉備津神社を出ると、高松の水攻で名高い高松城址を見る爲に、次の稻荷驛まで行つて、其處から北へ八丁の道を急いだ。後は直ぐ山に接して、三方は川と沼澤地とで圍まれたやうな城だ。清水宗治が羽柴氏の大軍を月餘に亘つて此の小城で支へて降らなかつたので、秀吉が足守川の水を堰いて、所謂水攻法を行つた。そして其終末が、宗治の武士道的自殺と成つて、織田●毛利兩軍講和の大舞臺が、此の高松城を背景に開展せられたと云ふ話は、私は子供の時から太閤記で幾度も讀んで、其度に感興の血を湧かしたものだ。

もう此邊は備中國に成つてゐる。

高松の稻荷へは、稻荷驛から別に稻荷山行の支線が出てゐる。關西では此の稻荷が伏見稻荷と並稱されてゐるが、慶長時代の開基で、伏見の程古い歷史を持つてゐない。

足守まで行くと、羽柴軍に對抗して毛利軍が據守してゐた冠城址、宮地城址が近く相並んで居る。こゝは古く葦守と云つた所で、應神帝吉備御幸の時の行宮址がこゝにある筈だが、其地點は明かでない。足守川が福谷村から來てこゝを流れてゐる。

惣社驛で下りて、高梁街道にある縣社總社神社から國府址や國分寺などを見に行くと可かつたのだが、其時はドリすに湛井まで行つて、そこから北へ豪溪まで二里足らずの道を、寒風に吹かれ乍ら車を飛ばした。

豪溪は高梁川の沿岸を宍粟まで行つて、そこから又支流の槇谷川に沿うて行つた所だ。

谿流に近く無數の巉岩が屏立してゐて、其上に矮松が點綴して居る所は、一寸耶馬溪の感じに似てゐる。畫僧雪舟の山水畫は、多くこゝの山水にヒントを得てゐるといふ事だ。

敢て天下の奇勝などと大袈裟に評する所でないが、私はこゝの岩石が皆花崗岩から成つてゐるのを、非常に面白く思つて觀た。

こゝから高梁川に沿うて、高梁町まで行くと色々面白い所があるさうだ。高梁町の在る所は、高梁川と其分流成羽川とが形つてゐる低地の中心點で、元は板倉氏五萬石の城下だつた。城址は

市街の北外れにある。臥牛山城といふのがそれで、南北朝時代以後、主を代ふること十三姓に及んでゐる。

此の町から出て今津といふ村まで行つて、そこから有漢川の上流上水田村の井殿へ遡ると、そこには大きな鍾乳洞があるし、又草間と云ふ村を山へ入ると、羅生門と號する石灰岩の洞門があると聞いたが、そこまでは行つて見なかつた。

岡山から兒島半島の宇野へ行く宇野線も、私はまだ一度も行つて見た事は無い。然し陸路から山陽線を來て、讃岐の高松へ行かうとする人は、是非乘つて行かなければ成らぬ線だ。

鹿田●妹尾●早島●茶屋町●彦崎●山加●八濱など云ふ中間驛があつて、其茶屋町驛からは別に又天城●林●稲田●琴浦●小田村●味野●赤崎●琴海などを經て、半島の南端下津井まで下津井輕鐵が通じてゐる。

妹尾●早島●茶屋町は何れも岡山縣有數の花筵の產地として知られてゐる所だ。此の茶屋町から南方二十町の地點に、佐々木盛綱が密に豫め淺瀨を探知して置いて平軍の不意に乘じて渡渉したといふ有名な藤戸の渡がある。行つて來た人の話で聞くと、今では一筋の小流が證ばかり其處

に殘つて居ると云ふ事だが、當時は東方兒島灣と、西方水島灘との間に、堂々たる水道が通じて居て、今のやうに半島を成してゐなかつた事は、平家物語の記事を見ても知れる。

其水道が埋沒した上に所謂第四期新層が形成されて開墾されたのが、現在の水田地藤戸村で、『戰場　全　入懇田　中、江汐猶　餘　一線　通、　應　是先登渡　馬處、　南村北巷綠秧風』といふ菅茶山の詩は、其實景を說明し盡して餘蘊のないものだ。

兒島灣其ものも昔から見ると、餘程其水面を埋沒されたらしい。地文學者の說に據ると、今妹尾驛の在る邊も、往時は確に海中にあつたに相違ないと云つてゐる。由加は其兒島灣の南岸由加山の下に設けられてある小驛で、由加山には手置帆置命と兒島の地主彥狹知命を祭つた縣社由加神社がある。昔は此のお宮が瑜伽權現と云つて、行基菩薩の開創に係る蓮臺寺の本尊にされてゐたもので、其時分から火難盜難除の守本尊として、衆人の篤信を受けてゐた事が、諸書に見える。驛から山までは、平地が一里餘り、それから登りが十八町あるさうだ。今では由加神社と蓮臺寺とが別境に成つてゐて、其蓮臺寺の方からは、瀨戸內海を隔てゝ、讃州の山河が好く見えると聞いてゐる。

終點の宇野からは、讃岐の高松へ渡る聯絡船が毎日朝の七時から約二三時間置に出て居る。

茶屋町から下津井へ行く線では、琴浦の東南二十丁に菅公左遷の時の泊舟地唐琴の泊があるのと、琴海の絕景と、下津井東驛に無線電信局があるのとが、注意すべきものだらう。終點の下津井驛には、豐長年中小早川氏の築いた城址が、殘つてゐる。古來四國へ渡る要津で、現在毎日三回宛丸龜行の聯絡船がこゝから出てゐる。

岡山から西へは、山陽本線の汽車が、笹瀨川の鐵橋を渡つて、備中へ入つて、庭瀨・倉敷・玉島と進んで行つてゐる。

倉敷は堂々たる町だ。花筵と疊表の生產に依つて富を積んだ町だ。こゝに尼子氏の屬將河副久盛の居た城址がある。

玉島もいゝ所だ。景色のいゝ所としては圓通寺・養父ケ鼻・八幡山がある。此邊へ來ると、街道は、前と反對にズッと北へ二里餘りも離れて行つてゐる。片假名の創意者吉備眞備素がある箭田だの、抽餅子で名高い矢掛町だのは其往還に當つてゐる。小田川が其國道に近く走つてゐる。

其勘定から見て、餘程海へ近く來てゐるに違ひないやうに思ふが、汽車の窓からはまだ海が見え

ない。いつまで經つても、丘陵と水田とが交錯する單調な景色を見せ續けられるばかりだ。

金光と云ふ停車場がある。云ふ迄もなく金光教の金光神社のある所で、岡山に在る黒住教の黒住神社と共に中國人の信仰を下するに足るものである。夏は沙美の海水浴場が、こゝから東南一里强の海濱に開かれる。

笠岡へ來て初めて海が見える。碧い碧い海だ。少し注意して見ると、神島・片島から篶島の向ふに沼隈半島が春はボンヤリと霞がくれに見える。其前を白帆が靜に通つて行くのも雅趣のある景色だ。

こゝで下りたら海上へ出て、高崎・白石・北木・眞鍋の島々から大飛・小飛の二島へかけて、舟で廻るのも面白いが、驛の直ぐ上にある古城山の公園へ上つて、老松の間から海上を一目に見渡すのも壯快だ。古城山は永祿時分に村上高重の居た城址で、頂上には狐王廟がある。此の笠原と北方井原との間に井笠鐵道が通じてゐる。此の鐵道の沿道は、石器時代の遺物が屢々出た所として、考古學者の注意を喚んでゐる所だ。

笠岡を出ると直ぐ短い隧道がある。其隧道を出てから大門といふ小い停車場へ行く迄は、汽車

が丘陵の中を行くやうに成つてゐて、海が幾度も隱顯するが、福山へ來るとスッカリもう平野の中に成つて、海とは遠く離れて了ふ。

福山は阿部氏の舊城下として、整つた感じを持つて居る。歌のうまい、字をきれいに書く病身の少女から、私はよく此處の消印のある手紙を貰つた。おちつきのある優しい心持を靜に抱いてゐるやうな少女だつた。

まだ一度も會つた事は無かつたが、福山の町の事は、其手紙にも歌にも度々書いてよこした。

しをらしくぺんぺん草に春雨がいと細く降る町のかはたれ

と云ふ歌を、其中でも私は一番深く感じて讀んだ。

福山城は私の好きな城だ。五層の天主閣が儼然として殘つてゐるのも嬉しい事の一つだ。蘆田川が直ぐ町の西を流れてゐる。こゝは、備後に入つての主要な都會で、生絲・繰絲・索麵等の生產が盛である。

海を見るには南へ三里程下つて鞆ノ津へ行つて、其處から西へ阿伏兎の觀音まで行くがよい。鞆までは輕便鐵道が通じてゐる。

鞆ノ津の名は古くから著れてゐる。有名な鐵器の産地で、鍛冶屋ばかりが軒を並べてゐる一廓がある。名物保命酒もこゝで出來る。津港としても奈良朝時代から既に相當に繁昌してゐたやうである。

海岸へ出ると、七浦の七戎で名高い仙醉島を前に、全島悉く岩石から成つてゐるといふ辨天島や●玉津●皇后などの諸島が連つて、何とも云へない好い景色だ。展望は、福禪寺内の對潮樓からが一番いゝとされてゐる。正和六年に空也上人が開創したといふ古い寺だ。

又、町の南方圓福寺には、足利時代の古城址が遺つてゐる。沼名隈神社といふ古い歴史を持つた國幣小社も、大字後地に在る。神功皇后が出征の際に海神をお祭りに成つた古蹟だと云ふ社傳もあるが、風土記の逸文に見える疫隈神社がこれぢやないかと云ふ説の方に私は左袒する。

阿伏兎の觀音へは、こゝから一里半程ある。仙醉島からそこの岬の松がよく見える。觀音は其松原の中と、そこから、盤臺寺の階段を高く上つて行つた所とにある。近くは瀬戸内海を航行する汽船や、帆船、遠くは澎湃たる怒濤を隔てゝ、四國の山々がよく見える。

福山から北へは又、府中まで兩備輕便鐵道が行つて居る。其沿線には、中國特有の綺麗な川があつたり、織物唄が窓から漏れて來るやうな町があつたりして、一時間半程もすると府中へ著く事に成つてゐる。

詩人山陽を生んだ菅茶山の黄葉夕陽村舍塾があつた神邊や、櫻山茲俊の居た櫻山城址のある新市の町などが其間にある。

府中は田舍臭い町だつたと思つてゐる。絣を織る家や、簞笥長持などを拵へてる指物屋が幾軒もあつた町の感じが、まだ頭の中に殘つてゐる。國府や國分寺の址も、其附近にあつた筈だ。こゝから北へ上下●庄原●三次を通つて、布野から赤名へ入つて行く石見街道が開かれてゐる。蘆田川の谷だの西城川、三次川、高山川などの谷が、其道を絡んで續いてゐる。

莊原は比婆郡でも有數の町だ。ちやうど西城川の南岸に當つてゐて、こゝから比和新市を通つて出雲へ出る道と、西城町へ入つて、伯耆へ拔ける道が開けてゐる。有名な神橋●唐門の奇勝があるのは、此の西城の谷を奥へ入つた御神山の北麓で、所謂帝釋川の溪流岩に激する所、河流の自然力を以て山脚を洞開した岩橋や、高さ二丈四尺、廣さ二丈、深さ二丈四尺の見上げるやうな大岩石から成つた洞門の大觀は、確に類を絶してゐる。

こゝにある帝釋堂は和銅二年の創建で、行基作の帝釋天が、堂内に安置されてゐる。堂の前の小流にある岩石の立たずまひも、一寸面白いと思つた。

三次までは莊原から西へ四里十六町あると云はれてゐる。尾道からも甲山・吉舍・三良坂など云ふ村々を越えて道が通じてゐる。廣島からは、藝備鐵道が來てゐる。

三次は冬に成ると隨分寒い所で、三月の中頃過に成らないと梅が咲かないさうだ。

『こんな山の中で、駄目でございます』

と云ふやうな事を、晝飯を食べに入つた家の女中が訴へるやうな口調で、氣の毒さうにさう云つた。

膳には鯉たの鮎たの淡水魚ばかりが附いて居た事を覺えてゐる。石見に續いてゐるといふ江ノ川は、此の町の直ぐ傍で三次川と合してゐる。鯉・鮎などは其川で獲れるのださうだ。

こゝで有名な霧ノ海の奇觀は、行つたのが時候外れだつたので見る事が出來なかつた。夏から秋へかけての雲霧現象がよく起る時分には、毎日朝十時頃まで、全市街が霧に蔽はれて、高い所から見ると、一面まるで海のやうだと云ふ。

『霧を見るのは、晴れ際が好うございますねえ。チツと見て居るうちに、或部分の霧がスウーッと剝けて行つて、山が現れる、森が現れる、次いで町の一廓が見えると云ふ風に一つ一つ霧の中から薄衣を破つて出て來るのが何とも云へない好い感じです』

と町の青年の一人は、私にさう云つた。

再び三次へ行く機會があつたら、今度こそは必ず見て來ようと思つてゐる。

福山から本線で西へ行くと、蘆田川の鐵橋を渡つて、丘陵の中を拔けて、松永から海岸沿の道を眞直に尾の道の市街へ入つて行つてゐる。

向島を前に控えた尾道の瀨戸が、直ぐ傍に見える。廣々とした海に對して居ない爲めに、こゝの風光は餘程扇頭小景的に成つてゐるが、其代りデリケートな整つた感じは確に在る。

尾の道は、山陽道の海岸に於ける水運の中心で、凡そ瀨戸内海を航行する船舶で、こゝへ寄らないものは一艘も無い。備後表の移出港として、頗る主要な地位を占めてゐる。

市街の直後に聳えてゐる山は、多田滿仲が再興したといふ古義眞言宗の名刹千光寺の在る大寶山で、こゝへ上ると、海岸玉ノ浦一帶の風光が眼下に美しく見える。

千光寺を外にして、此の町にはまだ淨土寺だの、西國寺だのといふ古刹がある。菅公左遷の時の旅館の址に祭つたといふ天神祠も殘つてゐる。

暇があつたら、向島まで渡つて見るが可い。和泉式部が居たといふ傳說のある所で、古くは歌島と云つた。散木集に『歌の島軒の下には音づれて舟にはのりの聲ぞ聞こゆる』と詠まれてゐるのもこゝだ。木曾義仲の遺孤が大夫坊覺明に藏匿されて、こゝに居たといふ口碑もあつて、島内に今猶、木曾谷、覺明社などいふものが殘つてゐる。此島の前にある小島を小歌島といふのは、此島の舊名歌島に因んだもので、春は全島悉く桃・櫻・梅の花に蔽はれて、非常に風景がいゝと聞いた。

尾道の次には糸崎・・と云ふ小驛がある。停車場の少し東に神功皇后關係の傳說を持つた八幡神社がある外、陸上では別に觀る物もないが、こゝから海上へ出て、隣境安藝の生口島あたりへ行くと、大小幾多の島々が碧波の上に點在してゐる瀨戸内海特有の絕景を擅にする事が出來る。春は生口島に桃の花が咲き、八十八夜時分には能地の浦の海上に無數の鰯か浮かんで、海水がそれが爲一時に紅變すると云はれてゐる。

糸崎から又次の驛は三原だ。備後の西偏を扼する要關の都市で、戰國時代には、毛利氏の分藩小早川氏が、こゝに居城を占めて、全道を瞰制して居た。沼田川が直ぐ傍を流れてゐる。

大善寺・宗光寺・正法寺・妙正寺などといふ名刹が市街の内外にある。其中でも妙正寺が一等名高い。享保の創建で、年代は新しいが、後には野畑山を負ひ、前は直ちに海に枕んで眺望が頗るいゝ。詩人廣瀨青村が『粉壁丹樓夕照多、如城巨刹映蒼波、孤村隔在青山下、一葉扁舟賣菜茄』と詠じたのは、此の寺での事である。

三原の町から北へ少し行くと西野の梅林がある。天正年間に小早川氏の開いたもので、方十町の間に、約一萬株の梅樹が植ゑられてゐる。主に白梅だ。

加羅加波神社も此邊では有名なものだ。町から東北へ十五丁程もあるだらう。一般に厄病除の神として知られてゐる。式内古社で、祭神には天照大神と素盞雄命を祭つてある筈だ。

宮島へ

三原を出て一歩安藝へ入ると、山川の形勢が俄に激變する。海光が段々遠く成つて、目を遮るものは主として低山性の山丘である。そして其山と山との間を、潺々と溪流が走つてゐる。全く海から山への急速な轉移である。

山が醸成する水分の多い大氣が、凡ての物に照射する光線、それから來る反射の色彩に、心持のよい潤ひと清鮮味とを與へて居る。平凡な並木、道傍の雜草、半面だけ日光を受けて美しく透通るやうな綠色を放つて居る陸稻畑の何れにも、皆、大自然の活々した生命が躍動いて居る。

本郷といふ停車場がある。

此邊は一帶に小早川氏の勢力圏だつた所で、舊城址を中心に、小早川氏累代の墓のある寺だの小早川氏を大檀那として其保護の下に繁榮した寺などが幾つもある。本郷から東北の山の中へ一里半程も入ると、安藝の高野と云はれた臨濟宗の本山佛通寺がある。

此邊へ來ると、海岸は國道を越えてズツと南に成つて居る。忠海だの、山陽の生れた竹原だのいふ町が、ちやうど本郷あたりからは眞直に南に當る筈であるが、そこまで行くには、山を越えて三四里も行かねば成らぬ。ここいらの波打際が殆ど徒崖を以て形成されてゐるのも、須磨明石あたりと違ふ顯著な點である。

本郷の次には、河内・白市の停車場があつて、西條柿・西條酒の名產地西條驛が其の次にある。こゝから竹原に通ずる一路が南へ續いてゐる。

名所では、吾妻子の瀧が聞こえてゐる。國分寺も附近にあるさうだ。

八本松・瀨野などといふ驛が、丘陵の中にある。

海田市は吳線の分岐點だ。町から西へ一里程行つた府中といふ所に神武天皇行在所の蹟だといふ多祁里宮がある。廣島へもそこから西へ一里許で、往古はこゝに安藝の國府があつた。

吳線は徒崖の上ばかりを通つて行くやうな鐵道だ。此の鐵道は殆ど海軍の爲に存して居ると云つても可い位で、沿線各驛から吳へかけては江田島兵學校・海軍鎭守府・造兵廠・造船廠・海兵團な

どがある。港内の感じも、如何にも軍港らしい所がある。巨大な戰艦が悠然として近く港頭に横つて居る光景も、外では一寸見られない壯觀だ。

兵學校のある江田島の南方、音戸瀨戸の急潮を隔てゝ、海上に、倉橋島がある。倉橋島は元地峽を以て本陸に通じて居たのを、清盛が其間を開鑿して今の音戸の瀨戸を造り、水運の便に供したのだと云はれてゐる。江田島・倉橋島の外に能美島といふ島も附近の海上に在る。

呉から海田市へ歸つて、またそこから西へ行くと間も無く、牡礪の名産地を以て知られてゐる廣島の町が見え出して來る。

廣島は可なり新しい地層の上に發達した關西式の綺麗な町である。天正十七年毛利輝元の築城以來、福島・淺野二氏の統治時代を經て、漸次今日の繁盛を致したもので、城址は今第五師團の司令部に成つてゐる。廿七八年戰役には、明治天皇の大本營がこゝにあつた。五層の天主閣が矢張こゝでも昔の儘に儼存してゐる。

國泰寺・不動院・饒津神社などが、廣島では名利古祠として知られてゐる。饒津神社の在るのは高い山の上で、そこから又、二葉山まで上ると、廣島全市の瓦甍が目の下に見えて、江田島あた

りに低く雲が鎖いて居るのが、美しく見渡される。

淺野氏の別邸縮景園も、一寸いゝ所だ。

廿七八年戰役の時に、兵站基點となつて、幾多の大行李小行李を積出した宇品港は、此の廣島の埠頭で、廣島からそこ迄は長い長い單調な道が續いてゐる。宇品線が本線から岐れて、其埠頭まで行つてゐる。

廣島から北へは、例の三次へ行く藝備鐵道が、吉田川の流域を走つて、毛利氏の發祥地吉田の傍を通つて、東北へ國境を越えて進んでゐる。吉田には毛利氏中興の祖時親が築いた郡山城址がある。元就が僅に二千の小部隊で、七萬に近い尼子氏の大軍團を擊破した土取場合戰の行はれたのは此城での事だ。元就の墓も附近にある。

本線は、廣島から横川・己斐・五日市・廿日市を通つて、それから宮島まで行つてゐる。何れも小驛だが、横川からは太田川沿岸の可部まで可部軌道が通じてゐる。可部は濱田街道と三次街道の分岐點に在る町だ。有名な山蘭紬はこゝで出來る。

廿日市には中國の名族大内氏を滅して、毛利氏に滅された陶全姜の墓がある。驛から少し北に

ある洞雲寺といふ寺がそれだ。

嚴島へ行くのは、廣島から舟に乘つても二時間程かゝれば行けるが、宮島驛まで汽車で行つた人は、そこから連絡船に乘つて行くのである。聯絡船は大抵一時間置に出てゐる。

嚴島は豫期してゐたよりも大きな島だ。東西が三十町、南北が二里半あると云はれてゐる。社背の彌山は、可なり遠方からでもよく見える。青々した其美しい山を前に、朱塗の殿堂が海に近く立つてゐる光景は、春にふさはしい優雅な眺である。

難を云へば、社殿のある場所が遠淺の淤泥地帶で、所謂丹碧海水に映ずると云ふ誇張的の形容辭を、實景として觀る事の出來ないのは遺憾であるが、それは望む者の無理かも知れない。

『先生、僕は嚴島へ行つて幻滅の悲哀を感じました、もつと海上の深い所まで彼の廻廊が突出てゐると思つたんです。みんな繪虛事なんですねえ』

と或る中學生がさう云つて、さも失望したらしい顏をしてゐた事があるが、元來交通の不便な時分に、貧弱な經驗を比較して選出した日本三景といふやうなものに、最初から全信用を拂つてかゝるのが間違つてゐるのだ。

日本三景は絕對に全日本の第一級的佳景を代表したものでなければ成らぬと云ふ豫斷から離れて見れば、確に嚴島などは、其纖巧な點に於て、或る整調を持つた京都的の柔い明るい感じのある點に於て、大に推稱すべき名所であらう。私はさういふ意味で嚴島をいゝ所だと思つた。

秀吉が戰勝記念に建てたといふ千疊敷、それと相接して建てられた五重塔、廻廊の長押に懸列ねてある古名畫、優雅な形式の吊燈籠、其外に見るべき物が澤山在る。

島の中には、鹿が恰度春日の社頭で見るやうに、自由に歩いてゐる。海と鹿といふ對照が一寸生物學的に面白い。鳩がこゝではよく人に馴れて、餌を遣ると、肩へ乘つたり、手で捕へても逃げないで居たりするのが、可愛いと思つた。

斯うした女性的、京都的、繪畫的と云つたやうな感じが到る所で觀られる。

嚴島は男が一人で行く所では無いかも知れない。

宮島以西

宮島から西へ行くと、汽車は又可なり高い丘陵の脈を右に見乍ら進んで行く。

此處いらは長州兵が幕府の征長軍を國境で遮止する爲に、必死の抵抗を試みた所で、宮島驛の西方大野浦驛の附近には、四十八坂、大竹驛の西方には小瀬川の戰蹟がある。

大竹驛の一つ手前に、玖波といふ驛がある。此邊へ來ると、汽車の窓からは、殆ど直南に嚴島が見える。海岸には感じのいゝ、海水浴場が、幾つも刻んで開けてゐる。こゝいらの海が、内海らしくない廣濶な展望を持つて居るのも、一つの特色であると云つて可い。

大竹で下りて、小瀬川の溪谷に沿ふた可なり險しい路を北へ四里程遡ると、魚切、蛇喰など云ふ奇勝があつて、そこには色々の怪奇な形をした巉岩の間を、綺麗な溪流が奔つてゐる。不思議な名前の附いた洞穴が其邊に多くある。

大竹から岩國までは、十分か十五分で行ける程の近距離だ。吉川氏の舊城下で、停車場から其

町までは一里以上も西北へ隔たつてゐる。城址があるのは有名な錦帶橋と臥龍橋が架つてゐる岩國川の北岸で、其外周には山が、三方から近く迫つてゐる。萬葉集に「周防なる磐國山を越えん日は手向よくせよ荒き其路」と詠まれた峻峰磐國山が、直ぐ近くに在る。昔は滿山皆楓樹で、秋の紅葉期には、山麓の岩國川に其廢葉が落ちて、所謂江上に錦を流すの美觀を呈したさうだ。岩國川の一名を錦川といふのも、其上に架つてある橋を錦帶橋といふのも、皆、それに因んだ命名である。

錦帶橋は日本がまだ歐洲の科學的文明を取入れない延寶頃に設計されたものとしては、確に驚く可き異數の業績である。只經驗から割出した單純な非科學的頭腦で、これだけの物を拵へ上げたのは偉いものだ。設計者は當時の領主吉川廣嘉自身だと云はれてゐる。

此の錦帶橋を向ふへ越した所に、舊城址の公園があつて、其近所に一千年の沿革を持つた古社白山比口神社がある。公園の中には藩主歴代の靈を祀つた吉香神社といふのもある。

汽車はこゝから全く海岸に沿つて走つてゐる。藤生・由宇・大畠などいふ停車場があつて、案内記などには、色々の寺や神社、瀧などの名が書列ねてあるが、態々下りて行くだけの大した所も

無いやうだ。

柳井津へ來て、初めて下りる必要を感ずる。柳井津の町はちやうど、室津半島の咽喉部に當る要港で、こゝから室津までは六里たつぷりある。大畠、柳井津間を通る汽車の窓からも注意して見れば、室津の鼻が左の海上に黑く見える筈だ。

室津はいゝ所だ。舟着として昔は隨分賑つた土地で、藩政時代には遊女なども置かれて居たらしく『忽有北船來　下　碇、樓々　紅袖一時招』と云ふ古人の詩などがある。今は稍衰頽の感があるが、昔榮えて今衰へて居るといふ所に、特殊の情調があり、カラーがある。後には大座山があつて、前には近く上關海峽の狹水路を隔てゝ、長島の上關港と所謂粉壁相對してゐる。

誰だつたかの紀行を讀んだ中に、舟で此の邊へ來て、室津の船宿へ上つて、鯛の刺身や潮煮、鰡の刺身などで酒を呑んだら、廉いので驚いたと云ふやうな事が書いてあつたのを覺えてゐる。今でも此の室津の近海では鯛がよく獲れるさうだ。

此の室津から對岸長島へ渡つて、上ノ關から海上を室積へ行くのも、古い時代の海驛の感じを味ふ爲めには一寸又變つて居て面白いだらう。

室積も和船の港で、昔は隨分榮えた所として知られてゐる。こゝにも遊女が居て、室の遊女と云つたら有名なものだつた。性空上人が生身の普賢菩薩を拜したいと云つて佛に祈誓したら、室の遊女長者を拜めと云ふ示現があつたと云ふ十訓抄の記事は、こゝの事ださうだ。普賢寺といふのが其性空上人の遺址として殘つてゐる。室津よりも寧ろこゝから周防灘を見た感じの方が、展望が廣い。御手洗大師のある象鼻山へ上ると、牛島・尾島などの青螺が、直ぐ目の前に見えて、遙向ふに姫島が、波の高低に伴れて隱顯するのが、まるで漂うて居るやうに見える。其後に連つてる陸地は、豐後の國東半島で、そこの文珠山に白い雲のかゝつて居るのが、何とも云へない程いゝ眺だ。

私は曾て九州を放浪して、此の國東半島の孤村に暫く村醫をして居た事のある友人から、色々そこの話を聞いた中に、姫島の話が一等感興を惹いた事を覺えて居る。

何でも姫島には、矢筈山だの達磨峰だのといふ山があつて、其山々の間には、眞白な砂の上に青々した松が、長く緑の線を引いて連つてゐる中に、比賣許曾神社なんていふ古社がある。そこの社傍にある石垣の罅隙から拍子水と云ふ名のついた鐵酸泉が湧出てゐて、參詣者がそこで手を

拍つと、其響の高低、強弱に應じて多量に出たり少量に出たりする。それが中々面白いさうだ。

私はさうした光景を思浮べ乍ら、島田・虹ケ濱など云ふ小驛を幾つも通つて、三田尻まで行つた。

名高い妙見宮のある下松・ただの、毛利の支藩四萬石の舊城下で、今は海軍練炭所のある德山・だのが其間にある。

德山から北へ石見の津和野まで宮市街道が續いてゐる。須々萬・鹿野・堀・出雲などの町が其往還にあつて、須々萬・鹿野二村の間には、岩國川の岸に近く龍門寺があり、又鹿野の町には文中三年明機上人の開創したといふ臨濟禪の巨刹漢陽寺がある。堀には式内古社出雲神社がある。

此邊は、大内氏・毛利氏・陶氏の古蹟が相錯綜して存在してゐる所で、須々萬には大内氏の屬將山崎伊豆守が、毛利氏の包圍を受けて敗死した須々萬城址があり、德山の次驛福川・ふくで下りて北へ二十丁程行つた所には、陶全姜が大内氏の勢權を簒奪して自立した若山城址がある。其外にも大内氏毛利氏關係の舊蹟は此邊を中心に、廣く四方に亙つてゐる。

汽車の窓からは丘陵を越して向ふに海が見えるかと思ふと、いつの間にか又丘陵ばかりの單調

な外景が續いたり、海岸線に沿うて、絶えず海上の島々を左に見乍ら進んで行つたりする。

停車場の掲示板には、大抵何處でも定つて、海水浴場へ何丁といふやうな事が附近の名蹟中にも書列べてある。柳井津から三田尻までの間では富海・の海水浴が、風景もよし、設備も最整頓して居る。夏は四方から寄つて來る浴客で隨分此の停車場が賑ふさうだ。

苦谷の菖蒲沼たの、八幡岬だのといふ名勝地も其附近にある。風神を祭つた杵崎神社といふのが、岬頭に近くある。

三田尻・驛のある町は、今防府町と呼ばれてゐる。三田尻といふのは舊名で、それが防府と改稱すると共に、隣接地の宮市町と併合した。

三田尻も宮市も歴史の古い町で、殊に三田尻は古くから防長米の重要輸出港として繁榮してゐた。何れも第四期新層の上に出來た町で、所謂佐波低地の東偏に當り、此邊から西方大海灣へかけての可なり廣い面積には、西部山陽道の沿岸に珍しい廣袤の砂質壌土で形成された沃野が續いて居る。

『昔は此邊も海の中だつたんで、其時分には、大海灣と三田尻灣とが一つに續いて大きな海灣を

形つて居たと云ふ事を開きました」

と、隣席の乘合客が非常に話好きな人で、色々私に話して聞かせて呉れた。

昔の國府があつたのは、宮市の少し東の方で、そこに國分寺もある。宮市には又、宮市天神といふ立派な天滿宮の社が、今酒垂公園に成つてゐる天神山の南麓にある。松林があつたり、池があつたり、梅が咲いてゐたり、景致に變化の多い所だ。

停車場から反對に又、西へ國道を進んで行くと國幣中社玉祖神社がある。佐波川が直ぐ其傍を流れて大海灣の方向へ進んでゐる。防府から東北出雲村へ續いた宮市街道が、其流域を走つてゐる。此道と反對に防府から西北に進んでゐる道は、北方萩に通ずる長州街道で、そこには延長二百八十一間の大隧道が、鯖山峠の下に穿たれて、峠の向ふには、曾て中國の高野山と呼ばれた曹洞宗の大刹禪昌寺がある。

舊來の交通路を外にして、別に周防・石見の間を通ぜんとする防石鐵道が、三田尻から出てゐるが、まだ那美・・までしか通じてゐない。

中の關も佐波郡での名邑だ。三田尻の町から西南へ一里半以上ある。室津の對岸上ノ關並に本

州の西端下ノ關と、三關相對立して、中古時代までは周防灘での三良港と呼ばれたものだが、今では港としての存在を失つて了つて、鹽田と化してゐる。

三田尻から佐波川の鐵橋を越えて、大道・・驛を通過ぎると、又椹野川の鐵橋があつて、そこに小郡・・の停車場がある。こゝにも大内氏と毛利氏との遺蹟が方々にある。上郷八幡、中領八幡などが、名祠として知られてゐる。

山口の町へはこゝから三里足らずしかない。山口線の汽車が、湯田温泉所在地の湯田・・を經由して、山口・・へ行つて、そこから更に東北へ周防の國境を越えて、ズツと石見境の德佐・・まで通じてゐる。

湯田温泉は、長州落で名高い三條公等の七卿が、滯在して居た事のある所で、山口が近いから今でも隨分其方面からの浴客で繁昌してゐる。こゝから山口までは、一哩か一哩半の道程で、汽車に乘れば十分かゝらずに行ける。大内氏が古くから本據として居た所だけに、錆のついた落ちつきの在る町だ。四面には近く山が迫つてゐて。市街のある所は、ちやうど盆地の底部に成つてゐる。高等商業學校なんかがあつて、斯うした山懷に似合はない繁華な都會だ。毛利元就を祀

つた別格官幣社豐榮神社がある。

大内氏時代の城壘は今、龜山公園といふ公園に成つてゐる。こゝへ上ると四邊の形勢が手に取るやうによく見える。鴻ノ峰だの右田山なども明かに指點される。北の方には長門境の山々が幾重にも屏重して、其間を貫いて萩に行く國道が白く帶のやうに續いてゐる。其奥には佐々並・明木などといふ山驛がある筈だ。

明治十年頃の事だつたと聞いてゐるが、萩の士族共が政府の處置に憤慨して、方々で亂を起した時に、町田梅之進と云ふ者が、一隊を擁して進んで來て、所在の民家に火を放つて氣勢を揚げ更に前進しようとする所を官軍の爲に遮られ、首魁梅之進は銃丸に中つて戰死したといふ其地點が、ちやうど此の佐々並・明木に當つてゐる。

其時分の萩は、實に不平黨の策源地だつた。前原一誠が黨與三百人と萩城にたて籠つて、反旗を飜へしたのも其時分で、陸上から關口縣令に指揮された歩兵軍が攻めたのだけでは滿足しないで、海上から艦載砲で榴彈を飛ばして、城内を砲擊するなどといふ大袈裟な討伐手段まで行はれてゐる。考へて見れば、此の萩の騒ぎも明治維新の突發的な革命が齎した反動の一つだつた。萩

の前原、鹿兒島の西郷、二人者の末路には何處かに共通した運命の過程がある。

私は山口の町から、又汽車に乘つて德佐へ行く道で、まだ見ぬ萩の町を腦裡に描き乍ら、色々の事を考へて居た。

毛利氏が、あれだけの大藩の實力を持つてゐ乍ら、豐臣氏にも、豐臣氏の勢力簒奪者たる德川氏にも默々として隨つて、關ヶ原の戰が濟むと、あの裏日本の不便な所まで早々と隱退して行つた所に時代を大觀する明敏さがある。喝を負ふ虎、さうした潛在的の勢が、長藩の内部には絶えず活きて動いて居た。薩摩の島津氏もさうだつた。明治維新が、此の兩藩に依つて致されたのは偶々其潛在力が、表現の機會を得て動いたのに過ぎない。

吉田松蔭、高杉晉作、大村益次郎、木戸孝允、伊藤博文、山縣有朋、私は長藩が生んだ人々の名を色々と算へ上げて見た。何れも皆自分の力で新時代を作つて、其新時代を支配して行つた人だ。山縣氏が、今日の政界にまで隱然たる勢力を持つて居て、政友會でも、憲政會でも、其鼻息を窺はなければ、立つて行けない所に、まだ長藩の力が延長して殘つてゐる。

汽車は、今其長州藩領の中部から、北東に進んで居るのだ。

地福川谿谷に沿ふて地福驛がある。徳佐といふ驛は、津和野道が野坂峠へかゝる一寸手前で、北方には徳佐峰が、海拔四千百尺の高さに聳えて居る。阿武川が直ぐ傍を流れてゐる。こゝから津和野までは二里餘しかない。今はこゝが山口線の終點に成つてゐるが、山陰本線が、段々西へ伸びて來ると共に、此線も亦更に北進して、陰陽二道の交通線を續けることに成る筈だと聞いてゐる。

小郡から西へは、嘉川・阿知須・厚東などいふ小驛があつて、宇部驛に續いてゐる。驛から宇部の町までは、宇部輕鐵が通じてゐる。今でこそ宇部は、相當な海村として其附近に立派な整理耕地を持つてゐるが、元祿頃までは此邊一帶が廣漠たる荒蕪地だつたのを、椋梨權左衛門といふ土地の有志が、十年の苦辛を重ねて、新墾したのだといふ。

宇部驛から北へは又、別に船木鐵道が國道に近く沿つて、船木まで行つてゐる。舟木楠といふ硬質の柘植材で拵へた名產の楠が出來る所で、厚狹郡での首邑である。

此邊は又、古くから良質の石炭の出た所で、傳說に據ると、神功皇后の三韓征伐の時、造艦用

材として徵發した殘木が、地下に埋沒して炭化したのだと云ふ事に成つてゐる。龍正炭坑だの、須惠炭坑、起業炭坑だのが、今でも小野田驛を中心にして、南北各一里の範圍內に散在してゐる。小野田セメント會社の經營にかゝるセメント坑もあつて、そこの町までは小野田輕鐵が通じてゐる。

神功皇后の遺蹟だといふ烏帽子岩が、其小野田驛の西にある。

厚狹と云ふ停車場が、それに續いて在る。厚狹は隨分古い歷史を持つてゐる土地で、其名は既に延喜式に見えて居る。近く厚西・厚東の二村がある。厚東は、厚東川流域の地で、そこには厚東氏が中世以後霜降峰の山腹に城を築いて、久しく蟠居してゐたが、大內氏の興起するに及んで、悉く滅された。

厚狹は、近年に成つては寧ろ衰殘の町といふ感じのある所だつたが、例の赤間石の硯が厚西村其他から出るのと、大嶺線の乘繼驛に成つてゐるのとの爲に、近年は相當に繁華な所と成つた。

こゝから大嶺へ行く迄には、厚保だの四郎ケ原・伊佐などといふ驛があるが、到る所只炭山の連亙で、殆ど下りて見るやうな所はない。旅客は大嶺驛まで直行して、終點で下りたら右へ萩街

道の明木に繼いてゐる縣道を秋吉まで行つて見ると可い。そこには高さ二十米突、幅五六米、深さ六町餘に及ぶといふ大きな石灰洞があつて、そこから轟轟と地下水が流れ出してゐる。秋吉の瀧穴といへば昔から有名なもので、科學思想の進まない時分には、これが非常な怪現象として、驚倒されてゐた。

然し此種の穴は、有名な瀧穴以外に、幾つも其邊に散在してゐる。

『さうですか、貴君はまだ秋吉臺へ行つて御覽に成らないんですか。アノ瀧穴の水源は、質地に行つて御覽に成るとよく分りますが、石灰岩質の地上に穿たれた無數の擂鉢狀陷沒孔から地下へ進入して行つた水が、地磐の脆弱な所に罅隙を求めて流出してゐるんです。此の陷沒孔を地質學者の方ぢやドリネと云つてますが、畢竟雨が或る一定區に瀦留して、其處から恰度齒牙についた乳酸菌が琺瑯質を侵して行くやうに、段々地磐を侵蝕した結果ですね。だからあの秋吉高原ぢやア、何處にも溪流つてものがありません』

と、曾て或る講習會場で一緒に成つた地質學者から、私はさう云ふ話を聞いた事があつた。大理石や海軍で使ふ良質の無煙炭が、此邊の地下に層を成して居る事も有名な事實で、抑も最

初此の大嶺線が出來たのは、重に此邊の產炭を海岸へ搬出するのが目的だつた。

こゝから本線へ歸つて、厚狹から更に西進すると、暫くは凡山凡水の中を汽車が走つて行くが埴生驛を通越すと光景が急に一變して、今まで見た瀨戸內海のゴチャゴチャした景色とは違つた大きな視野が其前に開かれて來る。小さな無數の島の代りに、尨大な九州の姿が、ドッカリと前に横つて見える。

こゝで下りて海岸まで半里程の道を行くと、海水浴場のある象根の松原が在つて、そこからは長府の町が、所謂長汀曲浦の向ふに見える。こゝいらではもう海岸線に徒崖が無くなつて、須磨や明石で見た青松白沙の海濱が繪で見るやうに長く續いて居る。

長府へ行く迄には、こゝから吉田川の鐵橋を越えて高杉晉作の墓を附近の名蹟として持つてる小月驛を最一つ通つて行かねばならぬ。小月は桃だの蜜柑だのの果樹園が割合に多い所だ。案內記を見ると、火防觀音だの、疣觀音だのと觀音樣の名前ばかりが、こゝの名所の中に澤山書いてある。こゝから北方西の市まで長門鐵道が通じてゐる。

長府は古く國府のあつた所で、仲哀天皇熊襲御親征の時の豐浦行宮もこゝにあつた。今俗に二

宮といふ忌宮神社は、天皇の殯宮址だと云はれてゐる。有名な式内古社で、こゝの數法庭といふ祭は、隨分不思議なものださうだ。附近には天皇の御陵もある。古刹としては、大内義長が毛利氏に對抗して勝山城で敗戰してから、矢折れ刀盡きて、竟にそこで怨を呑んで自殺したといふ功山寺の外に、修禪寺だの笑山寺だのいふ寺がある。國分寺も僅に其一部だけが殘つてゐる。功山寺の門と笑山寺の十三重塔は、是非一度見る必要があるものだ。

驛から少し又西へ行くと、海岸に突出した徒崖の上に松崎神社がある。波が直ぐ其下へザ、ザーッと凄じい勢で寄せて來てゐる。こゝから海上干珠・滿珠二島の浮かんで居るのを見た景色は、此邊での絶景だといはれてゐる。

町の感じとしても、長府は上品で靜な、おちつきのある町だ。一日や二日で直ぐ別れて行つて了ふのは惜しいやうな町だ。

『長府はいゝ所ですねえ』

と一度行つた事のある人は、大抵誰でもさう云ふ。實際長府は、海を見ても、山を見ても、のんびりした柔い感じのある佳い所だ。

こゝから汽車は有名な長門での式内古社で、今官幣中社に成つてゐる住吉神社のある長門一ノ宮驛を通つて、幡生といふ小驛を通つて、長く續いた丘陵の中を、眞直に下ノ關まで進んでゐる。そして長い長い山陽線が、そこで終止して居る。

『あゝ到頭本州の果へ來て了つた』

と思ふと、誰でもホッとしたやうな、便無いやうな一種の感傷的な心持がする。私は初めて下の關へ來た時に、まるで此處を立つたら、十年も二十年も歸つて來られない人の樣な涙ぐましい心持に成つて、平家の一門がそこで滅亡した壇ノ浦の古戰場や、毛利氏が海岸防禦の爲に急拵への砲臺を築設した海濱やらを見て廻つた。

其時の私の胸には、時々起る氣まぐれな科學萬能主義が、スッカリ跡を潛めて、戲曲的な平家の末路が生んだ色々の傳說を率直に受入れられる純眞な心持が張つてゐた。平家の亡靈が蟹に成つたのだといふ平家蟹もチャンと買つて、紙に包んで貰つて、バスケットへ入れた。長府を失ひ九州を離れて、陸地と一縷の聯絡も持たなかつた平家の一門としては、蟹にでも成るより外に道が無かつたに相違ない。

安德天皇の尊靈を祀つた官幣中社赤間の宮だの、御陵墓だの、其後に數多く並んだ平家一族の墓だのを見ると、又新しい涙が出る。

日清講和談判の場所として名高い春帆樓は行つて見なかつたが、停車場から東へ二十町程行つた所だ。當年兩國の全權委員だつた伊藤・陸奥・李鴻章の悉くが、皆死んで了つて居るのも考へて見れば不思議な因緣である。

あらかた市内の見物を終つて埠頭へ出ると、其處には白いペンキ塗のランチが待つて居た。

やがてエンヂンの音が機關部の方で聞こえ出すと、ランチは徐ろに船首を一廻轉して、早鞆の瀨戸の急潮を痛快に蹴破しつゝ進んで行く。

『さよなら、さよなら』

と私は離れて行く埠頭の方を向いて、口の中で何度もさう云つた。

今まで眞赤に見えて居た西の空の夕燒雲がいつの間にやら灰色を帶びて來たと思ふと、見る見るうちに其處いらが暗く成つて來て、波の向ふに灯が見える。門司の町の灯が見える。

九州東海岸（上）

關門聯絡船から上つて、門司の埠頭に立つと、『九州へ來た』といふ直感が、頭を支配して、總ての風物が、物珍らしく映じて來る。今まで右に見て來た彦島が、此處からは大瀨戸を越して直ぐ左に見える。

門司は良い港だ。町としても實に立派な町で、歷史の新しいにも拘らず、異數の敏速な發達を遂げてゐる。有名な筑豐炭の重要輸出港で、企救半島の要樞であると共に、實に全九州の咽喉たる地を占めてゐる。私が初めて此處へ來た時、一緒に聯絡船に乘合せて、一緒に上陸した大阪の藥種商人らしい男が、

『門司は盛に成りましたよ。私は毎年此方へ一度は屹度參りますが、下の關の繁昌を段々此方へ取られてゐるやうな氣が致しますなア』

と私にさう云つたのを、私は今でも至言だと思つてゐる。一寸埠頭に立つて見てゐても、何處

となく活氣づいて見える市況が、如何にも此の僅々二三十年の間に、蕭條たる漁村から、メキメキと仕出した門司の、躍動的生命を語つてゐる。

こゝは昔の文字の關のあつた所で、關址の正確な地點は不明であるが、舊門司に關守の井と云ふ別名のある古池の邊がさうだらうと云ふ事に成つてゐる。恐らく天平頃から在つた關で、元曆二年の源平戰には、源範頼の攻擊軍が、こゝで知盛軍と戰つて堡壘を擊破してゐる。兎に角昔から長門路の要樞だつた事は確で、今の門司市の附近、古城山には天治五年に下總前司親房の築造した城址も殘つてゐる。

名祠としては、門司市の本町通りを北へ出拔けた所に、甲宗八幡宮がある。鄕社として認められてゐるに過ぎないが隨分由緒のある古社で、神功皇后御着用の鎧が神體に成つて居ると云はれてゐる。清和天皇の貞觀二年に、太宰大貳藤原岑成が勅を奉じて創建したものであるが、今の社殿は明治元年の改修である。文字の宮といふのが其古稱で、こゝから見ると關門海峽が直ぐ眼の下に望まれる。古代に於ける三韓の朝貢船は、皆此の文字關を目標に漕寄つて來たもので、此の社の直下に當る海岸には、是等の朝貢船を繫留した石だといふ三綱石が、未だに殘つてゐる。

甲宗八幡の北方にある和布刈神社も、李部王記に、和銅三年豐前隼友の神主、和布刈の神事を始め奉るとある由緒附の古社で、毎年十二月除夜に神官が鎌を持ち、炬火を擧げて、前階より海中に入り、和布を刈つて朝廷元旦の御饌に奉進するのが例式に成つてゐる。神功皇后征韓の御時、此社の神が靈威を現して干滿の二珠を奉獻し皇軍爲に勝を奏したので、凱旋後奉祀されたものであると云ふ。こゝの直下は即ち歌に名高い早鞆の瀨戸で、此瀨戸を隔てゝ對岸壇の浦とは、五六丁程の距離しかない。

早鞆の瀨戸には、恐しい程猛烈な勢で、潮が渦を卷いて其水隘を流れて居る。そして其恐ろしい急潮の上を、巧に揖擢で操縱して、眞帆片帆が上りつ下りつして行く樣は、實に美觀といふよりも壯觀である。私は神前の石に腰を懸けて、いつ迄も其奇景を貪り望んで居た。

門司から見た關門海峽の一般的眺望は、こゝから早鞆の瀨戸を望見する感じよりは、ズッと粗大で、其癖直ぐ前を彦島が遮つて居るので、一望海濶といふ大景は無いが、それでも此處から一歩出れば、直ぐ外海だといふ感じが、旅客の心を緊張せしめる。

『朝霧の中を、ポーッといふ鈍重な汽笛の音を聞き乍ら、關門を出て行く時の心細さつたらあり

ませんよ。何だかこれつきりで日本の見じまひだと云ふやうな氣がしてね」

と曾て新婚數日の後、支那の僻地へ赴任した事のある私の友人が、歸つて來た時にそんな事を話した事があつた。

交通機關としては、九州に於ける重要幹線の鹿兒島本線が、此の門司から小倉街道に沿うて、古來企救ヶ濱の名を以て知られてゐる企救半島の西海岸を西南に走つてゐる。煤煙でふすぶつたやうな汚ない汽車だ。

大里といふのが其第一驛で、驛の南方二町の柳浦町には、安德天皇壽永の行宮址たる柳の御所址がある。源軍の緒方の三郎が攻寄せて來ると云ふので、密に山鹿城を落ちて、高瀨舟に棹し、

『夜とほしに豐前國柳といふ所に落ちつき給ふ。草むらの蟲を聞きて大臣殿、さりともと思ふ心も蟲の音も弱り果てたる秋の夕暮れ、彼の處は地景眺望少し故ある所なり。櫻梅桃李うゑて九重の氣色想出でければ、さても渡らせ給ふべき御心ありけり。忠度、都なる九重の內戀しくは柳の御所を立寄りて見よ、緒方の三郎やがて襲ひ來ると聞こえければ、彼の御所にも僅七ヶ日ぞおはしける』と、長門本平家物語にあるのは、此所の事だ。

德川幕府時代、今の門司港がまだ一漁村で、大船を入れる事の出來なかつた時分には、こゝが九州諸大名の江戸へ上る發船地に成つて居た。賴山陽の詩に『踏盡肥豐萬疊山、路窮左右海波灣、眼明先作歸鄉想、粉壁烟墻是赤關』といふのがある。當時の俤が眼に見えるやうだ。

此邊から小倉市へ行く迄の海岸一帶は、古くからの松林地帶で、今でも此大里附近の海岸には昔時の俤が殘つて居る。所謂白砂翠松相映發する風光の地で、昔は長濱から小倉市へかけての地點が、殊に名勝地として聞こえてゐたが、今は肝腎の長濱附近の老松樹がスッカリ絕滅して、却つて大里あたりに企救の濱松の名殘が遺つて居るのは悲慘だ。

汽車と殆ど並んで、此海岸線に近く、九州電氣軌道の電車線が、門司から出て、大里・小倉・八幡・黑崎などを通つて、折尾、戸畑まで通じて居る。

此の電車で延命寺まで行くと、其處の赤阪村の海岸に延命寺山がある。後には足立山の連峰が峙立してゐるし、前には大瀨戸の海が近く波を打つてゐて、一寸眺望のいゝ所だ。昔風の案內記などには鎭西第一の勝としてあるが、それ程の所ではない。武藏に仇を討たれた岸柳の岸柳島が

こゝからよく見える。

山には東照宮が祀つてあつて、こゝから見た夕照の光景は、一見する値打がある。六連島や蘆島・貝島なんかゝ暮れかけて、ボンヤリと霧に包まれた海の上に見えるのも、ちよつと捨て難い趣がある。

境内に新免二刀流で名高い宮本武藏の碑や、長州騎兵隊戰死者の墓がある。此邊から小倉へは西へ二十丁程の距離で、其處いらには長州騎兵隊の戰蹟が、あつちこつちに在る。

小倉は門司が出來るまでは、隋分繁華な商業都市として認められたものだが、今では門司に九州の關門たる樞要の地位を奪はれたので、僅に門司の附庸として殘存してる形がある。

名所としては市の中央に小倉城址、米町に眞宗本願寺派九州の本山たる永照寺、堺町に蓮門教の本部、南方約二十五丁の足立山には妙見神社、其西麓には寛文四年明僧卽非和尙の開基だといふ黃蘗宗の名刹廣壽山福聚禪寺がある。廣壽山には、八景の勝などといふものもあつて、幽邃の仙境だ。

小倉からは新に豐州本線が分岐してゐる。九州の東海岸を行くには、この線に乘換へて行くの

である。

線路は篠崎八幡のある篠崎村を左に香春街道を横つて、城野驛を通過すると、段々東南に方向を採つて、中津街道と絕えず接觸を保ちつゝ進んで行く。

城野驛で下りると、南方二三里の範圍内に神理敎本院、小嵐山、菅生瀧などの名所がある。こゝから曾根へ行く迄の沿線海岸は、割合に平凡な景色で、窓から左手に見える山の姿にも、奇峭な感じが無い。

曾根は平野の中央部にある小驛で、こゝから下りて北を見ると、足立山、露岳、風師山等が東北に聳え、少し離れて西南には所謂貫山山彙が連り、其間に通じた谷を、大分街道がこちらへ續いて來て居る。驛の直南は卽ち其貫山山彙中の芝津山で、萬葉集其他に見える四極山といふのはこれだ。山頂は南北一里半、東西約半里に亘る平地があつて、廣野臺と呼ばれてゐる。

朽網山といふ歌名所も、此村の大字朽網に在る。

次の苅田は、延喜式にも其名の見える古驛で、こゝの海上二十丁の神ノ島には、不知火が出現すると云はれてゐる。壽永の役に入水した平清經の墓や、天平十二年に築城されて、天慶以後

永く神田氏の居城だつた松山城址も直ぐ停車場の近くにある。松山城は、海岸に近く、築かれた城で、眼下に大分街道を瞰制するに足る要害の地だ。

苅田の次は行橋で、こゝから分れて、豊津・犀川・汐須原・香春・伊田・後藤寺・池尻・川崎を通つて添田迄田川線が行つて居る。

行橋は一寸した町だ。長狭川を界にして、南北に行事・大橋の二區劃に分れてゐる。行事は草野八幡宮行司の地だつた所で、其八幡宮は貞觀年中の創建だと云はれてゐる。

行橋から西へ一里半程行くと、等覺寺山がある。山中にある等覺寺は、天平年中惠空上人の開基で、寺中千坊と呼ばれた大刹であつたが、屢々兵燹に罹つて今は多く廢址と成つた。こゝの奥ノ院は所謂青龍窟の鐘乳洞で、景行天皇御西征の時、土蜘蛛の據守した所だと云はれてゐる。

景行天皇當時の行宮は、此等覺寺山の東南麓白川村黒添にある高原地にあつたもので、今其地點は京原と呼ばれてゐる。瓢形の古墳や千塚が其附近及び南方に澤山ある。綾塚といふのも、其附近の黒田村中黒田にある古墳の一つで、墻壁は皆巨大な一枚石から成つて居る。素盞男尊の女抓津姫の墳墓だと云はれてゐるが、其點は明かでない。

又、行橋驛から東へ行くと、約一里程の所に有名な今井の祇園社と松山神社とが相近接して存在してゐる。今井の祇園といふのは、須佐男命を祀つたものだ。建長六年此の地方で傳染病が流行した時特に勸請したといふ由緒のある古刹で、今は縣社に成つてゐる。神さびた松と杉とに圍まれた丘陵の半腹にある幽邃の神境で、こゝからズッと豊前平野を見下ろした景色は、一寸氣持がいい。

此の今井祇園社の直北に見える丘陵は、松山神社のある沓尾山で、下には秡川が流れ、其向ふには近く簑島が見え、海上遙に眼を放てば、周防灘の海波を隔てゝ、防長の山々が畫のやうに見える。

簑島は東西三哩、南北約十町餘の小島であるが、人家は三百餘もあつて、天文元正の頃には防州陶黨の杉重昌がこゝに築城して居た。

田川線の豊津に、成務天皇の時に國縣を制定して、豊前の國造に宇那足尼を御任命に成つた地で、其後代々國府が置かれてゐた。こゝの大字國分にある國分寺は九州第一の名刹で天平九年僧行基の開基に屬してゐる。今の堂宇は慶安三年の再造であるが、寺寶には巨勢金岡筆の胎藏界大

曼荼羅其他古雅なものが少くない。停車場からは東へ半里程の所だ。

又、此の豐津の東北十八丁秡郷村の草場には、諸册二尊の御子豐日別命を奉祀した草場神社がある。欽明帝二年の勅請で、奈良朝時代には、朝廷の尊信殊に頗る深く、屢名士の參拜があつた事が、幾らも記錄に見えてゐる。

次の犀川驛から北へ一里程行くと、御所谷の舊蹟がある。後醍醐天皇の皇子懐良親王の御所があつた所で、東・西・中の御門の石垣や礎石が今でも遺つてゐる。こゝの東方五丁程の稗田村には親王を奉じて此地に據守した新田義基父子の馬ケ嶽城址がある。

此邊から汽車は段々山間へ入つて行つて、もう油須原邊まで來ると、『山奥へ來た』といふ感じが、切實にする。どつちを向いても英彦山だの鷹の巣山・障子ケ岳・釋迦ケ嶽・特牛嶽・岩石山・戸城山・飯嶽などの山續きで、近くは藏持山脈が殆んど其四周に迫つて連亙し、其間を僅に今川及び彦山川の溪谷に沿うた道が通じてゐる。

こゝで下りても、さういふ山間の事だから別に見に行く所もないが、こゝ迄來たら一度は英彦山へ上つて見る事だ。此線の終點添田驛から行つても、殆んど道程は同一であるが、兎に角此の

油須原驛から山までは、南へ四里程ある。

有名な修驗道の本山で、昔は皆此の山上に鎭座する彦山權現參詣を目的に上つて來たものであるが、そんな目的でなく、只上つて見るだけでも、壯快な氣持のする所だ。海拔三九四五尺、山として然程高くもないが、山頂から四方を見晴らした感じは、非常に雄大である。

『此山が所謂天孫第一次降臨の高千穗峰だといふ說を君はどう解釋するかね』

と、其時一緒に行つた友人が、突然山の上でそんな事を言出した。

此の突然の質問には、少からず驚かされたが、でも私はそれを斷定する程大膽ぢや無かつた。昔から阿蘇ケ嶽と此山とで、高千穗峰の元祖爭ひをしてゐるのは隨分古い事であるが、未だに本當の事實が定まらない所を見ると、うッかりした事は言はれない。私は只默つて居た。

『フン默殺か』

と、友も仕樣事無しに苦笑し乍ら、それきり默つて又二人で山を下りた。

彦山村まで下りて來てから、急に又彦山權現からヒントを得た友が、六助の故郷毛谷村といふのが、何でも此山麓に違ひないと云つて騷ぎ出した。

『何でも此邊だが・・・』

を頻に連發して、蚤取眼をキヨロツかして、地圖と睨みつくらをしてゐたが、到頭根が盡きたと見えて、其處いらの百姓家へ、それを聞きに入つて行つた。

『毛谷村六助の住んで居た所は・・・』

と胴間聲を出して、頻にペコペコ頭を下げて居たが

『お前さん方、毛谷村へお出なさるんだつたら、此方へ來ては道が違ひますよ。山越しに鷹ノ巢から野峠の方へ出て、下毛郡へ下りなくつちやア』

と云ふやうな事を云はれて、頭を搔いて引下つて來た姿が滑稽だつたので、私は到頭笑つて了つた。何でも毛谷村のある下毛郡といふのは、もう大分縣の領分ださうだ。

油須原驛へ歸つて、再び車中の人と成ると、線路は此邊から北へ折れて、山脈の起伏してゐる中を通つて行く。二十分程乘つて居ると、もう香春だ。

香原は可なり歷史の古い町で、萬葉集などにも其名が見えてゐる。戸數は六七百もあるだらうか、町には格別見る所もないが、危巖が無數にあるのと白檀の木の多いのとで名高い香春嶽を左

に見て、行橋道の方へ行くと、停車場から約二十丁程の地點に、神功皇后を奉祀したといふ鏡山がある。古木が蓊鬱と生繁つた感じのいゝ丘陵で、皇后御使用の鏡の化石したものが昔からこゝにあつたと云はれてゐる。古歌に『豐國の鏡の山』と詠まれてゐるのはこゝの事だ。

此山の直ぐ西に河内王の陵墓だと云ふ穴居式の前方後圓陵がある。萬葉にも『おほきみのむつ魂あへや豐國の鏡の山を宮と定むる』と出てゐる。

香春嶽の東腹には高座石寺がある。又南麓には香春神社がある。辛國息長大姫大目命・天忍穗耳命・豐比女命が祭神で、昔は香春嶽の三嶽に分れて鎭座されてゐたのを元明天皇の朝にこゝへ合祀したのだといふ。

停車場の直ぐ傍には、又、仲津原といふ所がある。所謂鎭西八郎の源爲朝が仁平元年に一寸住んで居た所で、其館址だといふ所が今に殘つてゐる。鎭西ヶ原、八郎ヶ原といふ異名も附いてゐる。

此の香春驛の附近で田川線を横つて、小倉鐵道が、北へは採銅所・呼野・石原町・石田の各驛を隔て鹿兒島本線の小倉に近い東小倉まで、南は上伊田・今任・梅田・伊原を經て所謂豆田街道沿を

上添田まで通じて居る。石炭輸送の爲に出來たと云つても可い鐵道で、沿線には、無數の炭坑がある。昔は呼野金と云つて、此線の呼野驛附近からは、金を產出した事があつた。採銅所は、古代銅鑛のあつた所で、元慶頃には、こゝの銅を採つて銅鏡を造つたことが記錄に見えてゐる。

香春の次は伊田驛で、附近には傳敎大師開創の古刹天臺寺がある。こゝの僧兵は戰國時代に九州を横行して、惡名を知られた。田川十八大寺の一つで、昔は寺中が三百坊もあつたといふ寺だが、今では見るかげもない衰頽に及んでゐる。日本武尊を奉祀した白鳥神社も直ぐ近くにある。

此の伊田から、筑豐線の伊田支線が岐れて、直方まで行つてゐる、此邊は例の有名な豐州炭の中樞產地で、何處を通つて見ても、土が黑光りに光つてゐる。有名な三井●田川●豐國●横島●大鐵中島●副田●佐々木●門松●大峰●島廻●川崎●峰地の名炭坑が、線路を中心にして附近に多數點在してゐる。後藤寺驛からは別に宮床支線が分れてゐるが、これも石炭輸送の爲に出來てゐる線路で、來る汽車も來る汽車も、皆殆んど炭車ばかりだ。

添田から再び豐州本線へ引返して、行橋を出ると、新田春●椎田の諸驛がある。新田春は原野

の中にある小驛で、私の行つた時は、窓から見ると遠く一面に桑畑が展開して居た。海の直ぐ近くを通つてゐるのだが、眺望は平凡だ。椎田で下りると、周回が七丈幾らとかあるといふ日本第二の大楠があると云ふ事を、旅客同士で話合つて居るのを、私はうとうとし乍ら聞いてゐたが、其うちに寢入つたと見えて、驛夫の聲に眼が覺めると、もう其處は宇島だつた。前の松江で下りるんだつたと云ふ人が、あわてまくつて下りて行つた。

耶馬溪へ行くのは、此宇島で下りて、宇島鐵道に乘換へて行くのが便利だと聞いたので、私も其ツモりで汽車を見捨てた。

驛前の茶店で『耶馬溪の外に、何處かこゝいらで行つて見る名所があるか』と聞くと、態々奥から主人らしいのが出て來て、松江の二十町程東南に四郎丸といふ村があつて、其處に大富神社といふ名高い古社がある。こゝから街道を引返して行つて、八屋といふ町を通拔けたら直ぐ其處だから、是非行つて見ろと云はれたので、其氣に成つて、態々車で引返した。

汽車で見た感じと同じやうに、車の上から見た街道の心持も、あんまりよくは思へなかつたが大富神社は確に來て見ただけの甲斐があつた。古びた密林の奥にある堂々たる大社で、境內の閑

寂なのが、一層俗塵に遠い、莊嚴な感じをさせる。私は或る意味に於て、伊勢神宮よりも、宇佐八幡よりも、眞の神境らしい所があると思つた。祭神は大富神で、相殿に宗像八幡、住吉の兩宮が祀つてある。少くとも白鳳前の創建で、此附近一帶に亘つて此社に關係した遺蹟が多くある。

此の四郎丸といふ村は、附近の八屋・宇島・千束の諸邑と共に、古山田鄕の舊地で、戰國時代には山田親實の居城がこゝにあつた。

宇島鐵道に乘つて行くと、千束から黑土・廣瀨橋・安雲・友枝・下唐原・中唐原・百留と、所謂筑上郡の東部平野を貫通して、原井から山國川を渡り、鮎歸の名勝地を過ぎて、耶馬溪の樋田の對岸まで行つてゐる。

樋田で汽車を下りて、眼前の山嶺に對した感じは一寸いゝと思つた。何處からとなく嵐氣が冷に身を襲うて來るやうな感じがする。もうこゝまで來ると大分縣だ。

樋田から少し行くと、青生の洞門がある。斷崖の洞腹を穿つて通じた道で、昔、禪海といふ僧が、三十餘年間殆ど獨力で穿鑿したものだと云はれてゐる。來て見れば何の變哲も無いものだが微弱な老僧の獨力で、これだけのものが出來上つた事を思ふと、坐ろに信仰の力强さに感心させ

られる。

舟でこゝから對岸まで行つて、顧望すると、溪谷に亂立してゐる奇石怪岩の間を、矮松や蔦葛の點綴して居る景色が、如何にも美しく見えて、洞門を人馬の出入する光景が宛然たる畫ひやうだ。と云ふ事を何かの本で讀んだ事があるやうな氣がするが、まだ實驗して見ない事だから、保證の限で無い。

耶馬橋まで行つて、玖珠の舊道を左へ、東谷川の洞鳴橋を渡ると、可なり嶮しい坂があつて、其上に有名な羅漢寺の仁王門が立つてゐる。

耶馬溪の本當の見所は、此の耶馬橋から奥で、口ノ林・柿坂・中磨の諸勝を經て、奥へ行けば行く程、奇趣横溢、盡くる所を知らないと云はれてゐる。然し溪流の感じは、天下の名所として推稱する程大したものではない。初めて此種の景色を見た者に採つてこそ、奇景と云はゞ云へるだらうが、所詮は類型的の奇景で、耶馬溪ばかりが奇景の問屋でない事だけは確實である。奇景は何と云つても木曾が本場であらう。

歸りは柿坂から、耶馬溪鐵道に乘つた。此線は殆んど耶馬溪の支流山國川の右岸に沿うて、起

點の中津驛まで行つてゐる。窓から見える景色は、どつちを見ても平凡だが、眞坂あたりから見た八面山の感じは、一寸い、所がある。標高二五二〇尺、延元の役に足利尊氏が、曾てこゝに陣してゐたことがあるさうだ。

中津は明るい感じのする町だ。奥平氏十萬石の舊城下で、附近には黑田如水の築いた中津城址少し南へ下つて永添村に末弘城址、それと近く相接して上池永城址がある。こゝの上池永城址からは、表面が赤黑くつて、中を割つて見ると、まるで餡でも入れたやうに紫黃色に成つてゐる奇石が澤山に出る。土地の人は之を團子石と呼んでゐる。

永添から少し南西に大貞といふ所がある。こゝに仁明天皇時代の創建だといふ古社薦神社がある。大貞八幡宮と云ふのが今の名で、中津の次驛大貞から南方二十五丁に當つてゐる。

大貞を出る時分から線路は段々海岸を遠かつて今津●豐前善光寺●柳ヶ浦●豐前長洲と平野の中を縫うて走つて行く。さういふわけで、海面の眺望は無いが、右を見ると、八面山や三ヶ嶽が、隱顯して、却つて今までの沿海線より景色に變化がある。

豐前善光寺は、四日市町の北方半里にある小驛で、こゝから日出生鐵道が、城●四日市町●新豐

川●拜田●三叉川●香下を通つて、圓座まで通じてゐる。

四日市町は、宇佐郡の首邑で、一寸繁華な町だ。芝原善光寺として有名な東本願寺の別院及び西本願寺の別院がある。驛名の豐前善光寺は、此寺があるのに基いて居る。

町の周圍は即ち驛館平野で、昔の宇佐驛は此地にあつた。有名な宇佐八幡へはこゝからもう半里か其處いらしかない。附近には、八幡が詫宣をお示しに成つた遺蹟だといふ鷹居瀨八幡宮だの又宇佐八社の一と云はれる泉神社などがある。

鷹居瀨八幡宮のある上田村の東には、中津街道を横つて、驛館川が流れてゐる。日出生鐵道の汽車は、四日市町を出ると、段々此川に近いて、其溪谷に沿うて走つて行つてゐる。

拜田驛あたりまで來ると、所謂龍王谷がもう餘程深く成つて來て、和尚山だの妙見山だのゝ山々が段々近く指點せられる。三叉川驛は其妙見山の直ぐ下で、此邊で驛館川が三分流してゐる。

終點の圓座驛から少し東南に行くと、龍王村の龍王に、有名な仙岩寺がある。深見川の沿岸、山の中腹に當つて建てられた寺で、創建の時代は何でも奈良朝時代らしいと云はれてゐる。

宇佐へは、此線からでも行けるし、豐州本線の柳ヶ浦●豐前長洲から行つても一二里しかない

が、宇佐驛で下りて、宇佐參宮鐵道線へ乘換へれば、二十四五分で直ぐ傍まで行ける。宇佐の町は明るい、其くせ何となく寂れた町だ。宇佐八幡への參詣者を目的に辛うじて活きてゐると云ふ感じがする。土産物の餡を賣つてゐる家々の店つきにも、古ぼけたにほひがする。

然し八幡宮がコンモリした森の奥にあつてスッカリ町とは懸離れてゐるのも、神域らしくてよい。神前に向ふと、こゝで和氣清麿が神託を受けて歸つた時の凛然たる覺悟が、第一に思出される。如何にも日本第二の宗廟と云ふ感じのする立派な社だ。

こゝから本線の宇佐まで歸ると、東へ十町許の所に和間の浮殿と云つて、清麿が當時上陸して船を繫いだ所だといふ傳說の地がある。

宇佐參宮線は、此宇佐から更に北方海岸へ延びて、高田町まで通じてゐる。高田は桂川に臨んだ小都市で、高田城址が遺つてゐる。こゝの若宮八幡神社は西國東部の總鎭守で、養老年間草創の古社だ。

宇佐から又本線を行くと、立石驛があつて、其次に中山香驛がある。こゝから二里餘り北へ行くと、豐後耶馬溪として有名な田染の溪谷があつて、其北方蕗村には、養老年間僧仁聞の開創した古刹富貴寺がある。柱から紙障扉等の悉くに多數の佛像が彩色畫で書いてあるのが、如何にも見事な筆觸だ。筆者は巨勢金岡だらうといふ說がある。

この附近の間戸村に、二宮八幡と云ふ鄕社があるが、こゝの岩にも仁聞が彫刻したと傳へられる佛像が澤山ある。山上にある大小一對の石は、伊勢の二見ヶ岩に似てゐると云ふので名高い。

此邊から汽車は、八坂川の溪谷を縫うて、杵築の方へ進んでゐる。窓から見ると、田原山が直ぐ左に見えて、下には溪流が見えたり隱れたりする。

杵築の停車場から町までは一里餘もある。維新前までは松平氏三萬二千石の舊城地で、建長年中木付親重が築いたといふ城址が今に遺つてゐる。町の前面は即ち杵築灣で、昔は相當な港であつたといふが、今では鷹山・八阪の二川から吐出する堆砂の爲めに埋まつて、大船を泊する事が出來ないので、凡ての貨物は、こゝから國道の東へ一里半程行つた守江港から移出する事に成つてゐる。

守江から更に一里半程東へ行つた奈多村に、宇佐八幡の別宮として知られてゐる奈多の八幡がある。立派な社で、社頭からは佐賀關から、遠く伊豫の御岬までが展望される。殊に朝の景色が

非常にいゝと聞いたが、そこへはまだ一度も行つて見ない。

汽車の便が無いので、餘り多く人が行かないが、此邊から海岸傳ひに、北西へ方向を採つて、海岸傳ひに高田まで廻つて行くと、隨分人の知らない面白い所があると云ふ事だ。

九州東海岸（下）

四望殆んど山ばかりの中を脱けて來て、杵築から日出の方へ出ると、段々水平線が廣く成つて來て、美しい紺碧を湛へた別府灣が眼前に近く展開して來る。日出町は木下氏の舊城地で、綺麗な明るい感じのする町だ。直ぐ近くに靑柳城址があつて、其直ぐ下に當る海中には、滾々として淡水が湧出してゐる。こゝで漁れる鰈は、城下鰈と云つて特殊の美味があるさうだ。仁聞作の彫像があるといふ有名な曹洞宗の古刹松屋寺も、此城址の直ぐ近くだ。大きな蘇鐵の木があるので昔から名高い。

此邊から豐岡町●古市●別府●大分の方へかけては、所謂別府灣域で、北には唐來山が峙つて八坂川の谷を帶び、西には由布火山脈の鶴見山が聳えて、其麓に幾多の温泉を湧出せしめてゐる。山河岬濱到る所として温泉の無い所がないといふのだから痛快だ。

北から算へて行くと龜川が最初で、柴石●鐵輪●明礬●堀田●觀海寺●別府●濱脇と八區に別れてゐ

る。中でも一等大規模なのは、別府と濱脇とで、堂々なる旅館も澤山ある。柴石や明礬の湯を面白いと云ふ人もあるが、只山の中の温泉と云ふだけで、取立てゝこれと云ふ所も無い。ゴミゴミした感じのない、物靜な所としては、何と云つても鐵輪が一等だらう。馬車も行くが、車で行つた方が遙に氣持がいゝ。

私はこゝで一日泊つて、朝早くから附近の紺屋地獄だの、坊主地獄だのを見て歩いた。血の池地獄といふのが中でも一等名高い。赤つ茶けた湯が沸々として湧立つてゐる中へ木綿を浸して、そこで卽席染を拵へて賣つてゐるのを、私も買つて歸つた。

鐵輪へ行つたら蒸風呂へ是非入つて來る事だ。こゝへ入つた浴客は、蒸汽を通した暗室中で、石の枕をして寢てゐると、ちやうど身體が適度に蒸されて、洗場へ出ると氣持よい程垢がコロコロと除れる。

古來此の蒸風呂では男女が皆混浴したものだが、それで居て不思議に何の間違ひも無かつたさうだ。此邊では一帶に人情が醇朴で、少し裏通りへ行くと、往來に面した浴室で、女が平氣で裸姿を見せて洗つてゐる。

觀海寺も近年非常に發達して來た。恐らく將來は、觀海寺と鐵輪が、今の別府濱脇よりも、温泉地として榮えるだらうと思ふ。

私は別府にも二三日居て、電車で濱脇へ行つたり其處らを歩き廻つたりして見た。別府は少しゴタゴタしてゐるが、町の感じも一寸面白い所があるやうだ。濱脇の方が別府から比べると、感じは高尚だが、然し如何にも寂しい。私は湯の町としては、別府の方が好きだ。

手拭一つブラ下げて居れば、何處の湯でも見附け次第に入つていゝといふ規則も、確に温泉氣分が横溢してゐる。所謂資本家的にも、洋服細民的にも、其温泉氣分に浸り得る所として、別府のやうな自由な温泉鄕は、一寸外に例があるまい。函根や修善寺へ行つて、イヤに階級的な所を目前に見せつけられて、少からず感觸を害した私は、別府へ來た時に、初めて救はれたやうな氣がした事を未だに覺えてゐる。

別府まで來たら由布ヶ嶽へ一度上つて見る事だ。豐後富士の一名を持つた熄火山で、こゝへ上ると、別府灣の碧波が、四條派の畫のやうに美しく見える。北方は卽ち國東半島で、雙子山が其中央に、高く聳えて居る姿も、指點される。或人がこゝからの展望を九州の東海岸に於ける唯一

の絶景だと云つたのは、或は適評かも知れない。

別府から濱脇●西大分の二驛を通抜けると、二十分餘りで大分へ行ける。大分は大きな町だが然し寂しい町だ。中世は大友氏がこゝに居つて全九州に號令したといふが、瞥見的の印象は、唯衰殘の町と云ふ感じしかない。此の衰殘の町の近くに、悲慘な英雄の末路を語る長曾我部元親の戰死の遺蹟があるのも、一種の皮肉だ。町の南には又、古國府の址がある。斯うして凡てが、廢頽と衰殘との運命を語つてゐる。

寂しい町に、冷たい雨が蕭條と降つてゐたのも、私には寂しい追懷の一つである。私は大分と聞くと、そこに永い間不遇の運命を歎いてゐた揚句、遙々臺灣へ落ちて行た若い藥學士の事をきつと思出す、『函館港にて落伍者の友より』と書いてよこしたハガキの文句が、私は今でも、目の前にちらついて居るやうな氣がする。

大分からは別に、古國府から永興●賀來●森ノ木●平横瀨●向ノ原●鬼ケ瀨●櫟木を經へて、小野屋まで、大湯鐵道が大分川の溪谷に沿うて走つてゐる。沿線の名蹟としては、平横瀨驛附近の賀來村大字國分に天平十三年創建の國分寺、櫟木驛の附近谷村の大字篠原には、大將軍の俗稱を持つた

保食神社がある。

櫟木から小野屋までは、大分川の溪谷が最も奇景を呈してゐる所で、庄内耶馬溪の名がある。櫟木城址が直ぐ傍の櫟木谷にある。更に小野屋まで行くと、熊郡山大權現だの、湯の平温泉だのが附近一二里の地點に在つて、其處から更に溪谷を遡つて由布嶽の西麓まで行くと、山間の別天地として有名な南北兩由布村がある。湯ノ坪温泉だの色々の温泉がこゝにもある。私は大分へ引返してから、『湯ノ平の温泉は温泉地として理想的な所ですよ、宿屋は四五十軒もありますが、僻地だから都會臭は無し、夏は涼しくつて蚊も蠅も居ないし、學生なんかの避暑地には持つて來いです』と、云ふ話を後で聞いて、そんなのなら、私も一度行つてよく見て來るのだつたにと、殘念な氣がした。それに湯ノ平谷の紅葉は九州でも有名なものださうだ。

小野屋から芹川沿に西南へ四里程行くと、長湯村の湯原温泉、七里田温泉があつて、それからまだ奥へ行くと、泉水山と湧蓋山との溪間に湯坪の温泉、其他色々の温泉があるといふが、道が餘り不便なので、遠くから行く旅客は餘りない。然しこゝから見た。久住山の所謂九重の峰巒は一寸面白い景觀である。久住山の東南麓は、火山岩の霍爛物から成層した九重荒原で、熊本街道

に臨んで久住村がある。こゝから又更に三里程東南に行くと養鱒地で名高い竹田町がある。四方を丘陵で圍まれた盆地的の小都市で、大神城●臥牛城の別名を持つた竹田城址がある。十年の役には、官薩兩軍の間に激しい爭奪戰があつた所で、天正時代にも、此城を中心に、大友氏の部將が、薩人とこゝで戰つてゐる。今では久住と共に此邊での養鱒地として知られてゐるやうだ。

こゝから北へ行く路は、大分街道と、臼杵街道との二條に岐れてゐる。臼杵街道を行つて、大野郡の市場を少し通過ぎると、三車ノ原で又細い道が岐れて、北方の犬飼町まで通じてゐる。犬飼は日向街道の要衝で、こゝから鶴崎へは五里、大分へは六里ある。大分犬飼間には、犬飼輕便線が、瀧尾●中判田●竹中の三驛を中間に置いて通じてゐる。

鶴崎には鶴崎城址が、大友氏敗殘の俤を語つて居るだけで、外に見る所もない。こゝから又豐州線の汽車で先へ行つて、幸崎で下りると、有名な佐賀ノ關がある。古海人部の住んで居た所で海部半島の名が今に遺つてゐる。佐賀ノ關町は此半島の頸部にあつて、北には佐賀ノ關港が開けてゐる。こゝの埠頭にある一帶の丘陵は左義長崖で、慶長五年には、こゝで岡藩の軍が大田氏の軍と戰つて全滅した。崖の上に其時の戰死者の墓だといふ十人塚がズラリと並んで、古い哀史を

語つてゐる。

町から東へ、半島の突端地藏岬まで行くと、近く前面に牛島高島が見えて、其向ふは速吹の瀨戸の一名を以て知られる佐賀關海峽である。神武天皇東征の時に土人椎根津彦がこゝで皇軍を奉迎して舟師の先頭に立ち偉功を奏したといふ傳說のある所だ。椎根津彦を祀つた縣社椎根津彦神社並に其妻速吸比賣を祀つた式内古社早吸神社が附近にある。

地藏岬は、支那山系の九州山脈に屬する古生層山脈が、海中に延びてゐる所で、遙に伊豫の佐田岬と握手せんとしてゐる。今岬端には白色燈臺がある。

藩政時代にも、こゝでは毎晩炬火を焚いて、航行船の目標としたもので、今炬火臺山と云ふ小丘陵が其地點である。昔海關があつたのも此附近で、細川氏が曾て望樓を設けた所だといふ遠見山の東南俗稱古遠見といふ小丘が、關址だと云はれてゐる。こゝから見た海上の風光は明媚といふよりも一種雄大の趣があつて、殊に早吸瀨戸の急潮の上を眞赤な夕陽を一パイに浴びて快速に走つて行く白帆の影は、一寸外で見られない面白い見ものである。

臼杵まで行くと、大分又景觀が變つて來る。前面は即ち臼杵灣で灣口には津久見島がある外、

別に眺望を遮る物もないが、それでゐて妙に明るい感じがない。

然し、町から受ける感じは、白熱的だ。永祿頃には大友氏の根據地だつた所で、宗麟の築いた古城址が遺つてゐる。德川時代には、それが稻葉氏の居城に成つて、今では公園に成つてゐる。附近の禪刹月桂寺・多福寺などは皆、稻葉氏時代に建てられたものだ。大友氏創建のものでは、淨土寺の大橋寺が、こゝでの名刹として知られてゐる。

臼杵灣と下浦半島を隔てゝ南に津久見灣がある。津久見は此の灣頭の一小村で、後には廣大な蜜柑園が續いてゐる。古來蜜柑の產地として有名で、小紀州の名がある。停車場はその蜜柑園の北方に設けられてゐるのだ。

汽車はこゝから、日代、淺海井の二驛を通つて佐伯町まで行つてゐる。

佐伯町は街衢の端正な、感じのいゝ町だ。毛利氏代々の舊城地で、城址は町の西北にある。樹木の鬱蒼と生茂つた一坐の丘陵で、其東麓には、毛利家の菩提寺養賢寺がある。五所明神は大同年中の造營だと云ふ古祠で、古來此町の總鎭守とされてゐる。

佐伯灣は町の直ぐ前面にある入江で、灣內には多數の島嶼がある爲め、海とは思へない位水面

が靜である。島では大入島といふのが一等大きい。周回四里八丁、沿岸線には非常に屈曲が多くつて、幾多の小港灣が出來てゐる。神武天皇東征の時には何でも此の邊に、御碇泊に成つた事があるさうだ。

佐伯から向ふは、まだ汽車が通じてゐない。こゝから大阪細島間の商船會社船を利用すると蒲江、古江、土々呂を經由して、細島まで行ける事に成つてゐる。

船の甲板から見た南豐後、北日向の山々の連亘してる感じも、一寸又變つて居て面白い所がある。日向街道は海岸から遙の奥を通つてゐて、豐後から日向へ行くには、有名な宗太郎越の峻險を通つて行く事に成つてゐる。

蒲江はまだ豐後の內で、南海部郡に屬してゐる。一寸した小灣で、大きな船は入らないが、海岸線が細かく屈曲してゐるので、海から見た感じの面白い所だ。

次の古江あたりへ來ると、もう其邊の海は、日向灘で、波動が段々高く成つて來る。そして、船が土々呂港へ着く時分には、右に當つて見える延岡の瓦甍が、船の一昂一低に伴れて、上つた下つたりする。其前には、一面に松原が廣く横に展開してゐる。寂しく孤立してるやうな形の

可愛岳も、五箇瀬川の落口も、それと指點せられる。

私は故南州翁が、官軍の爲に可愛岳の陣地から追ひこくられて、漸く血路を開いて鹿兒島へ逃げたと云ふ山道を想像して見た。海から見たのでは、どれがどの山と云ふ事も分らないが、其奥には二子山だの清水岳だのと云ふ山がある筈だ。

細島港は横に細長く入込んだ入江で、細島町が其前に延びてゐる。此邊は有名な椎茸の産地で、こゝから毎年移出する總額は約二十萬圓に上ると云はれてゐる。

此の細島港は、日向三良港の一として有名な所で、こゝから南方一帶の海岸は、屈曲に乏しい爲め、船を寄せる所が少い。僅に南方美美津川の河口には美美津港があるが、規模の小い港で、とても大船を入れる所ではない。

此の美美津川の上游、江代山●飯干峠●高塚山●桑木原●荒落●椎現諸山の蟠屈する所は、卽ち有名な美美津の溪谷で、こゝに幽僻の別天地椎葉鄕がある。何でも壽永の役に源軍に討漏らされた平家の殘黨が落籠つたといふ所で、山一つ隔てた肥後の五箇庄と共に、平氏に關した種々の傳說が殘つてゐる。討手に向つた源軍の將那須宗高が特に彼等の退却を大目に見て、故意に追擊を止

めて歸つたので、其仁心を德として今に此の椎葉鄕には那須姓を號する者が多いと云ふ話も聞いた事がある。

『さうですねえ、所謂太古の風があると云ふんでせうか。惡く言へば現代文明とは殆ど沒交渉な所ですよ。人間の原始人的な點も、家屋の構造の簡素な點も、餘程變つてゐますよ。强ひて云へば嶮峻な自然が、さうさせたのでせうねえ。とても人間業では上れないやうな險崖を傳つて行かなければ、通れないやうな所が、そこへ行く道には幾らもあります』

と、曾て若い時其處へ行つて見たと云ふ人が、細江の宿でさう私に話した。

椎葉を南に越えると、又、米良の僻邑がある、四圍は悉く山で、其の間に流れてゐる無數の小溪流が、集つて一の瀨川を成して、日向灘を指してゐる。こゝも有名な椎茸の産地で、銅なども出る。

此邊の物産は、皆遙に十里餘の道を下穗北村の妻まで送られて、そこから方々の町々へ移出される。妻は院線宮崎線現在の終點驛で、こゝから汽車に乘ると、黑生野、佐土原町、福島町、廣瀨等を經て、鹿兒島本線の吉松まで六時間程で行ける事に成つてゐる。

妻は今まで餘り多く人に知られなかつたが、隨分古い歴史を持つてゐる町で、瓊々杵尊の妃、木花咲耶姫命を奉祀した式内古社都萬神社が、驛の西方にある。町の南方三宅村は、日向の國府や國分寺のあつた所で、此附近には上古時代の墳墓が多く散在してゐる。其中でも一等大きいのは瓊々杵尊御夫妻の陵墓だといふ周圍三四町の二大陵で、何れも四方には堀を廻らした堂々たるものである。

妻の東には高鍋町がある。大丸川下流の沖積地に發達した小都會で、川の對岸には、先紀暦の臺地が、崖を成して近く臨んでゐる。こゝは秋月氏代々の居城があつた所で、秋月氏の前には、大友●島津兩氏の間に、此邊が長く爭はれて居た。

今でも、町には昔の士族屋敷らしいものが其儘殘つてゐる。何となく古雅な感じのする所だがそれだけに又活氣に乏しい感じがある。然し大體に於て、私は好きな町だと思つた。彈琴松なんて云ふ老樹が、附近に在る。

此の高鍋から例の臺地を越して北方へ四里許行くと、都農といふ小さい村がある。大巳貴命を祀つた國幣小社都農神社があつて華表が大分街道に立つてゐる。日向式内古社四座の一として

有名なものだ。

妻から南方宮崎に行くまでの沿線では、黒生野●佐土原町●廣瀬と皆一度は下りて見てもいゝ所ばかりだ。黒生野で下りて少し西南へ行くと、景行天皇が熊襲御親征の時、行宮をお置きに成つた舊址が、そこの大字岩爪といふ所にある。工藤祐經の末孫祐賢が大伴氏の猛攻を受けて沒落した有名な都於郡城址も此附近にある。

廣瀬は新しい町だが、其西北にある久峰山は、頂上の眺望がよいのを以て知られてゐる山で、そこには名高い觀音がある。

宮崎は町としては寧ろ靡頽の色があるが、然し感じの惡い所ではない。こゝに有名な官幣大社宮崎神宮がある。町からは半里程離れてゐるが、却つて其處に莊嚴味がある。建築も古風を帶びた清楚なもので、殆んど杉ばかりから成つた古びた森の奥に、其屋根が見える感じは、何とも云はれない趣がある。祭神は神武天皇と、鵜鶏葺草不合尊の二柱である。

書くのが少し前後したが、廣瀬の次驛次郎別府附近の松原には、有名な住吉神社がある。此邊は伊弉諾命が黄泉からの歸りに穢をお秡ひに成つて、住吉三所等の九箇神をお生みに成つたとい

ふ傳說のある所で、大字薩路が其の地點だと云はれてゐる。御手洗といふ大字も直ぐ其の傍にある。

宮崎といふ所は、地形として頗る注意すべき所で、大分街道・鹿兒島街道・本庄道・飫肥街道・都城道・折生迫道が、此の一點に集中してゐる。明治十年の役には、三月三十日に官軍が大淀川を渡渉してこゝを陷れる迄薩軍が本營を置いてゐた所で、慶長年間高橋氏の將權藤種盛が據つて伊東氏の軍と戰つた宮崎城址が、當時の本營だつたといふ事だ。

宮崎の南は大淀川で、河口に赤江港がある。汽車は大淀の鐵橋を越えると、段々海に背いて、清武・田野と山の中へ入つて行つてゐる。近年迄、海岸を見るには、汽船に乘つて行くか、海岸沿の縣道を馬車で行く外が無かつたが、近頃は大淀から、內海まで宮崎輕便線が通じてゐる。

此の沿線の港としては折生迫・內海などがあるが、どちらも大した所ではない。唯折生迫で見る値打のあるものは、こゝの海上の靑島たらう。海岸から七八丁の所にある小孤島で、周回一里干潮の時には砂路を歩いて行ける。沿岸の成層岩が波浪の侵蝕の爲に奇形を呈してゐるのと、島內に檳榔樹の多いのが、こゝの特徵に成つてゐる。彦火々出見命・豐玉姬命・鹽土翁を合祀した神廟があるのも、島だけに一寸面白い。南國の島といふ感じが適切にする所だ。

此處から日向灘の荒波を見た感じも、非常にいゝ。

內海以南は、山脚が海岸まで延びて海に沈んでゐるので、暗礁亂立船を寄せるにも寄せる所がなく、陸地を行つても、一起一伏砂濱と峠との交錯した難路で、交通の困難な事つたらない。左には、波が恐しい音を立てゝ岩にザブザブとぶつかつて居る。

內海から、斯ういふ道を四五里程も踏分けて行くと、吹毛井といふ村へ出る。そこの東方は、鵜鶘葺不合尊の降誕地たといふ鵜戸の岬で、海岸に近い巖窟中に官幣大社鵜戸神宮がある。附近には例の奇岩が幾つも波に洗はれて立つて居て、それに一々二柱石だの、御船石だのと云ふ名が附いてゐる。これらは恐らく後世の附會だらうが、此邊一帶には上古時代の陵墓と思しいものが多數に散在してゐる。尊の御陵墓だと云ふのも、直ぐ社の三四町上にある。

こゝから西へ鳥居峠を越えて、一二里程行くと、飫肥町がある。南那珂郡第一の繁華な所で、直ぐ前に酒谷川が流れてゐる。天文以後、島津・伊東兩氏の間に屢々此地の爭奪戰が繰返されたが、天正十五年伊東祐兵が封を此地に受けて以來、相傳へて明治維新に至つた。

こゝから油津港までは二里足らずで、道は略酒谷川と並行して、其流域の平野の中を通つてゐる。近頃は此間を縣營の輕便線が走つてゐる。

油津は日向材の輸出港として知られてゐる。前面の海に幾つも岩礁の並立してゐる面白い景色の所で、こゝから更に東南へ十五六町も行くと、有名な梅ケ濱の勝地がある。茫漠たる日向灘の怒濤が、沿岸の奇岩に當つては碎け、碎けては散つてゐる美觀壯觀は、確に東海岸の特色として鑑賞に値する。

油津の南方南郷村には外浦港がある。九州の東海岸では細島に次ぐ良港であるが、陸路の交通が不便な爲め、急劇な發展をしない。

油津から一里松まで引返して、今町の方へ通じてゐる小徑を行くと、榎原松の大字橋の口といふ所に、鵜戸神宮を勸請した榎原神社がある。奈留・古大内などいふ小さい村を通抜けて、上の町まで來ると、今町はもう直ぐで、左には近く福島川の谷がある。

今町の前面は有明灣で、こゝから海岸傳ひに國境を越えて大隅の志布志まで行く道は、九州南岸の名勝地として知られてゐる。海上には蒲葵が密生してゐるので名高い枇榔島がある。

漁村の趣も餘程他と異つた所がある、と云ふ事だが、私はまだ此道を行つた事がないので、詳しい事は知らない。

志布志からもつと西へ肝屬郡の方迄入つて行くと、鹿屋と云ふ一寸した町があつて、そこから田崎・野里を通つて、高須川河口の高須村まで大隅鐵道が通じてゐる。

鹿屋の東南は姶良村で、そこの大字上名には、鵜鶏草葺不合尊の御陵だといふ吾平山上陵が、鵜殿山の巖窟中にある。此御陵の北東にある小丘陵は、玉依姫の御陵だと傳へられてゐる。

宮崎から鹿兒島まで

宮崎線は宮崎を出ると、大淀から段々西南へ方向を採つて、山岳の重疊してゐる中を都の城へ通じた舊國道を縫つて走つて行く。

大淀川の鐵橋を渡る時に、窓から見える橋梁は橘橋で、こゝが古の橘の小門の舊蹟だと云はれてゐる。橘の小門といふのは、神代紀に伊弉諾命が黃泉國からの歸途、其穢をお祓ひに成つた所として記してある所で、一說には筑前國だとも宮崎町の北方式內古社江田神社所在地の椽村がそれだとも云ふが、橘三喜の巡詣記には、上別府を過ぎて赤江川にかゝる所だとあるし永祿五年都於郡の城主伊東義祐が大淀川を詠んだ歌にも、『神代より其名も今に橘や小門の渡の舟の行末』とある。傳說の地理爭ひも滑稽だが、古くから日向說が行はれて居たのは蓋な事實らしい。

大淀から少し又北方に行くと生目村がある。こゝには有名な縣社生目神社があつて、平景清

の兩眼を祭つてあると云ふ俗說がある。生目村から西は東諸縣郡の穆佐村で、其大字小山田には、南北朝の時、畠山修理亮直顯の據守した六笠城址がある。戰國時代には例の伊東・島津兩氏がこゝでも盛に爭奪戰を繰返してゐる。

大淀の次には清武驛がある。有名な清武河の右岸流域にある村で、其北には海岸に近く平野が開けてゐるに反して、南には斟鉢山其他の諸山が深く重疊し、著しく地勢が異つてゐる。此邊も矢張り伊東氏が盛に其羽翼を張つてゐた所で、重臣稻津重政の居たといふ古城址がある。

清武から進んで田野へ入ると、もう全くの山の中で、東には荒平山が峙ち、南西には鰐ノ塚山雪ケ峰・東嶽があつて、そこに鬱蒼たる東嶽官林を形成し、其北には靑井岳・吉川の官林が奧深く續いてゐる。

汽車は此の靑井官林の下に隧道を穿つて走つてゐる。延長實に五千〇十六呎、九州線第二の長い隧道である。

山之口驛を過ぎると、もう其邊は地質學上有名な都の城平野で、西北には霧島火山系、東には日向山脈が連亙し、霧島山から降下した火山灰は、積んで特殊の地形を成してゐる。三股だの、

都之城だの云ふ停車場が其中にある。三股は都の城の東約三哩の地點にある小驛で、古くは山之口、高城の二村と共に廣く三俣院又高城鄕と云つた。三俣城址がこゝにある。南北朝の頃、菊池武光が攻めて之を陷れた城で、其後伊東氏が久しく之を領有してゐたが、伊東氏天正の敗殘後は、島津氏のものと成つた。

驛から出し北へ行くと、高城村がある。伊東氏八外城の一があつた所で、直ぐ其西には繩瀨川が流れ、東北宮崎から來て所謂都の城平野を西南に貫通する鹿兒島街道が、其前にかゝつてゐる。

都の城はこゝから約三里ある。宮崎縣下に於ける繁盛第一の都會で、元の所謂島津の莊に屬し永く島津氏の族將北鄕氏が之が守つてゐた。今、停車場の西南一里にある城山公園が其城址であると云ふ事だ。

驛の南方七町に、天照皇大神及豐受大神を合祀した神柱神社がある。萬壽三年平季基が初めて此地を開いた時の創建で、古くは梅北にあつたのを近年新に移したのだといふ。

都の城からは又、谷頭、高崎新田の二驛を經て、汽車が北方高原に向つて進んでゐる。高原は

霧島山彙の裾が形成する高原地の小驛で、霧島登山の要道に當り、狹野神社、霧島東神社などが西方約四五里の間に散在してゐる。

狹野神社は神武天皇の御降誕地だといふ說があつて、今では國幣小社に成つてゐる。杉森の中にある莊嚴な感じのお宮だ。驛から西へこゝまでは約三十四町で、こゝを通つて霧島神社あたりまでは、確か馬車が通じてゐる。

此邊は、高原性の平原に特有な一味の淸爽な大氣が漂うてゐて、それに道々の景色に變化が多いので歩いてゐても氣持がいゝ。霧島はこゝから見ると、西に峙つてゐて、モクモクと黑い煙の渦卷き上つてゐるのが物凄い程に見える。

狹野から三十丁程行くと萩川村がある。霧島東神社はこゝにあるのだ。こゝから道は段々爪先上りに成つて、一脈の木立が、斷えては又續き、續いては又絕える。

木立の間から、白い雲のかゝつてゐる霧島の峰を仰視る感じも一寸面白い。

私の行つた時は、夏の初めだつたが、山にはこゝの特產だといふ霧島躑躅が、美しい色に咲いてゐた。大分來て振返つて見ると、狹野神社のある杉森が黑く遙に見えて、萩川部落の南方に、

所謂御池の水面がキラキラと烈日の光を受けてきらめいてゐるのが、思ひがけもない好い景色に眺められた。

畫のやうな好景が、歩一歩に段々其廣袤を加へて行く。私と今一人の同行者とは、汗みづくに成るのも忘れて、幾度も上つては振返り、上つては振返りした。

道は隨分嶮峻で、中には足で登るといふよりも手で登るといふ方が適切な程の難所もある。

『一歩を過てば死だね。然しそれはこゝばかりぢやないよ』

と、いつも冗戯ばかり利きさがす友が、此時ばかりは嶮嚴な顏をしてさう云つた。

然し登りきつて見ると、攀路が難澁な程それ程高い山だと云ふ感じがしなかつた。何人の兒戯か知らないが、高千穗の絶頂には、所謂天ノ逆鋒が、石塊の中に突刺してあつた。

ゴウと凄じい音を立てゝ直ぐ下の方に噴火口が唸つてゐる。俗にお鉢といふのがそれだ。

こゝから山を西へ下りて、別れ路から北へ行くと、ちやうど烏帽子嶽の北麓に當る所に明礬・榮尾・手洗・鉾投・殿・栗川などの諸湯があると聞いたが、私達は其別れ路から反對に南へ來て、そこで霧島神宮の朱塗のお宮へ參つて、長池・荒襲などいふ村々を通つて、元の狹野の方へ引返した。

て行つた。

山其のものから受けた感じは、少かつた。がそれでも山路から、遠く鹿兒島灣を見た感じは、度々『畫のやうだ』も鼻につくが、然し全く美しい畫のやうだつた。

東京へ歸つてから、いつだつたか九州生れだといふ友人に霧島のつまらなかつた話をすると、『何だ霧島へ夏登る奴があるかい。あそこで名物の霧に見舞はれたが最期、命は無いものと諦める外は無いよ。よくそれでも無事に生きて還つて來たよ』

と其友人は笑ひ乍うさう云つた。實際昔から此山は男でも一人で上れない事にきまつてるのださうだ。まア二度と行く所ではないかも知れない。

汽車で行くと、高原から北へ小林町・飯野・加久藤と、所謂霧島火山の北を迂廻して、吉松へ出る事に成つてゐる。

小林町は高原の中心で、驛から北へ一里程行くと、岩瀨川の水源東方村といふ所に、有名な陰陽一對の奇石がある。勿論態々下りて行く程のものは無い。こゝの小林といふ所は、こんな山の中にも似合はない家並の整頓した町で、附近からは有名な小林米が出る。

こゝから飯野の方へ來ると、幾らかレールが、下り氣味に成つて、沿線の平野が次第に高原性を失つて來る。

南は夷守・韓國・瓶・白鳥の諸山で、北には狗留孫岳が聳え、ちやうど其中間の谷あひに、飯野の村が開けてゐる。有名な薩摩の川内川の水源地で、村内には白鳥温泉、飯野城址がある。飯野城は永祿頃には島津氏に屬した所で、義弘はこゝで日向の伊東・肥後の相良二氏の前進を扼してゐた。西南戰爭の時にもこゝが、一時薩軍の根據地に成つてゐた。

狗留孫嶽は國道を右へ大河平の方へ入つて行つて、それから三里程ある。この山中の大巖の上に建つてゐる熊野神社は、古來有名なもので、其岩の周圍を右へ右へと廻れば、願事が必ず成就するといふ迷信が行はれてる。熊野のお腰廻りといふのはこれで、社の東には又斷崖に臨んだ所に極めて危險な細徑で取卷いた外お腰廻りの奇岩がある。私はまだ行つて見ないが、一寸面白い如何にも山中の神社らしい感じのする所だといふ事だ。

飯野から加久藤までは三哩程しかない。此邊一帶は、例の伊東・島津兩氏の古戰場で、到る所に其蹟が遺つてゐる。島津氏が飯野城から急進して來て大勝を博したといふ木崎原などいふ所もある。

隧道の長いので名高い矢嶽が、此邊から見ると、直ぐ北に眉を壓して聳えてゐて、門司から來た鹿兒島本線の汽車が、其下を通つて、吉松で此の宮崎線と合して居る。

吉松の附近には、足利尊氏の陣地の址だとか、和氣清麿配所の洞窟などといふものがある。こゝから南へ栗野・横川・牧園と、大抵三四哩置きに、小驛が幾つも並んでゐる。

私が此線で旅をしたのも矢張夏の初めだつたが、何處の停車場でも、大抵湯治客らしいのが二組三組宛下りて行つた。

『此の邊には温泉が多いと見えますね』

と、乘合の誰れかが言ふと、

『さうでさア栗野の安樂、霧島、嘉例川と此邊は温泉で埋まつてまさアね』

と、行商人らしい物馴れた中年者が、大袈裟なアクセントを附けて、高聲で話對手に成つてゐる。

栗野で下りると、直ぐ傍に島津義弘の居城だつた松尾城址や、西北へ五里程離れて川内川の沿

岸を行つた丘陵地帶の奥に、有名な大口盆地の中樞を占めてゐる大口城址があつた事は、後で旅行案内を見て氣が附いた。大口城は豊太閤程の軍略家も、最初は一寸攻めあぐんだ程の兵要陣地で、其時この城の守備に當つた島津氏の勇將新納忠元の墓も、其附近にある筈だ。あの有名な

『肥後の加藤が來るならば、焙硝肴に團子會釋、團子は何だと鉛團子、それでも聞かずに來るならば、首に刀の引出物』

といふ歌は、加藤清正が大口城の攻圍に向つた時に、城將忠元が士氣を鼓舞する爲め全軍に諭はせたものだと聞いてゐる。

栗野から嘉例川までは、線路が殆ど丘陵の中ばかりを通つてゐるが、嘉例川まで來ると、段々沿線の眼界が開けて來て、遙に眼を放つと、廣々とした水田の中を縫うて、新川が滔々と南に流れてゐる。

此驛の西方三十丁溝邊村には、彦火々出見尊の御陵として名高い高屋山上陵があつて、直ぐ其南方に近く、尊靈を祀つた高屋神社がある。周圍は火山灰質から成つた一面の曠野で、其中に尊の御陵が峻然と立つてゐるのが、如何にも偉大な或るものを語つてゐる。

それが、次の國分まで來ると、グッと地味が變つて、沃野が廣く開けてゐる。此邊は昔から煙草の産地として名高い所だ。國分町は、停車場から大分東へ寄つた所にある。前に近く押開いた海を控えてゐるので、町の感じも氣持がいゝ程明るい。

驛の西北八丁には、國分八幡の名を以て知られてゐる官幣大社鹿兒島神宮がある。彦火々出見尊を奉祀した社で、こゝでは干珠滿珠が寶物に成つてゐるといふ。驛の直ぐ東府中村には又、古國府の址がある。國分寺も其附近にあつたが、近年全く廢絶し盡して、廢址から時々破碎した古瓦片を發見する。こゝいらは、隼人、熊襲に關する傳說の多い所で、國分町の南方大字上小川村には古代熊襲の根據地だつた有名な隼人城址があり、熊襲の首長が住んで居た所だといふ大洞窟が、其地點に『長袋』と云ふ名で遺つてゐる。

口碑に據ると、川上梟帥が日本武尊に誅戮されたのも、此邊で、梟帥の弟武が逃損ねて尊の御手にかゝつた所だと云ふ拍子橋だの又、武といふ所などもある。又和銅年間に立てたといふ隼人塚が驛の直ぐ傍にある。

汽車は國分を出ると、段々南西にカーブを作つて、海岸の方へ海岸の方へと進んで行く。そし

て、碧い碧い錦江灣の海面が、美しい景色を段々眼界に現して來る。

『アッ海だ。海が見える』

といふ感じが最初にして、直ぐそれが『錦江灣だな』といふ考へを起させる。

小さな幾多の島の向ふに、櫻島が王者のやうにドッシリと控えてゐる姿が、私には此上もなく嬉しかつた。有名な櫻島の噴煙は思つたより淡かつた。

加治木の北には、島津義弘が隱居して後に永く住んでゐた加治木城址がある。古くは大藏氏の居城だつたのを、明應年間に島津氏が攻陷したもので、義弘の卒後も代々島津氏の居城になつてゐた。

此の驛の近所での名所としては、龍門の瀧といふのが、北方約十五丁の所にある。高さ二十四間、幅二十間、一寸此邊では珍しい瀧だ。

加治木を出ると、汽車は綱掛川を渡り、別府川を渡りして、段々又南へ廻つて行く、そして、それに伴れて海面の景色の變つて行くのが、まるで活動寫眞の畫面が面白い程クルクルと廻轉して變つて行くのを見てゐるやうだ。

別府川の流域を北に遡ると、川の左右に開けた細長い平野の中に、帖佐村といふ所があつて、島津氏の館址が、其處に礎石だけに成つて遺つてゐる。古帖佐屋敷と云つて、島津氏が朝鮮から伴れて歸つた陶工星山仲次が、そこで所謂薩摩古帖佐を燒いた所だといふ舊蹟も、直ぐ館址に隣して殘つてゐる。

別府川から更に思川を渡ると、もう間もなく重富驛だ。此邊へ來ると、道は海岸に近く沿うて居て、松原越しに白帆が見えたり、青い海の面てが見えたり、到る所悉く好景ならざる無しで初めて來た旅客は皆、窓から顏が離さないで、夢中に進んで行く。

重富で下りたら、是非蒲生の大楠と、寺師の梅だけは見て來る事だ。蒲生までは驛から殆ど三里もあるだらう。前に云つた帖佐のまだずッと奥で、大楠は蒲生村大字久德の若宮八幡宮の境内にある。周圍七丈三尺八寸、高さ九丈、今日まで約八百年を經たもので、日本第一の名がある。此の久德から西へ少し行つた久米といふ村は、蒲生氏累代の居城址がある所で、反對にこゝから東へ少し行くと、例の梅で名高い寺師村が其處にある。

寺師の梅も隨分古い樹齡を持つたもので、大隅第一の稱がある。自分も一度は是非行つて見た

いと思つてゐるが、今日までツイ行きそびれて了つてゐる。

重富から鹿兒島までの海岸は、景に於て確に九州第一の觀がある。そして其間を縫うて、幾多の名蹟が點在してゐる。

重富驛から三十丁程南方の海岸には、島津義久を祀つた平松神社がある。そこから少し南へ行くと、大崎の鼻で、其突端からは美しい櫻島が、手に取るやうに見える。海岸に近い人家の數が指點せられる程だ。

京都清水寺の月照上人が、西鄕南州翁と相抱いて入水せられたのは、何でも此邊に近い海面ださうだ。

こゝらへ來ると痛切に西鄕南州翁の事が偲ばれる。『百二都城皆我儕』とか何とか云つた翁の詩が、新しく蘇つて來る。

私は無量の感慨に滿たされて、鹿兒島へ入つて行つた。そして一番に城山を見に行つた。城山は今公園に成つてゐる。驛から約十二三丁の處で、こゝから見た櫻島の感じは、何とも云へない程いゝ。それに碧い碧い錦江灣の海面が、一層其濃度を增して見える。

南州翁の最期の地は、此の山のちやうど後背部に當る岩崎谷といふ所で、そこには大きな碑が立つてゐる。

死といふ觀念が、大きな力で、いきなり私を壓さへつけるやうに働いた。西鄕程の英雄でも、矢張死といふ必然の運命は免れなかつた。翁の維新の功業も、征韓論の爭ひも、そして十年の役の敗衂も、凡てが皆、死といふもの、前で見たら、小さい出來事に過ぎない。私は翁の碑の前を久しく去る事が出來なかつた。

私はそれから淨光明寺へ行つて翁の墓に謁した。所謂薩摩隼人の若者が最後迄翁の爲に血戰した鶴峰へも行つて見た。月照上人の墓へも行つて見た。十年役の導火線と成つた私學校跡が、今病院に成つてる前も、通つて見た。そして其處に鹿兒島の生命が輝いて居るのを見た。

『櫻島もいゝが、然し、鹿兒島の誇は、矢張大西鄕ですねえ』

と、一緒に墓に謁した中學生が、眼を屢叩いてさう云つた。

市内には翁の遺蹟を除いて、まだ外に、文久二年英艦が生麥事件の報復の爲に來襲した時に薩軍が戰つて之を擊退したといふ砲臺のあつた祇園の州や、薩主齊彬公を祀つた別格官幣社照國神

社もあると聞いたが、行つて見る氣に成らなかつた。

櫻島へは見物の舟が出る。温泉へでも入る人は、行つて見るのもよからうが、然し大抵なら、遠く望んで居る方が、美しさを味ふといふ目的に適ふだらう。

私は未だに近く迄舟で行つて見ない事を、殘念だとは思つてゐない。只折角鹿兒島迄來たんだから、行けるものなら行つて見たいと其時に思つたのは、琉球だつた。

鐵砲の輸入地として知られてゐる種ヶ島や、妻蛇飯七蟲を產する大島、俊寛が流されて居た鬼界ヶ島、さういふ大隅近海の島々だけを見て廻つても、色々面白い事があるさうだ。

『何しろ何千年霜も雪も知らないと云ふ所ですからねえ。動物にだつて植物にだつて、熱帶的氣分の横溢した珍しい奴が澤山居ますよ。人間の發育だつて、內地とは非常に違ふといふ話です。南國的の濃厚な情緒を持つた島の女には、內地人の思ひもつかない面白いロマンスが澤山あると聞きました』

と、曾て沖繩に居た事のあるといふ農商務省の屬官が話した事を、其時私は思出して居た。

琉球の海は、水が眞赤な色をして居て、其底に鮮紅色の魚や眞靑な魚の游いでゐるのが何とも云へない奇觀だと云ふ事も、琉珠では、港の舟著に墓塲が幾つも刻んで居て、其後に女郎屋があるのが、面白い對照だと云ふ事も、其男から聞いた話だつた。

爲朝父子を題材にして、これに纏綿たる南國的の戀愛情緒を配合した傳奇小說白縫譚は、私が少年期の愛讀小說であつたと共に、琉球は最早くから、私の頭腦に熟してゐた島の名であつた。大島紬●薩摩絣●琉球表●泡盛酒、それ等の物の產地としても、可なり屢々琉球の名を、小學校などで教へ込まれた。琉球では山原船と云ふ支那のジャンク見たやうな特殊の船で、島から島へ必要の物資を輸送して居るといふ話を、曾て何かの本で見たやうな氣もする。

何かなし行つて見たい所だ。

此頃では、此の南海の孤島沖繩にも、縣營鐵道が出來て、那覇から眞玉橋●國場●一日橋●南風原●大里を通つて與那原まで、汽車が通じて居るさうだ。

機會があつたら、さう云ふ汽車にも是非一度乘つて見たいものだと思つて居る。

川内川域及び薩摩半島

鹿兒島からは新に又、西北に向つて進む線路がある。今は川内までしか通じてゐないが、將來は更に其處から北方肥州の海岸に沿うて八代の本線に聯絡しようとするもので、武、伊集院、東市來、湯之元、西市來、串木野、木場茶屋等の諸驛が其中間に在る。

武は鹿兒島電氣の接續點で、驛の東方約十丁前後の所には、西鄕南州●大久保甲東寺の誕生地がある、

次の伊集院驛がある所は、所謂中伊集院村の要樞で、鹿兒島市との間には山を中に、四里餘を隔てゝゐる。島津氏の一族伊集院氏の領所だつた所で、驛の西方中伊集院村の大字大田には、其居城の址がある。又驛の北方一丁の德重村には、島津義弘を祀つた德重神社がある。こゝの祭は陰曆九月十五日の晩で、其夜は甲冑を裝うた鹿兒島の靑年團體が、列を正して月下社頭に參詣する慣例がある。德重の妙圓寺參りと云つて、昔から有名なものだ。

此の伊集院からは、南へ薩南半島の海岸傳ひに大崎迄、南薩鐵道が通じてゐる。毘沙門だの日置だのといふ小驛が幾つも、其間に點綴してゐる。

日置の海岸には、大川の河口に近く帆ノ湊がある。島津忠久が初めて封を鹿兒島に受けた時に着船した記念の地だと云はれてゐる。

吉利●永吉は共に日置の南にある小村であるが、此邊は殊に薩南半島西岸の景勝地で、海岸一帶は北方西市來から南方萬瀨川の河口まで蜒々十里に亘つて有名な吹上濱に屬し、白砂靑松、頗る繪畫的色彩に富んでゐる。然も一朝烈風が吹起ると、砂塵龍卷の如く中空に舞うて、或は高く或は低く、附近村落の樹木は悉く之が爲に生色を失ふと云はれてゐる。

永吉から南へ進むと、伊作驛がある。こゝで下りて二十五丁程東へ行くと、胃腸病に利目があると云ふ湯の浦温泉がある。砂の中から湧出してゐる清泉で、泉質は炭酸泉だ。

又、驛の東北數丁の所には伊作城址がある。島津義久●義弘●歲久等は皆こゝで生れたのだといふ事だ。

入來にも次の北多夫施にも格別見る所はない。南多夫施へ來ると、直ぐ東に近く高倉山●金峰

山が聳えてゐるのが見える。

金峰山は其山上に安閑天皇を奉祀した金峰山神社のある山で、附近には又勝手大明神の俗稱で名高い多夫施神社がある。

阿多驛は、此の南多夫施から、僅に南へ一哩强を隔てたばかりの驛で、萬瀨川の流域に當つてゐる。昔の吾田國阿多郡の本據で、こゝから更に南進すると加世田驛がある。

加世田は今、加世田本村及び東西加世田の三村に別れてゐる。停車場のあるのは加世田本村の大字加世田で、ちやうど加世田川の沿岸に當つてゐる。

驛の南に近く島津忠良を祭つた竹田神社がある。こゝの加世田踊は有名なものだ。又、附近に加世田城址がある。島津實久が父祖國久の後を繼いで、こゝを治してゐたのを、忠良が改めて陷れた城で、忠良の勢威が大に九州に振ふに至つたのは、此城の占領後だと云はれてゐる。

大崎は、小都市だが、此邊での商業市で、こゝから野間岬へ行く道が、西南に續いてゐる。野間岬は長く川邊郡の西方海上に斗出すること二里餘、野間岳が其岬端に標高一九六四尺の峻峭な姿を示してゐる。久米博士の說に隨ふと古傳說に所謂天孫降臨の高千穗峰はこれで、北に笠沙岬

とあるのが、卽ち此野間岬であらうと云ふ事だ。野間岳の山中には野間神社がある。今は東南の中腹にあるが、文政前は絕頂にあつたのだといふ。

野間岬の北は阿多灣で、東南は海岸線頻に屈曲し、北より順次に久志浦・泊浦・坊ノ津の小港灣を成してゐる。

坊ノ津は薩南半島西岸有名の良港で、上古時代には筑前の博多の津、伊勢の阿濃津と共に日本三津の一に數へられた。貿易港としても隨分古い歷史を持つてゐて、長崎が開ける迄は唐船の出入頗る頻繁を極めた。

附近の海岸は奇石怪岩の亂立してゐる所謂奇景の地で、古來風光の美を以て稱せられてゐる。

坊ノ津の東方二里五丁に枕崎がある。有名な鰹及鰤の漁業地で、小さい町ではあるが、活氣がある。

此邊から見ると、例の正圓錐形をした開聞嶽火山が、斜に東南に見える。前は淼漫たる大洋で其海濱に近く富士型の山の峙立してゐる姿は、偉觀といふよりも寧ろ美觀である。此山の活火山だつた時の壯大な光景が想像される。

此山の北麓は穎娃村で、そこの十町といふ小村には、國幣小社枚聞神社がある。祭神は木花咲耶姫だとも云ひ、又鹽土翁だとも、大日靈女尊だとも云つて、確な事が分らない。山の名は枚聞の音讀から轉訛したもので、附近には噴火當時の遺蹟を意味する鏡池・鰻池等の小池があり、直北に近く池田の大湖がある。周回四里二十五町、三方を山に包圍された美景の池で、水深百五十尋、南に御瓶子川の水口を開いて、川尻浦から海に注いでゐる。

薩南鐵道で例の沙濱に沿うた線を再び伊集院まで引返して、そこから又川内線で、北へ順次に東市來・湯之元・西市來まで進むと、其邊から段々地質が變つて、海岸には一帶の礁濱が連るやうに成つて來る。然し汽車は串木野あたりから、次第に海濱を離れて、東北へ方向を探つて行く。三井金山・芹ケ野金山・日置鑛山などが、線路から大抵二十丁以内の地域にあつて、停車場も殆ど其便宜の爲めに設けられてゐる形がある。

川内驛が近く成ると、あたりには廣々とした水田が開けて、川内川が近いことを想はせる。川内は此邊での立派な町だ。秀吉が島津征伐の時に講和の交渉をした所だといふ泰平寺の址だの、國幣中社新田神社・瓊々杵尊の山陵だと云はれる可愛山陵が、直ぐ近くに在る。

川内川は、此邊へ來ると、餘程河幅が廣く成つて、西進して海に入る迄の間、其兩岸到る所に沃野を作つてゐる。河口にある京泊は、秀吉が島津攻の時の上陸地點で、軍は全部揚陸を終ると索敵行動の後、一部隊をこゝに留めて、川内川左岸の猫嶽高地を占領し、更に司令部を泰平寺に進めて、それから戰鬪を開展して行つた。猫嶽は極めて展望の利く所だ。

泰平寺址へ行くと、義久が薙髪素服して來た當時を語る大石が、降參石といふ名で、遺つてゐる。無論後人が勝手につけた名前だらうが、確に其當時からあつたものらしく、之に對すると何だかアノ剛愎な義久の坊主姿に成つて來た風丰が、浮かんで來るやうな氣がして、無量の感慨に打たれる。

川内から北へは、日向の大口町方面に行く道と、海岸沿ひに八代へ行く道とが、東西に分開してゐる。

八代道には、西方だの、阿久根だのといふ風光明媚の地がある。奇岩の亂立した一帶の礁濱を點綴して彩りを添へてゐる松の青色が、何とも云へない程美しい。

阿久根港の邊では、肥後街道が最海岸に近く迫つてゐる。前海には雄島・雌島等數個の小島が碁布してゐて、眺望開濶、海岸は出沒激しく、數多の奇景をそこに形つてゐる。黑神岩、隔岡の鹽濱・大人足跡・巖船・尻無川・小瀉崎の洞穴・光礁は阿久根の七奇として古來人口に膾炙してゐる。

此邊は往古の英禰院の地で、鎌倉時代英禰院の所司成崎成兼の居城だつたといふ英禰城址がそこにある。

阿久根の北は、出水郡の一部地方たる下出水半島で、西は黑瀨戸を隔てゝ長島と相對し、中央には竹笠狀をした笠山がある。

こゝから更に肥後街道を北西に行くと、阿久根から約三里位の地點に米ノ津港がある。米津川河口の小驛で、古代に鹿が多く棲んで居たといふ獅子島が、直ぐ前に見える。海路から肥後に行く要港で、陸路三太郎の險を越えて行く事を厭ふ者は、皆こゝから舟で行く事に成つてゐる。

古の出水驛は此の米ノ津の東南一里餘りの所にある。肝屬氏の一族和泉氏が累代據守してゐた所で、附近に出水城址がある。

こゝが島津氏の所領に成つたのは、豐公以後の事で、幕政時代には、米ノ津の北方國境に近い所に、行人を改める爲の關所があつた。

米ノ津から、中鹽屋・針原・櫓木・前田・切通を通つて國界を北に越えると、其處はもう肥後國で熊本縣の管轄に屬してゐる。

熊本へ

吉松から川内線、薩南鐵道線の附近を見て廻つたら、今度は吉松から、鹿兒島本線を北へ進むのが順序である。

吉松附近は日向の北山脈を形成してゐる黑圍・百貫・國見の諸山と、南肥後の鉾立・津ヶ尾・笠置の諸山が互に重疊相脈絡して居る所で、吉松・矢嶽間僅々九哩の間にも、四個の隧道がある。中でも一番長いのは矢嶽の隧道で、延長實に六千八百七十餘尺、九州第一の大隧道だと云はれてゐる。

吉松の北にある眞幸といふ小驛から、此の隧道にかゝるまでの右側は、一望十里、川内川流域の上游に開けた眞幸平野で、遠く眼を南に放つと、霧島山彙の諸峰巒が高く低く波狀を描いて居るのが美しく見える。

『熊本からこちらへ、遙々と山の中ばかり引廻されて來て、初めてこゝで廣場を見た時の心持つたらありませんでしたよ。誰だつても、アヽッと云つて、もう後の句が出ませんねえ』

と、始終此邊を乘馴れてゐらしい人が、それでも名殘惜しさうに窓から後を振返つて見て、さう云つた。

矢嶽のトンネルを北へ越すと、世界が急に變つたやうに、どちらを見ても山ばかりだ。隧道が幾つも幾つも在つて、一々窓を開閉してゐると際限が無い位だ。

『そろ〳〵ループ線にかゝりますよ』

と、先刻の人が又さう云つた。

レールの勾配が段々急に成つて、汽車が喘ぎ喘ぎ山の上まで登つたかと思ふと、段々又急轉的に下つて行つて　元來た方向へ大廻りに廻つて行く。一體どこまで引廻されるのだらうと思つて居ると、其うちにやつと平地まで下り限つてしまつて　其處の大畑といふ驛で停車する。

考へて見ると、何の事は無い、此の停車場を中心に、さつきから汽車が堂々廻りをして居たわけで、大畑を出ると、前に通つて來た山の下を、再び又潛つて行く事に成つてゐる。

『文明の威力は、まだ〳〵自然の大威力には勝てないんですねえ』

と私がさう云ふと、先刻の男がニヤ〳〵笑つて、

『でも、これで餘つ程其文明の恩澤つて奴を蒙つてるんですぜ。これが出來るまでは、汽車が北から人吉まで、南からは吉松まで來てる乍ら、此山一重か鐵のとか何とか云ふ奴で、兩方でもだもだし乍ら、握手する事が出來なかつたんですからねえ』

と滑稽な調子でさう云つたので、車中の人達は、みんな釣込まれて一時にどつと笑つた。

何でも此線が明治四十二年とかに出來上つたそれ迄は、加久藤の險路を長い間馬車に搖られて尻を痛め乍ら、吉松まで行つたものださうだ。

うるさい程澤山ある隧道をスツカリ通越して了ふと、線路は段々下り勾配に成つて、やがて玖摩川が顏を出して來る。

私はこゝへ來て水無山脈を離れきると、初めて救はれたやうにホツとした。直ぐ前に人吉の町が見える。

玖摩川の谷を見に行くには、こゝの梅花の渡から河舟に乘るので、汽車で行つたんぢやァ本當の美觀は味へない。玖摩川は富士・天龍・木曾などと共に有名な急流で、こゝから八代まで十六里

の間を五時間で下つて行く。途中には壯快な急瀨が幾つもある。所謂玖摩川三十三瀨と云ふのは

これで、沿岸には色々の面白い形をした岩礁が絕壁を形つて水面に迫つてゐる。鍾乳洞らしい不思議な洞窟も見える。神ノ瀨の穴と云つて古來有名なものださうだ。

神ノ瀨の對岸は、停車場所在地の白石で、こゝから南東一勝地驛までの間が、玖摩川溪谷中最も特色に富んだ絕景の地點だと云はれてゐる。加藤清正が玖摩を攻めに來て、こゝで其大きな岩を見て、其天險に驚いて軍を旋した所だといふ清正公岩や、幕政時代領主相良侯が、舟で其下を通る時に、どうしても其槍を立てゝ通る事が出來なかつたといふ鎗倒岩などが其附近にある。

此川では鮎が澤山漁れるさうだ。夏は石上に上つて鳴く河鹿の凉しい聲も聞ける。

人吉から北東に道をとつて、川邊川の谷を遡ると、又一寸面白い所があると云ふ事だが、私はまだ行つて見た事がない。

人吉といふ町も綺麗な感じのいゝ所だ。河に臨んでる事も、山が遠卷に、靑々した姿を見せてゐるのも、私は氣に入つた。盆地の瓣に盆地に居るやうな、せゝこましい心持のしないのも、面白いと思つた。

相良氏の居城はこゝにあつたので、今、驛の東南十五町に其城址が殘つてゐる。要害のよいのを以て知られた日本三名城の一で、城内に代々の藩主を祀つた人吉神社がある。又、驛の直ぐ南には、球磨で一番靑井の御門と歌にまで謠はれた幽寂の神境靑井神社がある。平城天皇の大同二年に創建した古社で、祭神は阿蘇三社の神である。

例の西鄕戰爭の時に、こゝで烈しい戰爭があつた事を、私は西南戰史か何かで讀んだのを覺えて居る。

矢部の谷から五箇莊●五木谷の嶮道を、落ちのびて來て、こゝを足だまりに、頑强な防戰を試みた薩軍が、山田少將軍の猛擊に逢つて、壞敗した戰狀が、其本には例の漢文調で誇張的な圖點を無數に附けて書いてあつた。

此兵要陣地を敵手に委したといふ事は、薩軍の弱點を暴露したもので、薩軍壞滅の運命は、既にもう此時に胚胎して居たと云つても可い。

汽車はこゝから西方佐敷に通ずる人吉本道と暫く並行して、玖磨川の溪谷に沿ひ乍ら、渡●那

良口●一勝地●白石●瀨戸石●坂本の諸驛を經て、八代まで行つてゐる。

渡で下りて、南へ二里程行くと西浦山の北麓に鹿目といふ小村がある。鹿目の瀧といふ一寸した瀧のある所で、其附近には例の荒木又右衞門の講談で名高い河合又五郎の邸址がある。

白石の少し南方まで來ると、汽車は人吉本道と分れて、北へ曲つて行く。こゝから人吉本道を西へ眞直に行くと、佐敷までは五六里の道である。

佐敷は建武以來の古城址のある所で、戰國時代には屢々此城が島津●相良兩勢力の間に爭はれて居る。島津氏の將梅北盛定が城兵の僞計に罹つて城中で慘殺されたのもこゝだ。前は卽ち八代海で、海岸一帶には東北から西南に走り來つた幾多の山鏈が露出して、各所に小山谷を形成して居る。世に薩摩道三太郎の嶮と稱するものはこれで、北方田浦村との間には佐敷太郎峠があり更に其北方二見村に到る道には、上下一里の赤松太郎峠がある。

太郎峠があり、南方水俣村に到る間には津奈木

白石で下りたら、驛の北方三十町の地點に在る吉尾溫泉へ行つて來るのも可からう。附近には銅鑛の出る山などもある。

次の坂本驛の近くには、百濟來といふ村があつて、其處の馬場地藏堂といふのは、實に百濟の歸化僧日羅の墓だといふ口碑がある。鐵道院の旅行案内には、『日羅將軍の墓、西二里、百濟來村にあり、百濟に居ること三十年、敏達天皇の時歸朝、新羅征伐の策を獻じた』とある。百濟來村の名は、推古朝に、百濟僧道欣、道俗八十人を率ゐて葦北に入津すと日本紀にある。それから出たものであらう。

坂本から、八代驛へ近く來ると、段々山が後に成つて、八代郡沿岸の沃野が、限りも無く廣く眼の前に開けてゐるのが見える。

八代は球磨川の河口を扼した重要な商業市で、球磨の奥から吐出されて來る凡ての貨物は大抵皆こゝで消化される。熊本縣第二の都會と云はれるだけあつて町並も整頓してゐる。

『八代へお出でなされ候はゞ、お忘れなく懐良親王の御墓へ御參詣可然候。官幣中社八代宮が親王の御尊靈を奉祀したる神社なることを知つて參拜する者はありても、御墓へ參る人が餘り無之は遺憾に候。高田の御所址も御拜觀可然と存じ候。』

と云ふ手紙を、宿屋へ着くと、私はポケットから出して又讀直して見た。

まだ私の學生時代に歴史地理の講習會か何かで馴染に成つた老中等教員で、九州生れの慷慨志士的の愉快な男が、此の手紙の主で、私が九州へ旅行するかも知れないと云つて遣つた返事に、これを書いてよこしたのだ。

親王のお墓へ行けと言ふ指定が、妙に私の感傷的な心持を動かしたので、ちやうど晝飯が出來ると直ぐ、十五六町の道を、宮地村の悟眞寺まで行つた。

宮地村はもう上宮山の直ぐ麓で、懐良親王のお墓のある悟眞寺は、百濟國の聖明王の靈を祀つたといふ八代神社と隣接してゐる。親王のお墓がまるで、無縁墓か何かのやうに、苔に埋れて雜草のショボ〳〵した中に立つて居るのが、私の胸を打つた。

此の悟眞寺は元來隣の八代神社の供僧坊で、八代神社も、明治四年までは妙見宮と呼ばれて居た。細川領の時代には、こゝの祭典は非常に有名なもので、熊本藤崎八幡の放生會と比べて、一妙見、二なし、三放生會と云はれた程であつたといふ。

金枝玉葉の御身で、三十六年間も此の山奥の僻陬に放浪的生涯をお送りに成つて、到頭埋れ盡しておしまひに成つた親王の御事蹟程、痛ましいものは無い。私は悟眞寺から、町まで引返して

町の中にある親王の御新廟所謂宮幣中社八代宮へ來ても、まだ其事を考へて居た。

人間の一生位分らないものは無い。裸一貫で山の中から飛出して來て、沐猴冠の新男爵に成る者もあれば、貴顯の御身で、斯ういふ御生涯をお送りに成つたお方もある。私は今更に、名も無く生れて名も無く朽ちて行く路傍の雜草のやうな人達の方が、寧ろ幸福ぢやなからうかと思つて見たりした。

八代宮は明治十三年の創建で征西將軍懐良親王の外に、筑後の矢部川溪谷で御長逝に成つた宇良親王を合祀してある。こゝの社地は元和六年に加藤忠廣が築いた八代新城のあつた所で、加藤氏廢黜後は、細川氏が其領を受けて居た。

舊城は市街から東南約一里の古麓にあつたのが、後市街の直南麥島に轉じ、麥島城が地震の爲倒潰してから、新にこゝに築かれたのだといふ。

翌日は、豫てから一度行つて見たいと思つて居た日奈久の温泉へ自働車で行つて見た。

泉質は炭酸泉で、湯としては特色が少いが、浴舍は一體に皆規模が大きくつて、氣持がいゝ。海が近いので、魚類の新しいのが食べられるのも嬉しかつた。只然し前面は泥濘が可なり向ふ迄

續いてゐて、所謂海波樓欄を洗はんとする快觀を味へないのだけは、頗る豫期に反して居た。

八代の北には有佐驛がある。八代郡の仙境五箇莊村へは、こゝから下りて行くので、驛の西方宮ノ原から、懸崖の絶勝を以て知られてゐる立神の白嶽を見て、氷川の溪谷を遡つて行くと、道は屢々屈曲して矢山嶽の東麓柿迫村に導かれてゐる。村の北嶺は即ち釋迦院岳で、其下に延暦年間弁善大師の開創したといふ古刹金海山大恩寺がある。往時は紀州の高野に對して西の高野と云はれた大伽藍で、坊舍七十五、香煙谷に滿ちたと云はれてゐるが、其後幾びか破壞の運命に會うて、今は殆んど其舊觀を失つてゐる。

宮の原からこゝ迄の道程は約四里半と稱せられる。こゝ迄來れば五箇莊は、あともう五六里しかない。

深山●岩奥と淋しい山道にポツンポツンとある村々を通過ぎて、下屋敷へ入ると、其處はもう五箇莊の領分で、北方には白山●雁俣●目丸等の高山峻峰が連り、餘脈南に延びて六本杉山となり、日向の國界には九州第一の高嶺が聳立して、其山陰に椎原●久連子●樅木●葉木●仁田尾の五村を形成してゐる。住民は元菅家の子孫の太宰府から逃込んだものと、壽永の敗後緒方氏に依つた

平清經の子孫が山賊に擁せられて土着したものとの遺孫が、漸次繁殖したのだと云ふ傳說がある。言語風俗の異常なのと、殆ど原人に近い簡素な生活をして居る點とは確に研究に値する。外部との交通が始めて開けたのは明治六年以後で、維新前までは、全く化外の民として、七百年來孤立的の生活を營んで居たのが、此頃では學校も出來、郵便局なども置かれて、餘程文明化したさうだ。

私は汽車の窓から、遙に東方の山々を望み乍ら、其山奥の有樣を色々と想像して見たりした。機會があつたら、是非實地に探究して見たいと思つてゐる。

此の有佐驛の直ぐ七八町西に印鑰明神といふ社があつて、其處の境内の鏡の池は古歌にも詠まれてゐる名所だと聞いたが、下りて見る氣にも成らなかつた。

松橋まで行く間の右は殆ど丘陵の連續で、左には又水田が無意味に續いてゐる。それが、松橋を過ぎると、段々地形が變つて來て、宇土近く成ると、汽車は兩方から丘陵に迫られて狹隘を通つて行く。

宇土は一寸繁華な町だ。小西行長が居たと云ふ城址や、爲朝が居たといふ城址などが、附近に

ある。安德天皇の御陵だといふ天皇塚などと云ふものもある。

斯ういふ僻陬に似合はない歷史の古い所で、宇土城なんかも、最初は中關白道隆の築いたものだと云はれてゐる。又、町の西方轟村の大字神馬には、和銅年間の創設だといふ古社三の宮神社がある。三の宮といふのは春日●八幡●住吉の三神を合祀したもので、古來附近村民の崇敬する所であつたが、小西行長が天主教の[illegible]に從つて、所謂偶像破壞の手をこゝに伸ばした爲め、一たび破却されて了つたのを、其後加藤氏が再建したのである。

三宮を祠つた社がある事は此邊の特徵で、松橋の南方有佐驛附近にある宮ノ原にも、三の宮妙見といふのがある。此方は應保年中、平盛俊が勸請したもので、其本源は宮地村の妙見祠だと云はれてゐる。

宇土の西方約一里半には、又、粟島大明神を祠つた社がある。此邊の神社や佛刹は只平板に見て行けば、それ迄であるが、仔細に觀察して行くと、九州といふ外國的情調に富んだ所だけに餘程特殊なものがある。これは後で聞いた話だが、例の宮ノ原附近の早尾といふ村には、大王廟といふのがあつて、そこにある男女の神像は、著しく大陸的のものだと云ふ話だ。

宇土からは、宇土半島の外側を傳つて、三角まで行く三角線が分岐してゐる。住吉・網田・赤瀬など云ふ小驛が其中間にある。

車中からは絶えず有明の海が見えて、其の向ふには、島原半島の温泉が嶽が、美しい姿を、氣持よくコバルトに晴れた空に示してゐる。中腹から少し上には、まるで畫に書いたやうに、白い雲が、ふわ〳〵と浮いてゐる。

住吉で下りて、海岸まで行くと、歌枕として名高い宇土の小島や風流島などが直ぐ前に見えて緣川の吐口が、それと見渡される。『肥後の國宇土の内なる裸島きたれる波や衣なるらん』といふ宗祇の歌が、思はず口へ出て來る。

こゝの海濱には攝津の住吉から勸請したといふ住吉神社がある。

赤瀬の風光も一寸捨てられない趣がある。線路が海岸を離れてこれから山へかゝらうといふ入口にある小驛で、附近には、赤瀬の鑛泉といふのがある。こゝから終點の三角驛までは四哩足らずしか無い。

三角驛と云つても、本當の三角港からは、廿町程も東南に離れてゐる所で、實は際崎といふ所である。

寺島だの茶臼島だの、塔崎だのと云ふ小さな島が前の海には幾許もあつて、其向ふには、大矢野・千束の島々が、山脚を海中に引いて、遠く天草諸島に連つてゐる。

三角の鼻まで出ると、天草の翠巒が南に見え、北には島原の温泉が隱す所無く見えて、眞に肥州第一絶勝の觀がある。

天草へはこゝから舟で行くので、近海周遊船と云ふのに乘ると、島原から本渡・富岡・牛深の何れへでも自由に行く事が出來る。

本渡の瀨戸も富岡も、景色のいゝ所として聞こえてゐる。德川氏の大勢力に反抗して早くから全島民が基督教の熱烈な信者に成つた所だけあつて、家屋の構造から風俗までが、外國情調を含んで居るのも面白い。色々な殉教者のロマンスが、思ひも寄らない老人の口から語り出されるので、初めて行つた學生などは、意外に驚くさうだ。

こゝへ基督教が入つて行つたのは、小西行長が宇土から侵略の手を伸ばしてからで、それまでは全島の人が皆純眞な漁民ばかりだつた。天主の爲には熱火の中をも辭さないといふ强固な犧牲

的精神も、全く此の純眞から來てゐるのだ。

天草女が醜業婦と成つて常に海外發展の先驅をしてゐるといふ事實は、よく新聞や雜誌の記事などで見る事だが、其裏面には確に天草人が其祖先から遺傳された基督教的世界的の意識が、潛在的に働いて居る爲ぢやないかと思はれる。

小西行長が天主教を信奉してゐて、それと始終仲の悪かつたと云ふ隣國の加藤清正が、法華宗の熱烈な信者だつたといふのも面白いコントラストだ。

天草列島と其東陸八代郡との間に、有名な不知火海で、毎年陰暦八月一日の曉頃此邊の海上に不思議の陰火が現れる。其の正體が知れないから不知火と云ふのだ。火の國といふ名もそれから來てゐる。此の不知火の出現は歴史上隨分古いものらしいが、科學全盛の今日に成つても、それが依然として不知火だから不思議だ。普通には海中に浮游する微生物の發光だといふが、橘南谿の紀行によると、『其火の色皆赤く、提灯の火を遠く望むが如し』とあるによつて、遠藤理學博士は、それが決して燐光でなく漁火であるといふ說を採つてゐられる。

不知火を觀る場所としては、宇土の裏山、不知火村の香良などが算へられてゐる。香良といふ

のは、宇土の次驛松橋の直ぐ傍で、昔は不知火見物の人で、此邊の夜間の賑ひつたら大したものだつたといふ。夜暗を幸に戯れ合ふ男女があつたり、酒など飲んで藝盡しをやつたり、今でも隨分騷々しいものらしい。

宇土から更に本線を北へ辿ると、綠川の鐵橋があつて、それを渡つた直ぐ右には、川尻の町の瓦甍の日に輝いてゐるのが見える。此邊から北は高瀨南は松橋あたりへかけては、例の十年戰爭の時に可なり猛烈な決勝戰が行はれた所で、到る所の地名が、其當時を想出させる。宇土・川尻・熊本・植木・田原城、斯う數へ上げただけでも、血みどろに成つた薩軍の兵士や、聯隊旗を押立て、行進する官軍の部隊の有樣が目の前に浮んで見えるやうだ。

薩軍が熊本城を包圍した時は、こゝに司令部を置いて、北は田原坂の險によつて敵の救援軍の前進を阻止し、南は松橋で後方聯絡を取つて、城の攻陷に其全力を盡してゐたが、官軍の別働部隊が、長崎から潛行して急に日奈久に上陸し、薩軍の後方を脅威するに及んで形勢は一變した。官軍の此の方略は、今から考へて見ても、立派に成功した牽制運動だつた。それで、薩軍はどうしても軍の主力を分つて、急に大部隊を南行させなければ成らなかつた。南州翁も桐野も確に立

派な大將だつたには相違ないが、一般方略は斯ういふ風に、いつでも官軍の方がすぐれてゐた。初めから終まで薩軍は先手を打たれてゐる。

確に薩軍は天險を利用する事には巧だつたが、それでも勝續けたのはホンの最初だけだ。愈々主力と主力との對抗戰に成つては、絶えずヂリヂリと後退ばかり續けて、華々しい攻勢作戰に出る事が出來なかつた。そして段々四方に敵を受けるやうに成つた。

斯ういふ風に攻守地を變へるやうに成つては、天險なんていふものは却つて軍の行動を妨げるばかりで、退却にも前進にも都合が悪い。敏活な内線作戰をする自由なんかテンでない。私は熊本城の占領に失敗した薩軍が竟に失敗に終つたのは、決して偶然でないと思ふ。

宇土から此の川尻を經て熊本に到る線の左右は、所謂熊本平野で、こゝから目を東北に放つと世界無比の壯觀を持つた標式的二重活火山阿蘇の高く黑煙を中天に噴いてゐる姿が、遠く野の果に望まれる。

川尻で下りると、線路の在方外城町に、中世川尻氏の居た川尻城址があり、東南約半里の元三村には弘安年中龜山帝の勅願に依つて寒岩和尚が開創したといふ禪刹大慈寺が、昔の俤は無い

乍らも、微に殘つて居るのだつたが、阿蘇の壯觀を目前に見た私は、只もう其方に氣をとられて、汽車が熊本に着くと、急いで宮地輕便線に乘換へた。

阿蘇火山

阿蘇へ行く宮地輕便線は、熊本から東へ、白川の溪谷と略並行して、阿蘇火山の北麓宮地村まで行つてゐる。線の左右は所謂阿蘇の裾野で、西方は遠く有明海まで、南は下益城・宇土兩郡の北境あたりまで、一面に廣々とした水田が續き、白川・菊池川・緣川が、其間を三段に横つて、白く流れてゐる。

線路に近く、ちよい〳〵と丘陵があるが、視界を妨げる程のものは一つもない。窓からは絕えず阿蘇の噴煙が黑く見えてゐて、これから阿蘇へ行くのだと云ふ觀念を確實にさせる。

熊本を出てから最初に停るのは春竹といふ驛だ。西南役の時に官・薩兩軍が激戰した御船山が其東南約二里にある。御船城址も其附近にある。こゝまでは御船綿道が、田迎・中ノ瀨・餘・上島・六嘉・小坂村などと云ふ所を過ぎて通じてゐる。

春竹の次には水前寺の驛がある。有名な細川家の庭園、水前寺のお茶屋がある所で、泉石の布

置極めて巧妙を極めた園內には綺麗な淸水が滾々と湧出してゐる。こゝの水が流れて落ちてゐる所は、これ亦好景の地を以て稱せられる畫圖湖で、驛から其處までは一里ある。

よく熊本へ行つた人が土產に持つて歸る水前寺と云ふ海苔は、こゝの特產で、重に水前寺川の中で取れるのださうだ。

水前寺驛から、宮本武藏の墓が其附近に在ると云ふ龍田口驛を過ぎると、三里木といふ小い驛があつて、其次はもう阿蘇山口の大津町である。

汽車が停ると、嵐氣が急に冷々と襲うて來て、いよいよこれから山へ入るのだといふ心持が强く緊張する。周圍の峰には雲が靜に去來して、日が其度に陰つたり、赤々と照らしたりしてゐる。十年役の戰跡が此邊にも在るさうだ。

中瀨田を通つて立野まで來ると、此邊では白川の溪谷が餘程近く成つてゐて、北東から來た黑川がこゝで合流してゐる。

北を見ると薩軍がこゝに據つて、東北方面からする官軍の前進を拒守した二重峠が峙ち、南には俵山が聳えて、外輪山の西壁を成してゐる。

此驛の直ぐ東南はもう南郷谷火口原の入口で、白川火口瀬の沿岸に近く、戸下・椎ノ木の温泉がある。そこを通つて喜多と云ふ小い村まで行くと、其處から嶮峻な攀路が開かれてゐて、地獄瀧だの湯の谷だのといふ温泉が可なり上つた山腹に噴出してゐる。これから上は、ゴロゴロした焼石ばかりの無毛帶で、段々上つて行くと、右には烏帽子嶽、左には杵島嶽の一口丘が峙ち、西には濛々たる煙の彼方に、中嶽・高嶽の峻峭な姿が見える。

今盛に噴煙してゐるのは、中嶽の新噴火口で、凄じい煙が所謂冲天の勢で上つてゐる。雷鳴とも砲聲とも何とも名狀の出來ない轟々たる鳴動が、氣味の惡い一種の地響きをさせて、絶えず聞こえてゐる。

阿蘇五嶽といふのは、此の中嶽と、之を中心にして四周に峙立してゐる高嶽・杵島嶽・烏帽子嶽・根子嶽とを併稱したもので、其南北には阿蘇・南郷の二火口原が開け、更に其四周に、鞍ケ嶽・二重峠・俵山・冠嶽・大矢山等の外輪山が環狀を成して圍繞してゐる。

最高峰は、中嶽と相並んでゐる高嶽で、標高五千五百尺、中嶽と共に熔岩及集塊岩の累層より成り、鋸齒狀の奇峰根子嶽は更に其東を壓して聳えて居る。

輕便軌道の線路は、立野から更に赤水・内の牧・坊中を通つて、宮地町まで來てゐるが、宮地から登ると、ちやうど此の根子嶽の傍を、比較的樂な道を取つて登つて來られる事に成つてゐる。今まで此の輕便線が出來るまでは大抵皆道の遠いのを厭つて立野から登つたものだといふが、宮地から登るのが順路でもあり、又道が樂なのだから、今では立野から登る人は殆ど無いと云つてもいゝ位に減つた。

此頃では寧ろ、宮地から登つて、噴火口を見て、それから山中の温泉を見乍ら立野へ下りて行くと云ふのが、一番悧口な行動らしい。

此の宮地町から、坊中、内ノ牧町などのある所は所謂阿蘇谷の嶽北火口原地帶で、宮地町には二千年來の古い歴史を持つてゐる官幣大社阿蘇神社がある。桓武天皇時代の皇宮の制に模して構築したと云ふ古雅な樓門がそこに立つて居る。

町の感じも何處かオツトリした古雅な所がある。阿蘇神社の祭官阿蘇氏の祖宗が、こゝに本據を占めたのは景行天皇の朝で、南北朝時代には、阿蘇神宮の大宮司たると共に、九州地方の大豪族と成り、南朝の忠臣菊池氏と婚緣を通じて、大に南朝の爲に盡した。

菊池氏の本據にしてゐた隈府は、此の阿蘇谷を西へ出離れて、大津町から北へ通じた路を、四五里も進んだ所にある。こゝには菊池武時以下五世の忠魂を祭つた別格官幣社菊池神社が、舊城址の中にある。附近の正觀寺と云ふ寺の域内には、武光・武政・武國の墓も殘つてゐる。

正觀寺は實に興國五年菊池武光が建立した禪刹で、熊耳山と號してゐる。殿堂の宏壯稀に見る所だつたといふが、其後兵燹に罹つて燒失し、今のは寛永年中の再建だといふ。

此外にも隈府の町には、菊池氏の遺蹟が澤山殘つてゐる。菊池氏の正統が絶滅してからは、姻族たる關係で大宮司家の惟長が菊池氏の社稷を繼いだり、臣藉にある赤星隈部の二氏が交々こゝの城主に成つたりしたが、天正十五年佐々成政の包圍を受けて、隈部氏が敗退してからは、全く廢城に成つて了つた。

菊池氏の絶滅――そして其後に於ける阿蘇氏と菊池の庶流託摩氏との確執、私は山の奥から遙に隈府の町の光景を思ひ浮べ乍ら、靜に山を下りて行つた。

凄じい噴火口の鳴動は、山を半以上下りて來てからもまだ聞こえるやうな氣がした。振返つて見ると、噴煙は天を蔽うて黑く黑く上つてゐる。

私はそこで道傍の茶店へ入つた。

私より先に、今阿蘇から歸つて來たと云ふ一高の學生が休んでゐて、私を見ると、

『貴君も阿蘇からですか』

と先方で聲を懸けた。非常に親昵性を持つた愉快な青年だつた。來年は福岡へ歸つて、そこの醫科大學へ入るのだと云つて居た。

『阿蘇は面白い所ですよ。私はあそこの温泉の氣分が好きで、殆ど毎年行くんです。昔ながらの山の湯と云ふ感じのする所ですよ。春なんか、其邊の樵夫のやうな人が、通りすがりに、櫻の花を持つた儘で入つて來たりします。夜遲くまで獨で入つてゐると、山の大蛇が美しい女に化けて入つて來て、生血を吸うて殺して了ふと云ふ傳說があつて、日が暮れかけると、そこの上の觀音の窟に、自然と灯が點るのが、早く歸れと云ふ觀音樣のお告げだと云つて、日の暮近くなると皆急いで歸つて了ひます』

と、其時私は其青年に阿蘇の隱れた傳說を聞いて、非常に面白いと思つた。そして今では阿蘇の話が出ると、いつも其れを思ひ出すのだつた。

熊本から鳥栖まで

私は又熊本まで歸つて來た。

熊本の町の第一印象は賑かな市街と云ふ一句で盡きる。土地の人に言はせると、熊本が今の樣に繁華な町に成つたのは細川氏の移封後だと云ふが、私達異邦人の頭腦には、熊本城だの、本妙寺だのといふ加藤氏の遺蹟ばかりが、先入主に成つてこびりついてゐて、細川藩の熊本と云ふよりも寧ろ加藤清正の熊本と云ふ感じがする。

大抵の旅人が、熊本へ來て第一に觀に行くのは矢張り熊本城ださうだ。

熊本城は今第六師團の司令部に成つてゐる。大抵の城が、今では皆廢城に成つて、中には全く破壞し盡したものもある中で、加藤氏の築いた名古屋城と此の熊本城とが、兎に角昔の壯觀を想像され得る程度で殘つて居るのは、無論偶然ではあるだらうが、面白い事實である。

歷史科の教員をしてゐる私の友人が、盛に清正の古武士的な生一本の人格を賞揚した後で、

『熊本城は全く天下の名城だと思ふねえ、アノ西鄕の軍が段山と花岡山とに砲兵陣地を敷いて、味方の歩兵の掩護射擊といふよりも寧ろ城廓を破碎する目的で、猛烈な嗽射を加へたに拘はらず、二ヶ月もかゝつて、竟に其目的を達しなかつたといふのは、城將の意志の强固といふ事もあるだらうが、確に城廓の堅牢を裏書するもんだ。陸軍大學の學生なんかに聞いて見ても、熊本の城堡は確に近代的の築城法に適つて居ると云ふよ』

と、さう云つたのを聞いた事がある。

天守閣は、薩軍の例の猛射の爲めに、無數の砲彈を受けて到頭破壞されて了つたが、石垣は殆ど全部舊態を保つて居るし、宇土櫓、多聞長屋などは、スッカリ其儘殘つてゐる。大阪城程慘めな破壞を受けて居ない。

寫眞に殘つてゐる舊態を觀ても、大體の感じが分る通り、決して壯麗な城ではないが、確に整備した城だ。城壘構築の目的が若し防守にあるものとしたら、此の熊本城の如きは、確に理想的の城と云つて可からう。人工的の城濠を掘鑿しないで、坪井川と白川とを其儘城濠に代用して、特に壘を高くしたと云ふ事も、頗る勞力經濟の原理に適つて居る。

清正は、今から見れば小西行長などに比して幾分頭脳の古い武道一點張の人格が想像される人だが、九州人の公に對する崇敬の度は頗る深いもので、公の遺骸を葬つた花岡村の本妙寺には、熱烈な篤信者が毎日陸續として、東から西から參詣の爲に集つて來る。春と秋との彼岸には、堂の内外が參詣者で身動きも成らない位ギッシリつまつて、一同が口々に唱へる題目の聲が、一里先からも聞こえるさうだ。

別に清正の靈を神として祠つた加藤神社といふのが、城の北方にある。其外に神社としては毎年の大祭に百騎武者が出るので名高い藤崎神社、寺としては、蓮臺寺、泰勝寺などがある。

熊本を出ると、汽車は城の外廓を通つて上熊本に着く。こゝはもう熊本の北外れで、此驛の直ぐ傍からは、菊池神社のある隈府まで行く菊池軌道が通じてゐる外に、北千反畑・水前寺紀念碑などへ行く大日本軌道の線が通じて居るし、又、熊本驛の附近、市街の南端からは田崎・高野邊田などといふ坪井川沿岸の村々を通つて、河口に近い百貫石まで熊本軌道が通じて居る。百貫港は、町としては小い町だが、細川氏の時には、熊本の海門だつた所で、附近には鹿子木親俊の據守してゐた古城址がある。

菊地軌道に乘つて行くと、隈府までは二時間强で着く。此の隈府の町から西北に通じた國道を二里程行くと、來民といふ小さい町があつて、そこを通り越すと、間もなく山鹿町の瓦甍が見え始める。

來民は俗に山鹿新町といふ所で、有名な山鹿團扇はこゝで出來る。來民から山鹿までは一里しかない。こゝの山鹿神宮の燈籠祭は、有名なもので、祭の晩には、各種の形をした思ひ〳〵の燈籠が、家々の軒に意匠を競うて揭げられる。大規模なのは高き一丈以上に達するのもある。

祭のあるのは、舊曆七月十六日で、其晩の賑ひつたら大したものだ。元來が此の町は溫泉の爲に發達した土地で、龍ノ湯だの松の湯だのといふ溫泉が、あつちこつちに散在してゐる、其溫泉へ入りに來る浴客は、一年平均十萬人と云はれてゐるが、其大勢の浴客は勿論、住民までが我れ一にと出るのだから、其騷ぎつたらない。

町は何處も彼處も、燈籠の光で晝間のやうに明るくつて、それが湯の煙で時折ボーッと朧にんで見えるのが、まるで春の夜のやうな氣分である。昔から此の燈籠が暗い年は、きつと何か凶い事があるといふ口碑があるので、町民は、一所懸命に火を明るくする事に努力するのだ。

山鹿神社の外には、弘法大師の開基だといふ有名の大刹金剛乘寺がある。

山鹿は、西南の役に官薩兩軍が激戰した所で、高瀨の第一防禦線を、官軍の猛烈なる攻擊によつて突破された薩軍は、此の山鹿と西南植木とを連ねる第二線に退いて、極力防戰した。

有名な田原阪の決勝戰は、此時に行はれたもので、薩軍は高瀨から前進して來る官軍を、其邊一帶に連なる丘陵や松林の掩蔽物を利用して、非常に惱ました。

此時の兩軍の死傷は隨分大したもので、官軍の攻擊が決死的强襲の性質を帶びて居たゞけに、戰場の光景は實に慘憺を極めた。附近の丘陵は、凡て累々たる死屍で蔽はれて、其中には刀を杖に、片息に成つて喘いで居る重傷者も交つて居た。

例の西南戰史には、其場の光景が面白く叙述してある。

鹿兒島本線の列車は、ちやうど此の激戰區域を左右に見て、植木から木葉・高瀨と進んで行つて居る。例の篠原國幹が戰死した所だといふ吉次越も線路の左に見える。

植木からは長浦・山本橋・豐田・平島を通つて宮原まで鹿本鐵道が通じてゐる。

此邊は由緒のある名祠の多い所で、植木驛の附近には、菱形八幡宮、杵築明神社があり、高瀨

の附近正石野には、肥後國式内四社の一と云はれた正野神社がある。

高瀨は菊地川の右岸で、十年の役に、三好少將軍が薩軍の第一線をこゝで破つてからは、官軍の高等司令部が、久しく置かれて居た。寶成就寺だの、願行寺だのといふ名刹が附近にある。

溫泉も澤山ある。商業都市としても可なり重要な所で、北肥諸郡の物資は凡てこゝから移出されてゐる。

高瀨驛を出ると、汽車は段々海岸に向つて西進して行く。筒ケ嶽だの觀音岳だのといふ山々の姿が、視界から沒して了ふと、今度は左に有明海が見えて來る。車窓から首を出して振返ると、溫泉の露な姿が見えてゐる。そして其前を、赤々とした日に照らされた白帆が靜に夢の如く動いてゐる。

長洲といふ驛は、ちやうど其明媚な風光を前にした海岸に近く設けられてゐる。こゝからは島原半島へ行く便船が出る。

景行天皇が御西征の時に、地方民が腹赤の贄を獻じた行宮の址が、此の長洲の濱の南方腹赤村に遺つてゐる。

長洲から萬田炭坑のある萬田を通越すと、次は九州の産炭地として有名な三池炭鑛を其附近に持つた大牟田驛である。

此邊へ來ると、まるで汽車が炭山の中へ入り込んだやうな氣がして、依然として海邊の線を走つて居乍ら、些とも清明な感じがない。停車場も築港も、凡てが炭山の爲に設備されてゐて、そして炭山の爲に倍々文明化されて行つてゐる。

單に停車場や築港ばかりでない、三池郡といふ貧弱な郡や人口と云つても僅二千か三千に足りなかつた大牟田町が、今日の富裕を來し繁華を招いたのは、皆此の大牟田を吐口とする三池炭坑の偉大な力である。

窓から覗くと到る所に林立してゐる大煙突からは、濛々たる黑煙が止間もなく立騰つて、旺盛な工業市の生産力を語つてゐる。

豐州炭！三池炭！全九州の地下に廣く根を張つてゐる炭鑛脈は、實に盡きざる九州の寶庫であると共に、其熾烈な活動力の原素である。

大牟田を出て、渡瀨といふ小驛を過ぎると、矢部川といふこれも小さな驛が、矢部川の沿岸に

近くある。こゝからは矢部川の兩岸に跨つた瀨高の町を越えて柳河に行く道が續いてゐる。柳河軌道が、其間を運轉してゐる。

柳河は立花氏十三萬石の舊城下で、暗い感じはあるが、筑後の内でも相當に古い歴史を持つた富裕な町だ。沖端川に臨んで、ズラリと舊家らしい白壁の家が列んで居る。南部にある日吉神社八幡神社などは、隨分古い緣起を持つてゐる。眞勝寺、福厳寺などいふ寺もある。

柳河からは又別に大川鐵道が榎津を通つて若津まで行つて、そこから又筑後河の沿岸を上久留米まで通じてゐる。

そして榎津からは別に羽犬塚驛に通ずる三潴鐵道がある。

榎津と若津とは此邊での繁華な町で、若津港は河港ではあるが、殊に肥筑の咽喉を扼する商業都市として重んぜられてゐる。

榎津の北部酒見村には、風浪神を祭つた風浪神社がある。今の社殿は永祿の再建、慶長の改修であるが、可なり由緒の古い宮で、其創建は遠く阿蘇連の時代だと傳へられてゐる。

羽犬塚の近くには、奇景を以て有名な日向神岩がある。

矢部川の溪谷を、九里程奥へ入つた所で、其處へ行く迄には、福島だの黒木だのと云ふ町がある。黒木を出外れると、道が段々細く成つて、大淵村の湯ノ瀬といふ所から奥へ入ると、其處からがもう日向神の神域に成つてゐる。此邊には、天然の奇工に成る大岩石が、兩岸に近く峙つてゐて、歩々に轉變する奇景は、寧ろ耶馬溪以上と云はれてゐる。

奥日向迄行くと、奇景は倍々奇景を加へて、見上げるやうな大岩石の中央に、大きな穴のあいてゐるのがあつたりする。有名な蹴破岩と云ふのがそれで、土地の人は、日向大神がお蹴破りに成つた穴の跡だと云つてゐる。

こゝから更に矢部の溪谷を離れて北へ行くと、御前嶽の南麓に御側といふ所がある。喬木林の中にある陰濕な谿谷で、こゝに後征西將軍良成親王の御陵墓がある。

菊池氏の勢力の凋衰、それがやがて九州に於ける南朝勢力の終滅になつて親王はこんな山谷の中で御薨去に成つたのだつた。懐良親王といひ、良成親王といひ、そして菊池一族といひ、最後まで南朝の爲に奮闘し乍ら、遂に賊勢を壓倒して、征旗を東に旋す事の出來なかつたのは、今思ふて見ても、實に遺憾な事である。

菊池氏と共に、此の兩親王を奉じて、五條氏が累代忠節を盡した矢部山城址も其附近にある。

こゝから元來た道を黒木町へ引返す迄の北方、笠原村の鹿子尾といふ所には奇形の陽石があるので名高い大瑞山靈巖寺がある。福島町の北方、久留米道の長峰村吉田といふ所にある岩戸山の古塚も有名なものだ。繼體天皇時代に此邊から廣く兩肥、兩豐の各地方までを專占して、富强を誇つて居た筑紫君磐井といふ者の壽塚で、其附近には當時其塚墓の四面を周つて配置してあつた石人や石盾、石馬などが殘つてゐる。大きさは大抵實物通りで、それが皆戴冠拱手の支那式形態を帶びて居る所は注意すべき事實である。

田中吉政が福島築城の時に運んで行つたので、今は原場に一つか二つ位しか殘つてゐないが、昔は今福から一條あたりへかけて、これが無數にあつたもので、今尚俗に此邊の地名を人形ケ原と稱してゐる。

こゝから南方福島までは一里足らずで、黒木から山内、山内から此の福島を經由し、羽犬塚驛の直ぐ近くまで、黒木・南筑の兩軌道が聯絡してゐる。

幹線はこゝから、更に又筑後平野を北に横つて、久留米に通じてゐる。荒木といふ小さな停車

場が其間にある、こゝらでは、もと肥後境の山々はズッと遠く成つて、新に高良山脈が眼界に現れて來てゐる。其高良山脈が近く東を塞ぎ、筑後川の流が西に迫つてゐる狹窄地域の咽喉に久留米の町がある。

久留米は有馬氏の城下に成つてから發展した町だ。東京、蠣殼町の有馬邸内にある水天宮の本家がこゝに在る。東京では專ら安産の神、水難除の神として信ぜられてゐるが、其祭神が西海の底に沈ませられた安德天皇、建禮門院及び二位局時子であることは、餘り知つてゐる人が多く無いやうだ。

建禮門院の侍女だつた按察使局が最初今の梅林寺山に祀つたのを、後世轉々して、遂に現在の場所に遷座したもので、今の社殿は、市街の北邊筑後川の河畔に在る。

筑後川は、如何にも大河らしい河だ。筑紫次郎といふ名も私は好きだ。此河畔の地は古來兵家が陣地として屢々激しい爭奪をした所で、菊地武光も正平十四年に少貳頼尙とこゝで奮戰してゐる。有名な頼山陽の『勤王諸將前後歿、西陲僅存臣武光』といふ詩は、山陽がこゝへ來て船で此の河を下る時に作つたものだ。

停車場のある所から北へ八丁程行つて、篠山神社のある久留米城址の山へ上ると、此邊の地勢が、一目に見渡される。櫻の木が澤山植わつてゐる。東を見ると、高良・明星の二山を西端にそれから奥へ長く屏風山が續いて行つてるのも、よく見える。

高良山へ登ると一層其展望區域が大きく成つて、筑後河流域の左右に開けた肥筑平野が殆んど其全約を眼界に示してゐる。近く遠く點在してゐる町々村々が、彼の町、此の村と明かに指點せられる。

史家の喧傳する神籠石で其後方を圍まれてゐる國幣中社高良玉垂神社が其處に在る。所謂筑後四座の古社の隨一で、玉垂命を首座に八幡・住吉の二神を之に配してある。

此山の西麓にある豐比咩神社も、筑後四座名神大社の一で、天長四年に伊勢から遷座したものだと云はれてゐる。

玉垂神社のある所から、久留米驛までは一里半程しかない。古國府の所在地だつたといふ御井町が、直ぐ其東北麓にある。國分寺のあつた所も、國分村といふ名前に成つて殘つてゐる。

此の國分村を出外れて、廣い十字路を北へ取つて行くと、道は自然に久留米市の南端に導かれ

て居る。

日吉町といふのが其取附にあつて、そこから螢川町を北へ拔けると、澤山寺ばかり列んでゐる町の北端遍照院と云ふ寺に、寛政の志士高山彦九郎の墓がある。慷慨悲憤、到る處に志を得ないで、殆ど一生放浪生活を送つてゐた老志士は、自分の生れた上州から遠くこゝまで來て、仙鄕の土と成つてゐる。菅茶山の『周遊空使英雄老』と云ふ詩を讀むと、感傷的な私なんかはもう胸が一パイに成つて、涙がにじんで來る。

此邊から町を東へ拔けると、其處からズッと豆田街道が通じて居る。

此の街道と殆ど相並行して筑後軌道が停車場前から豆田まで行つてゐる。其中間に田主丸・吉井など云ふ一寸した町があつて、田主丸から北方山間の秋月町まで兩筑軌道が、石炭輸送を殆ど其主目的にして通じてゐる。

秋月は黑田氏が支封を置いた所で、古くはこゝに秋月氏が據守してゐた。城址は町の東北方古所山といふ所にある。

秋月から甘木を通つて、田主丸から筑後軌道に乘換へて行くと、線路は段々筑後河の谿谷に沿

うて秋は櫨紅葉の美しい山の中を進んで行くやうに成つてゐる。

虹峠あたりは、此線路での一等深い山の中で、其處から長溪・加々鶴を通つて、川下あたりへ來ると、視界が急に開けて、筑後川の上流、日田・三隈二川の流域から成つた日田盆地が、眼の前に現れて來る。

日田は其盆地の中心を占めて居る町で、豆田・隈などいふ町がある。此邊から見ると、美しい璃瑠色を湛へた隈川の向ふに、寶珠山一帶の丘陵の續いてゐるのが見える。

寶珠山村は日田から三里もあらうか、地形は豐後に屬してゐるが、其處は筑前朝倉郡の東南偏で、其處の岩屋山には彦山の母神たといふ三社大權現の社がある。境内は全く岩山で、奇勝恰も唐畫の山水に對するが如しと云はれてゐる。

澄郡の土地にも拘らず、昔から幕府の直轄領として、比較的進んだ文化に浴して居た所で、廣瀨淡窓や五岳などが生れてゐる土地のせいか、町の感じにも、住民から受ける感じにも、何處となくオットリした所がある。

こゝから東へ大分街道を大分縣の玖珠郡へ入つて、塚脇といふ町から北へ折れると、そこには

森町がある。

森町は、東を崩平山・平家山・伏魔岳に、西を萬年山・月出山岳に、南を久住山黛の連峰に、北を高波・中尾の諸山に圍まれた所謂玖珠第三紀層盆地の中央に開けた小平野にある村で、此邊からは盛に淡水魚類の化石や腐葉の炭化したものが出る所から、昔は此邊一帶が森漫たる大湖水であつたらうと云ふ地質學上の觀察が下されて居る。

こゝから山移川の溪谷を傳つて、所謂新耶馬溪の方へ裏から入つて行くと、中津から入つて來るのとは違つた怪奇な景色が見られると云ふ事だ。

然し私の行つた時は、日田で一晩泊つて、其處から又元の久留米へ歸つて來た。そして急いで幹線へ乘換へて、筑後川の大鐵橋を渡つて行つた。

鳥栖といふ驛が其次にある。

こゝからは長崎線が、西へ岐れて行つてゐる。

長崎線の沿線

鳥栖から長崎本線に乘換へて行くと、汽車は筑後川の右岸に開けた沃野の中を右に近く背振山脈の諸山を見乍ら進んで行く。

中原と云ふ驛は、山裾に設けられた小驛で、其次に神崎驛がある。素麺がこゝの名物だ。名所としては直ぐ停車場の近くに櫛田神社・仁比山山王社がある。こゝで下りて背振山迄登ると、其山腹に神功皇后の創建だといふ古社背布利神社がある。中世まではこゝに東門寺といふ供僧坊があつて、僧坊千餘の巨刹であつたといふが、今は全く廢絶に歸してゐる。

此の背振山の絶頂は、所謂國見岳の高峰で、そこまで上ると、近くは有明の海から、遠くは朝鮮までが一目に見えるさうだ。

鐵道院の案内記には、神崎驛附近の名所として、『蓮池公園、南二里』と書いてあるが、其蓮池といふ町は、汽車の窓からでも好く見える。神崎を少し出離れて、左に見える一廓の部落が、さ

うだ。

今公園に成つてゐるのは、元の蓮池城址で、德川時代にはこゝが鍋島氏五萬石の城下に成つてゐた。公園には藩祖を祭つた蓮池神社がある。

やがて間もなく佐賀の町が、鐵路の左に見え出して來る。

佐賀の停車場は、町の大きいのに似合はない小さなものだつた。川上軌道と、佐賀軌道の接續點で、佐賀軌道は驛前から神野・瓢橋・中町を通つて中小路まで行く線と、別に神野から岐れて嘉瀬河畔の都渡城まで行く線との二線に成つてゐる。

此線の三本松で下車して、西へ行くと鍋島といふ村があつて、其處には鍋島氏が亨祿時代に龍造寺軍を助けて大内氏の軍と鷲戰した古戰蹟や、日本武尊が西征の途上、蠣殼の上を踏んで御上陸に成つた地點だといふ蠣久の古村などもあると聞いたが、私は半俗用を兼ねた急ぎの旅だつたので、さう云ふ名蹟を、實地に踏査して廻る時間の餘裕を持たなかつた。

後で聞くと、此線の通つて居る所は、上古時代に肥前の樞要區だつた所で、尼寺には國分尼寺址、惣座には國分總社址、久知井には古國府址がある外、其附近には、高城寺・玉林寺など云ふ

前者は文永、後者は元中時代に開創された古刹が、現存してゐるさうだ。そんなのなら少し位の無理をしても行つて來るのだつたにと、殘念に思つた。

市内の名所としては、明治初年の政爭悲劇の主人公江藤新平が、佐賀の亂の時に本據を置いた佐賀城址がある。燒殘つたやうな木丸の一部と、城門とがポツ然と其處に立つてゐるのが、妙に悲しい心持を起させる。其附近には鍋島藩の藩祖を祭つた松原神社が、コンモリした樟の木の森の中に在る。

外にまだ北へ二三里から五、六里も離れたら、實相院だの、古湯温泉・熊ノ川温泉だのといふ所もあると聞いたが、近い所の見物だけで切上げて、直ぐ驛から唐津線に乘つて、西唐津へ行つた。

唐津へ行く迄には、櫻の樹が澤山あるので名高い舊城址のある小城や、多久の聖廟が其附近にある蓼原や、山上憶良が國守時代に同僚と其處に遊んで、美人の海女に會つたといふ松浦川に近い嚴木や、下りて見たいと思ふ驛が幾つもあつたが、到頭最後の唐津驛まで下りないで了つた。

小城を出て、山木へ行く迄は、左右とも只もう單調な丘陵の連續で、其間に殺風景な炭山の煙

突が、幾つも立つてゐる。乘つて來る人も下りる人も、大抵黑光りのした、炭山の事務員らしい人が多い。

山本驛からは牟田部を通つて岸嶽へ行く岸岳線が岐れて行つてゐるが、これも牟田部・岸嶽の產炭を輸送する爲に出來てるやうな鐵道で、態々行つて見るやうな所も無い。

山本を出てやがて松浦川が右の窓から見え出して來ると、間も無く唐津の町の人家が、顏を出し初める。

時計を見ると、佐賀を出てからまだ二時間餘りしか經つてゐない。

唐津は夏涼しい所だ。

私の行つたのは春で、夏の快感は味へなかつたが、春來て見ても唐津はいゝ所だと思つた。今は舞鶴公園に成つてゐる舊城址から、松浦潟一帶の海を見た感じもいゝと思つた。

松浦川の吐口に近い滿島から東へ長く虹の松原が續いて、其後に例の松浦佐用姬が外征に行く戀人狹手彥との別を惜んで領巾を振つた所だといふ領巾振山が峙つてゐるのが、そこからは一目に見える。

こゝまで來たら東松浦半島の突端呼子港まで汽船で行つて、其處から渡舟で對岸の加部島へ行つて、國幣中社田島神社に參拜して、更に豐太閤が征韓の役の時に大本營を置いた名護屋城址を是非見て來る事だ。

加部島の田島神社は、端津姬・田心姬・市杵島姬の三女神を主神として祭つた佐賀縣第一の古社で、二千年來の歷史を持つてゐる。

佐世姬神社といふのが境內にあつて、例の望夫石が其傍に置いてある。佐用姬が化して石と成つたといふ事は、支那の古傳說に胚胎した誤謬の說で、固より採るに足りないが、此の化石說の淵源が案外古いものらしいから驚く。

太閤名護屋の陣屋跡は、此の加部島と南相對した所にある。征韓の當時は、豐公の本營を中心に、諸侯の陣營が此の附近二里餘の範圍に亘つて羅布されてゐたものださうであるが、今は只一望落寞たる漁村で、本營の址だといふ所には、赤松が曲りくねつた姿で、ショボ〳〵と疎生してゐた。そして、當時無數の運送船や戰艦の充滿ちてゐたらうと想はれる海上には、二三隻の白帆が、畫のやうに浮いてゐるのが見える。

神功皇后の三韓征伐、大伴狹手彦の渡韓、豐公の征韓の役、私は此地方を最後の發船地として古來幾度か行はれた我が日本人の大陸發展の史蹟を、心の中でそれからそれへと、繪卷物のやうに繰り廣げて行つた。

其三韓も今は日本の一部と成つた。

田島神社と、名護屋の本營址とを外にしては、七個の女武岩洞が竈を列べたやうに並列して居るので古來有名な七ツ釜の名勝が呼子村の東方、土器崎にある。五六月頃の天氣のい、波の靜な時なら、西唐津から乘合舟が出るのださうだが、私の行つた時は波が高いと云ふので、其舟が出なかつた。

それで又元の汽船で、唐津まで運びかへされた。其時の旅行はそれで盡きてゐる。

佐賀から此の唐津線の方へ道寄をせずに、眞直に久保田・牛津と通つて行つたのは、別の機會だつた。何でも六月頃の初夏の頃だつたと覺えて居る。

牛津も山口も、其次の北方といふ驛も、窓に凭れて、丘陵の絕えては又續く沒趣味な景色を見

て居る中に、ついウトウトとして、夢の中に通つて了つた。

武雄は武雄溫泉が直ぐ近くにある驛として、可なり繁昌して居る。それにこゝから祐德院の稻荷へ行く祐德軌道が通じて居るので、下りて行く人が隨分ある。

武雄溫泉へも此線で行けるし、鹽田といふ所で肥前電鐵に乘換へて行けば、有名な虛空藏山麓の嬉野溫泉へも足を勞せずに行ける事に成つてゐる。武雄は此邊でも有名な溫泉で、設備も整頓してゐるが、湧出量は極めて貧弱だ。

『武雄の溫泉は、湯へ入るのが目的で無く、淫卑な氣分に浸りに行く所です。變な女が澤山居て私なんか行く氣に成れません』

と慣慨したやうな口吻で、其地方の青年が私に話した事があつた。本當の浴泉が目的なら、少し遠くつても、嬉野まで伸した方が、靜でもあり、山の湯らしい清澄な氣分が味へる。こゝは舊長崎街道の往還で、直ぐ傍を嬉野川が流れてゐる。昔の旅人はこゝから俵坂を通つて彼杵の海岸へ出て行つたものだ。こゝまで來れば、彼杵の停車場はもう直ぐ傍で、武雄から長崎へは、斜に此道を來た方が、ズッと捷徑であるが、汽車は武雄を出ると、大廻りに圓を描いて、三間坂・上

有田●有田●三河内●早岐●南風崎の六驛を通つて、初めて彼杵へ着く事に成つてゐる。そして其間には、線路の左右に、丘陵が斷えては又續いてゐる。

有田は有田燒の陶器の產地として知られた所だ。こゝから伊萬里線が北に岐れて、有田川の溪谷沿を伊萬里灣の南岸にある伊萬里の町まで行つてゐる。

伊萬里も產陶地として古來有名な所で、其名の聞こえてる點に於ては、寧ろ有田以上であるが其實伊萬里燒と云はれた陶器は、有田の產陶を伊萬里港から內地の各港へ移出した爲めの名で、本場は却つて有田の方にあるのだ。

伊萬里三方に山を控えて、然も前には鮮魚に富んだ伊萬里灣を持つてゐる。大坪川や有田川が市街を貫流したり、直ぐ傍を流れたりしてゐる。町並も立派で、如何にも肥前有數の大邑だといふ感じがする所だ。

有田川溪谷の西は、烏帽子●國見●西岳等から成る國見山脈で、有田から出て長崎へ行く本線はちやうど此の山脈の東南の裾を通つて、早岐まで行つて、其處から又更に佐世保軍港へ行く佐世保線を分岐してゐる。

佐世保へは、早岐から三十分足らずで直ぐに行ける。三方から山が近く迫つて、僅に佐世保灣の海に面した所だけが開けて居る狹隘な土地に、佐世保の町は、窮窟さうに其手足を伸ばして居る。明治十九年に鎭守府が置かれるまでは、寂寞たる一漁村に過ぎなかつたのが、段々繁榮になつて、二十七八年戰役以來、急速な發展をしたのださうだ。今では、佐世保鎭守府を中心にして常盤町だの榮町●松浦町などいふ東京の一部分をソックリ持つて來たやうな近代的の繁華な町々が、南北に連つて、人口も八萬以上に成つてゐる。例の短劍を下げた海軍將校が、目に立つて大勢往來してゐるのも、軍港らしい特殊の色彩である。

佐世保から引返して、早岐から又本線で行くと、線路は細長い早岐瀨戸を絕えず右に見て南風崎へ着く。小さな停車場だ。

そこを出て、隧道を三つ程越して、次の川棚驛へ着くまでは、汽車は全く丘陵の中ばかりを通つてゐて、直ぐ傍に、大村灣の海があり乍ら、些とも見えない事に成つてゐる。それが川棚驛を出ると、線路は直ぐ其大村灣の沿岸を海とすれ〳〵に通つて行く。右の窓から見ると、コバルト色をした綺麗な海の向ふに長崎半島の山々が見えて、直ぐ下の汀には、靜に漣が寄せてゐる。

こゝから島原線の分岐點諫早までは、後もう二驛か、三驛で、其間には、松原鑛泉に近い松原驛だの、大村侯の舊城下大村驛だのがある。

大村あたりで左を見ると、標高三千二百尺の多良嶽が、急傾斜を作つて山脚を伸ばしてゐるのが、手に取るやうに見える。五ケ原岳、經ケ岳などの山々と層重して、遠目山・郡岳が北に續いてゐる姿も、明かに仰がれる。

長崎のある邊が徑尺で行けば、もう直ぐ其處だといふのに、汽車は大村を出ると、又大迂回をして、諫早の方へ進んで行く。

諫早町はちやうど長崎半島と、島原半島とを左右に制する要關に當つてゐる。多良嶽はこゝから上るのが順路だとされてゐる。東から五里、こゝからならば四里といふのが登攀の里程で、毎年舊の卯月八日と、霜月十五日には、山上の多良嶽神社へ參る行者で、此の町が賑ふさうだ。

こゝから島原へ行くのは、島原鐵道の社線で、本諫早・小野村・森山・愛野村・山田村・古部・西郷・神代町・多比良町・大三東・三會・島原の各驛がある。ちやうど愛野驛の在るあたりが、千々岩灘と有明海とで形られてゐる頸部地峽で、愛津と云ふ小さな村が中央に在る。

温泉嶽の偉大な山容が、此邊へ來ると、殆ども裾まで見える。其山脈が、九千部山から烏甲山・吾妻山へ續いて、鉢巻山迄來ると、それが段々低く成つて來てゐる脈絡が、こゝから見ると一番明かに辿られる。

三會は龍造寺隆信が天正十二年の春に攻寄せて來て、却つて有馬・島津兩軍の猛烈な反擊を受け、海陸兩方面から夾擊されて戰死した所だ。

其時分には、有馬氏が島原の支配者だつた。有名な天草の亂が起つたのは松倉氏の時代で、大江・蘆塚等の教匪が當時二萬の兵力を以て攻圍した島原城址は、市街の東北偏に在る。

前面の海は岩礁が長く伸びてゐて、大船の碇泊には適しないが、青々した松に蔽はれた小島が幾つもあつて、高所からの眺望は一寸趣致に富んでゐる。

景色から、遠く海を隔て、肥筑の山河が畫のやうに見えるさうだ。

寛政四年に此の島原で起つた大海嘯は、隨分有名なもので、今島原鐵道の終點驛に成つてゐる島原湊といふ所などは、其時に出來たものだと聞いてゐる。

島原から半島の東岸を濱傳ひに南へ廻つて行くと、有家・大江などいふ町があつて、其最南端

に有名な口ノ津港がある。港としては島原あたりより、水深もグッと深いし、土平崎が西から延びて來て屏障に成つてるので、隨分澤山船舶が入込んで來る。島原から長崎へ行く汽船は大抵皆こゝへ寄つて行く。

『海から見ると、口ノ津つて所は、美しい所ですよ』

と、船員たちは皆さう云つてゐる。

西岸では何と云つても小濱温泉のある小濱が、一等いゝ所ださうだ。まだ行つて見た事は無いが、前には千々岩灘の波が、何とも云へない好い色に見えて、景色の勝れた點では寧ろ別府以上はと聞いてゐる。『天氣のいゝ日には、對岸の茂木あたりへペンキ塗の白い船が入つて行くのがこゝから好く見えます。茂木から山一つ向ふへ越せば、長崎は直きでございます。先生、そこには私が十三の年に別れた姉が、嫁いて行つてるのです。姉様！と、私は聲をあげて呼んで見たく成りました』と、小濱の温泉よりと肩書した手紙を、私に宛てゝよこした少女があつた。

こゝまで來れば、長崎へは船で行く方が早いのだが、陸路からは、こゝから又、元の諫早まで歸つて、其處から喜々津・大草・長與・道ノ尾・浦上と始終丘陵の下を傳つて、初めて長崎へ入る事

に成つてゐる。

長崎から受ける第一印象は廢頽の色だ。古い時代の貿易港であつたゞけに、こゝで見る外國情調は、德川末期の錦繪や繪本で見る外國情調で、何處を歩いて見ても、些とも、清新な濃淵たる色がない。

外人町なんかを歩いて居ても、何處か斯う蘇格蘭の田舍でも散歩してるやうな氣持がして、古びて苔の生へたゴッツク風の教會の壁に、蔦の葉が、一面に繁つて匍廻つてゐる上から、ノンビリした春の日が、靜に葉裏まで照込んで居るのが、譬へやうもない寂寥の感を起させる。

和蘭や西班牙・支那などの商人が、盛に入込んで、大通辭など云ふ人達と交渉して居た時分の事が、ホッカリと夢でも見て居るやうに、目の前に浮んで來る。

家屋の建築にも、餘程外國的の趣味が入り込んで居るが、それが東京や横濱あたりで見る現代的のけばけばしい色彩で無く、充分に消化され吸收されて、東洋的の趣味とシックリ融合して了つてるやうな氣がする。

和蘭を通じてこゝへ入つて來た外國思想が、どんなに深い基礎的の教養を、明治維新の革命運

動に寄與したらう。長い間の德川氏の壓迫政治を根本から覆して、明治天皇の御下に新しい自由の日本、文明の日本を建設した其の力の底には、確に蘭學で培養された新しい思潮が波をうつて流れて居る。

外國人が其進歩に驚いて居ると云ふ日本の近代醫術も、矢張和蘭から此の長崎へ輸入された物が、其最初の種子に成つて居るのだ。――それ程長崎といふ所は、我日本近代の進歩と、拔く可からざる關鍵を持つてゐる。

長崎は又、風光の美に於ても優れた所だ。此頃は五港と云ふ名數的の熟語も、餘程歴史的に成つてゐるが、其五港の神戸●横濱●函館●敦賀の何れに比べても、長崎程の絶勝は無い。

國幣中社諏訪神社の在る山か金刀毘羅神社のある立山へ登ると、長崎全港が一目に見えて、所謂三十六灣二十四勝の大半が、一々指點される。

支那風の宏壯な建築を以て知られてゐる崇福寺だの、一丈二尺の大佛を安置してある曹洞宗の大伽藍皓臺寺だの、其處に關ヶ原役の敗後石田三成が潛匿して居たといふ傳說のある臨濟宗の禪林寺だの、有名な寺の家根が、敎會堂の高い尖塔に交つて、高く瓦甍の波の中に群を拔いて見えるのも、長崎らしい現象だ。

長崎は是非一度行つて見るべき所だ。

鳥栖から小倉まで

長崎まで行つたら、説明の順序として、更に又鹿兒島本線を鳥栖まで歸つて來る事にする。

鳥栖から田代を通り越すと、汽車は筑後平野を後にして、背振山脈を左に見乍ら、段々丘陵の中へ入つて行く。田代から原田●二日市と段々北へ行くに隨つて、且丘陵が段々深みを加へて來て、線路の左右には、九州特有の櫨の木が、秋は美しい紅を濃く淡く彩つてゐる。

『此邊の櫨は大したものですよ。皆製蠟の材料にするんです。何しろ福岡縣だけでも年に百萬圓からの櫨實が獲れるんですからねえ。それでも一時蠟の相場がウンと下つた時には、もう櫨は見込が無いつてんで、ドシドシ自暴に成つて濫伐をする奴があつたので、それからつてものは昔程獲れなく成つたんださうです』

と、乘合の地方人が、さう云つた。

二日市まで來ると、線路の西に面白い格好の孤松がニョッキリと立つてゐる一寸した山が見える。これが有名な菅公天拜山の遺蹟で、其山麓に菅公自彫の像を祀つた天神祠がある。龍王の瀧だの、相生の松だのといふ名所が、其傍に在る。

天智天皇時代の創建だと傳へられる武藏寺や、古く湯の原の名を以て聞こえてゐる武藏温泉も其附近にある。

こゝから太宰府までは、二十四五丁の道程で、菅公關係の遺蹟や、太宰府が九州の上級監督官廳として、兼ねて對外關係の主務廳として廣大な權限を持つて居た時代の遺蹟か、斯う云ふ風に細い所まで算へ立て、居ると、殆ど際限も無い位、外にもまだ澤山在る。

太宰府神社へ參詣する人の爲には、二日市驛から、太宰府軌道が通じてゐる。又別に杉馬場●石櫃●甘木川●甘木●十文字●比良松なんかを通つて、豆田街道に近い恵蘇宿まで朝倉軌道が東南に走つてゐる。

停車場から太宰府町までは、十五分位で行ける。

太宰府の町は古び盡した町、寂れ盡した町だ。生氣も何も無い町だ。こゝが太宰府址だといふ石標が立つて無かつたら、誰がこゝに千有餘年前繁盛な都會があつた事を信じ得よう。崇福寺の

址だの智光寺址。原山寺址だのといふものを見ても、大抵の人達は、何の交渉も無しに早々と行つて了ふ。

菅公を祭つた官幣中社太宰府神社は太宰府址から少し東へ寄つて、二日市驛正面の國道を北東に進んで來た所に在る。そして其の後の山に玉依姫命を祀つた式内古社官幣小社竈門神社がある。昔はこゝに坊舍三百七十を有する供僧坊寶中寺があつたのださうだが、今は悉く廢滅し盡してゐる。

此の竈門神社の在る寶滿山から左へかけては一帶の山續きで、ちやうど太宰府址の直後と思ふあたりに、萬葉歌人の詠に屢々上つた大城山が聳えてゐる。

外寇防備の爲に設けられた有名な水城の址だの、御笠の森、苅萱關、觀世音寺だのといふ名所が、此外にもまだ色々あるが、スツカリそれを見盡して歸る人は滅多に無い。

大抵は太宰府神社へ參つて、それから一寸都督府の址を覗いて、『フンさうか』と云つたやうな顏をして、それだけで片づけて了ふ。

二日市から水城を通越して、次の雜餉隈で下りると、神功皇后が應神天皇をお產みに成つた所だといふので、宇美と名を附けた八幡宮がある。

博多灣の外側半島海の中道の西戸崎から、香椎驛で本線を横つて、土井・原町の町々を通つて來てゐる博多灣鐵道が、此の宇美まで通じてゐる。

雜餉隈から竹下といふ小驛を一つ經由すると、次はもう博多だ。

博多とは云ふが、直ぐ其處はもう福岡市で、福岡と博多とは、中に那珂川を隔て、隣接してゐる。博多は古く那大津と呼ばれた所で、對支貿易市場として隨分古い沿革を持つてゐると同時に邊防の要地としても、古くから認められてゐた。弘安四年の元軍來襲の時にも此の博多を目標に攻寄せて來たもので、當時の敵兵戰死者を埋葬した蒙古萬人塚といふのが、驛から西へ四里程行つた今津の海岸にある。

福岡は、博多よりもズツと後に發達した所で、古くは福崎と云つた。黑田長政の築いた城址がこゝにある。都會地としての歷史が新しいだけに博多よりも寧ろ此の福岡の方が近代的色調を帶びた町並をしてゐる。

こゝには公園が東西に別れて二つ在る。西公園は博多灣の景勝を一目に見渡せる點に於て、筑

紫富士の眺望に最好の地點だと云ふ點に於て、優つてゐるが、東公園は有名な千代の松原で、松が細かな影を下の砂に落してゐる。春なんか、こゝらを歩いて居ると、自分までが畵中の人に成つて了つたやうな氣がする。博多の人にどつちが可いかと聞くと、『さァ』と首を傾けて、『矢張り東でせうな』と云ふ。それと云ふのも、西公園は、只さへ寂しい福岡の方の果にあるからで、どうしても賑かな博多寄りの東公園に團扇が上るのらしい。

千代の松原を向ふへ抜けると、直ぐ傍に吉塚の停車場がある。有名な箱崎八幡宮は、こゝから歩いて行つても、間の無い所で、其松原の中に在る古錆びた金碧の社が、それだ。醍醐天皇の宸筆だといふ『敵國降伏』の大扁額が、樓門の上に海を壓して高く懸かつてゐる。

直ぐ近くに龜山上皇と日蓮上人との銅像がある。

こゝから汽車に乘ると、弘安役に元艦が押寄せた地點だといふ多々良濱を通つて、仲哀天皇と神功皇后とが熊襲御親征の時の行宮があつた香椎までは、十分程もかゝれば行けるんだし、そこで仲哀・神功の御兩靈を奉祀した官幣大社香椎宮に參拜して、例の博多灣鐵道で、それから海の中道を見に行つても、三十分とかゝらないんだから、どんなに悠然しても晩までには、博多まで

歸つて來られると思つたが、一緒に行つた友人が、何處かで芥屋の大門の話を聞いて來て、是非これから行かうと言出したので、急に一般方略を變更せねば成らなかつた。

『七ツ釜の玄武岩洞なんかより、ずつと大規模なんだつて言ふよ』

と道々でも友人は頻に、話の請賣をやつてゐた。

電車と輕便鐵道とで前原まで行つて、あと三四里の道は馬車で搖られて行つた。

玄武岩洞のある所は、大戸崎の最北角だ、大きな岩が海を覗き込んで居たり、天を衝くやうに直立したりしてゐるのが皆玄武岩で、前には玄海灘の怒濤が、恐しい勢で足元まで打寄せてゐる。案内に伴れて來た男が、

『こゝまでいらつしたからには、下の洞を御覽にならなければ』

と云つて、舟を賴みに行つて呉れたが、生憎今日は船が出せないさうで、と本意ない顏をして歸つて來た。

こゝから下りて北東の鼻の下へ廻ると、奥へ五十間程もある深い洞門が海水の侵蝕作用で出來てゐるのださうで、其中へ入ると洞の天井から周圍までが悉く正五角形又六角形の玄武岩で、ま

るで大きな龜の甲を見るやうだと、其男は歸り道に話をして『折角いらつしたのにねえ』と何度も殘念さうに繰返して居た。

其代り海の中道は、翌日朝早くから行つて、ユックリ見る事が出來た。

海の中道では、白い砂嘴が長く一筋に續いて、其上に松の綠色が、綺麗に靡いてゐる。そして、其左右には碧い海が、クッキリと其外線を際立つたやうに劃つて居た。天の橋立に比べると規模は小いが、其規模の小い所に、却つて美しさがあると思つた。向ふに續いて志賀島のあるのも、風情に成つてゐる。こゝを詠んだ詩では、賴山陽の、『松林橫截大洋潮、萬疊波間碧一條、此景何緣在西僻、直須奴僕命天橋』といふのが、一番好く光景を說明し得てゐる。

香椎から出て、豐公の島津征伐の時に立花統虎が、そこで島津軍の前進を阻止した所だと云ふ有名な立花山を右に見て行くと、福間といふ小驛があつて、其次に又赤間といふ小さな停車場がある。

此邊へ來た人は、必ずこゝで下りる事を忘れては成らない。此邊は非常に早く人文の開けた所で、有名な宗像三神を祭つた官幣大社宗像宮が驛から西方一里半にある外、西南福間町に近い津屋崎町には、俗に運の神と云ふ宮地嶽神社がある。又北へ三里程行くと、我國の沈鐘傳說中最有名なロマンスを持つた鐘ケ崎がある。昔三韓から持つて來た梵鐘が、こゝの前海で沈んだといふのだ。

『宗像大宮司左兵衞尉興氏、かねのみさきの鐘を上んとするにあがらず、又海面にあやしきものあり、勝浦の海人に命じて取上るに老翁の面なり、則此面を田島の宮に納む』

と云ふやうな事が、『宗像軍記』に書いてある。

此の鐘ケ崎から海上地の島を隔てゝ、向ふに見える島は大島で、安倍宗任は最後の囚後此島で死んで、島内の安昌院といふ寺に其墓を殘したと云はれてゐる。

此邊へ來ると、汽車はスッカりもう海岸を離れて、丘陵の中を進んで行つて居る。葛ケ岳だの戸田山だのと云ふやうな山が、右にも左にも見える。遠賀川まで來ると、やつと少しは眼界が開けて來る。

遠賀川の鐵橋の上から見ると、川の兩岸に沿うて細く長く其流域の平野が南北に續いてゐる。

こゝで下りると、日本武尊の遺蹟だといふ八劍神社や、神功皇后時代の古社だといふ此地方の